日本語文章における重要語の出現位置に関する分析

——保田與重郎『日本の文學史』での人名と作品名の出現傾向について——

谷口敏夫

1　はじめに

文章あるいは文学を言葉の多寡によって理解しきれるとは思わない。たった一つの言葉が，たった一度使われただけで，人のこころを揺さぶり，その文学の基盤をささえることも，よくあることである。

しかし，文学とは言葉を使うものであった。言葉を使う限り，平均して言葉の多寡は，作者の気持ちを色濃くあらわすことも，よくあることである。

本稿は，言葉が作品の中でどのように使用されているかを，数値だけではなくて，パターン（散布図）としてあらわすことによってその傾向をたしかめ，そこから知識の断片を抽出する方法について考察したものである。

2　調査の目的と概要

2．1　目的

本稿は，効果的な全文情報検索システムを構築する基礎研究として，大量文章からの知識抽出の手法を考究することに目的を持っている。すなわち，日本語文章における重要語の説明箇所を，文章の構造（章節段）に沿った，各階層構造レベルにおける用語の最高頻度によって決定することの，妥当性を調査したものである。これを『全文における用語の「階層構造中での最大頻度」によ

る，重要箇所の判定』とした。

このためにまず，日本語文章に現れた一定以上の頻度を持つ重要語の散布を，文章構造（章，節，段）に沿って見ることにより，用語の出現パターンを抽出した。これは各用語の図書全文中での全体像を把握するためである。

次に，その文章構造の中での各レベル（章，節，段）における，特異点と考えられる最大頻度を辿り，文章階層構造の枠内で最大頻度を持つ段落を抽出し，これを分析対象とした。この分析対象を一般的知識及び文章著作者の固有の知識という観点から勘案し，用語に対する説明段落としての妥当性を判定した。

この方法による，特定用語の文章構造に沿った最大出現頻度による段落内容の適合性は，10段階評価で6を得た。

2．2　調査環境

● テキスト

対象となる図書を保田與重郎『日本の文學史』新潮社，昭和四十七年とし，以後これを「テキスト」と呼称する。このテキストに章番号などを追加し，あ

日本の文学史

1	序説	全史	9	勅撰和歌集	中古	17	乱世の態度	中世
2	神話	上代	10	日記と物語	中古	18	乱世の文人	中世
3	神詠	上代	11	文学の道	中古	19	深層の文学	近世
4	日本武尊	上代	12	新古今和歌集	中世	20	国学の恢弘	近世
5	神を祭る文学	上代	13	遠島御歌合	中世	21	文芸の新しさ	近世
6	万葉集の濫觴	上代	14	しきしまのみち	中世	22	志士文学	近世
7	万葉集の成立	上代	15	古典のまなび	中世	23	文明開化の超克	近代
8	都うつり	中古	16	南朝の文学	中世	24	日本の文学の未来	近代
						25	後記	現代

る程度の時代区分を添えたものが，上の表である。

● 重要語と用語集合

重要語の選別は，すでに発表した実験［重要語］から，同テキスト中で頻度20以上の人名と作品名を選び，それに「西行」と「柿本人麻呂」を追加した。こ

の重要語は，関係するいくつかの用語の集合として扱ったので，以後これを

用語集合

1）日本武尊	9）西行	17）松永貞徳
2）古事記	10）新古今和歌集	18）芭蕉
3）万葉集	11）後鳥羽院	19）蕪村
4）柿本人麻呂	12）藤原定家	20）契冲
5）大伴家持	13）源実朝	21）本居宣長
6）古今和歌集	14）平家物語	22）伴林光平
7）紀貫之	15）北畠親房	
8）源氏物語	16）太平記	

「用語集合」と呼称する。用語集合の代表名称は上の22語である。

2．3　用語の出現パターンと分類

この22の用語集合がテキスト中にどのように現れ，それをどのように分析したかの詳細は３章に詳述する。ここではそれに先だって，用語集合がテキスト各章で出現する散布図の概略をみることにより，用語集合の出現パターンを見，その傾向に従っておおよその分類をしておく。

用語集合の各要素となる用語には全文中の出現位置があらかじめコード化してある。たとえば「14010301　定家」は，数字の先頭から章節段文に各２桁をわりふってあるので，テキストの14章１節３段１文に「定家」があるということがわかる。このような情報を持った用語集合を，ＭＳエクセルのグラフ作成機能を用い，散布図および近似式（移動平均）で描き，章レベルでのパターンを得た。

この22の用語集合に「文学」という一般用語を加え，合計23の用語集合のパターンを直感的に分類したのが，「表：用語集合の章レベル出現パターンによる分類」および「付録１　用語集合の出現パターン（章レベル）」である。

［重要語］ 谷口敏夫「日本語文章における要約と自動索引」光華女子大学研究紀要，33，pp47-81，1996.12

表　用語集合の章レベル出現パターンによる分類

大分類	分　類	傾　　向	記号	用語集合
A	A文学型	間断なく平均して出現する	A 1	文学
			A 2	万葉集
			A 3	古今和歌集
			A 4	西行
B	B芭蕉型	間断なく出現し，後半に重点箇所がある	B 1	芭蕉
			B 2	契沖
			B 3	平家物語
	BB親房型	間断なく出現し，前出現，重点箇所，後出現がある	BB 1	北畠親房
C	C宣長型	前出現したあと，間隔を置き，後半に重点箇所がある	C 1	本居宣長
			C 2	伴林光平
	CC古事記	前半に重点箇所があり，間隔を置き，後出現がある	CC 1	古事記
			CC 2	日本武尊
D	D源氏型	前出現のあと，中半に重点箇所があり，後出現がある	D 1	源氏物語
			D 2	後鳥羽院
			D 3	藤原定家
			D 4	松永貞徳
E	E貫之型	狭い範囲で，前出現直後に，重点箇所直後に，後出現	E 1	紀貫之
			E 2	大伴家持
			E 3	太平記
F	F実朝型	極狭い範囲で，重点箇所	F 1	源実朝
			F 2	柿本人麻呂
	FF蕪村型	極狭い範囲で，重点箇所，後出現	FF 1	蕪村
			FF 2	新古今和歌集

表および付録１から，本テキストでの重要語の用例には顕著な特徴があることがわかる。特にテキストが「文学史」という編年体であることから，あらかじめ章の時代区分知識が得られ，出現パターンから見て用語集合と章との合致が明瞭になった。しかしこの段階では，Ａ～Ｆの大分類は，用語集合のおおよその出現パターンを分類したものであって，これは用語の「共起」に起因することが類推できるだけである。たとえばＤ：源氏型に分類した後鳥羽院と藤原定家が相似のパターンを示すのは，新古今和歌集を共に編纂したという歴史的事実によって，両者が共起せざるを得ない必然性がある。

本稿では用語の「共起」にはこれ以上言及せず，この結果を参考とし，さらに節・段落のレベルまで分析を進めた。その分析例を「文学」にとり３章に詳述し，また他の22用語集合についての詳細は「付録２　用語集合分析結果」に記した。

3　用語集合の分析例

ここでは典型例として，用語集合のテキストにおける散布状態を分析した過程について述べる。例とした用語は一般語に近い「文学」である。

また，以下に記す各図表の名称は，「文学（0）」が用語集合の要素を表し，「文学（1）」がテキスト全章での用語の出現パターン，「文学（2）」は特定章での，「文学（3）」は特定節での用語の出現パターンを表している。

3．1　用語集合について

表「文学（0）用語集合」とは，用語「文学」の出現を調査するに際して，「文学」という用語だけではなく，関連する用語を含めた集合を表すものである。本事例での集合には「文学」という同一文字列を持つものだけを含ませた。

たとえば「文芸」は集合に入れなかった。これは複合語の原形を保ったまま用語を抽出したことによる。付録2の分析例では，同義語に近い用語を含んだものもあり，北畠親房では，悉皆調査の上で「准后」も親房の用語集合に含ませている。「文学上」や「文学的」などのように，上や的を接尾するものも，その原形を保存したまま使用した。これは保田の文章上のニュアンスを維持するために一用語として扱った。

この「文学」用語集合表は，対象とした用語と同じ文字列を含む，それより長い文字列長を持つ複合語や，接頭・接尾辞付きの用語を関連用語集合としたものである。その他，一般的な語彙統計とは異なる用語集合の抽出結果を用いているが，この件に関しては別稿で述べる予定である。

表（0）の先頭行に記した「総数：739　異なり：104」は，この例では「文学」を含む関連用語集合の総出現数を「総数」とし，各用語の種類数を「異なり」として記した。表によれば「文学（388）＋文学史（76）＝464」であり，これは総出現数739の約63％を占めている。よってこの表はめやすとして，用語集合「文学」とは，「文学」と「文学史」とによって代表される言葉であると考えて良い。

文学(0)用語集合　　総数：739　　異なり：104

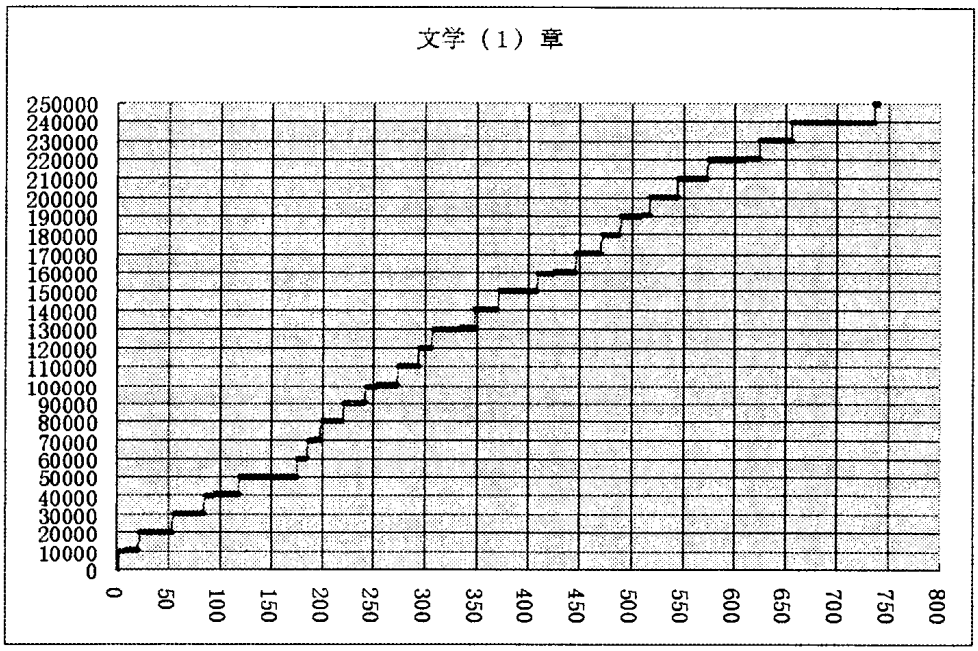
文学	388	文学作品	3	近世文学界	1	創造的文学	1	文学史的作業	1
文学史	76	文学的情緒	3	古典文学	1	大衆的文学	1	文学史論	1
日本文学	26	平安朝文学	3	古典文学時代	1	大衆文学	1	文学詩歌	1
文学的	19	近世文学	2	五山文学	1	通俗文学作者	1	文学書道	1
王朝文学	15	国文学	2	後期平安文学	1	通俗流行文学	1	文学常識	1
文学史上	15	国文学史	2	国粋文学運動	1	低俗文学	1	文学的教養	1
漢文学	13	志士文学	2	国民文学	1	日記文学	1	文学的興味	1
文学論	13	政治文学	2	市民文学	1	日本文学形成	1	文学的誠心	1
文学上	11	日本文学史上	2	詩歌文学	1	日本文学史	1	文学的雰囲気	1
詩文学	9	文学研究	2	自然主義文学	1	非文学的	1	文学不在	1
文学者	9	文学書	2	純文学系	1	物語文学	1	文学文章	1
文学観	8	文学性格	2	小説文学	1	文学化	1	文学論上	1
近代文学	6	文学発想	2	上代文学	1	文学界	1	民族文学	1
通俗文学	6	流行文学	2	上代文学史	1	文学観上	1	明治以後文学	1
新文学	4	王朝古典文学	1	浄土教文学	1	文学観念	1	明治文学	1
文学史観	4	王朝女流時代	1	正統文学	1	文学芸術上	1	遊蕩文学	1
御用文学	3	王朝文学時代	1	西欧文学	1	文学芸能	1		
純文学	3	海彼文学	1	西洋文学	1	文学作者	1		
宣伝文学	3	外国文学	1	西洋文学風	1	文学作法	1		
大文学	3	漢文学教養	1	説教文学	1	文学雑誌	1		
伝奇文学	3	漢文学系統	1	説話文学	1	文学史的意義	1		
非文学	3	宮廷女流文学	1	戦争文学	1	文学史的現象	1		

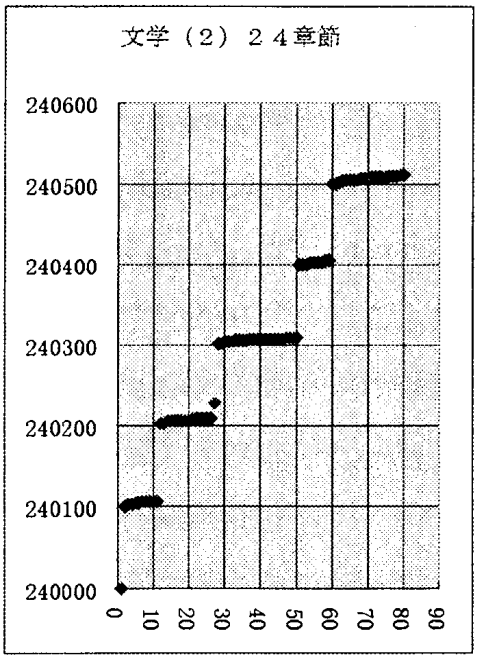
3．2　章単位散布図と分析例

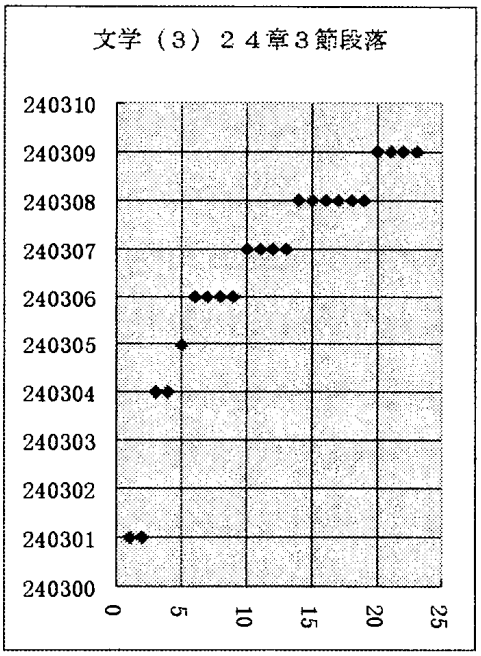
● 章レベル散布図の見方

各散布図の見方は「文学（1）章」を例にすると，対象テキストの文学史という性格に合わせてある。表「文学（0）」によって得た用語集合頻度を，テキスト各章でグラフ化したものである。縦（Y）軸は原点から上方に向けて1章（10000）から25章（250000）まで目盛り，縦軸の各数値を10000で割った数が章番号を意味している。これは時間軸であって，下から上代，中古，中世，近世，近代と見てよい。また横（X）軸は，用語集合の各章（時代）における用例の数値，すなわち頻度である。頻度総数は各用語集号によって異なるので，5頻度を単位［頻度区切り］として，グラフの横幅が均等になるように調整してあ

［頻度区切り］「文学」は総頻度数から特例として章で50，節で10，段で5とする。







る。章レベルでは散布図の近似曲線として区間２の移動平均を用いている。

散布図を判断する目安は，左側の章（時代）を見て，マークが右にどれほどあるのかによって，その章での用語集合の使用頻度がわかる。章レベルでの曲線はおおよそのパターンを示したものであり，付録１に見られるマークをともなわない垂直に近いカーブは，あるいくつかの章（ある時代）を飛び越してい

ることを意味している。

● 章レベル散布図で類推できる内容

これらの縦軸と横軸との関係から，いくつかのことがわかる。まず，「文学」は各章途切れなく出現している。どの章の高さにおいてもマークが密集し，かつその章での出現回数を意味する横軸の水平長が，ほぼ同じ長さとなっている。

これは「文学」が一般用語に近い姿で，テキスト中に平均して使用されていることを意味する。このようなパターンを示す例を，本稿では一般用語パターンとして，「A：文学型」とする。一般用語パターンを示す用語は，他に「万葉集」や「古今和歌集」がある。これらは共通して，各章途切れなく平均して出現し，線姿は右上がり［右上がり］の対角線にほぼ一致する。

次に，各章平均して出現するとはいっても，詳細に図「文学（1）章」を見てみると，5章（50000），22章（220000），24章（240000）での横軸の水平長が比較的長い。この数値は，57，51，80となっており，全章中24章が80の頻度を持ち最大である。この80回は総出現数739の10.8％であり，各章平均30の2.7倍である。「文学」用語集合が24章で最大の出現を見る事実から，次に同章の各節における散布図を分析例として記す。

3．3　節単位散布図について

図「文学（2）24章節」のグラフ構成は図「文学（1）章」とほとんど同じである。ただし，縦軸の最大値の直前の目盛りが当該章での最終節数を表している。図での最大値は240600であるから，その直前の目盛り240500が24章5節であり，これは24章内での最終節である。また，24章の章名を意味する240000に用語が1つ出現しているが，これは同章名「日本の文学の未来」から抽出された「文学」である。

［右上がり］ グラフに散布させる用語集合は最初から章別に分類してあるので，右下がりの線姿はあり得ない。また，付録2で分析する各用語集合の総出現数はそれぞれ異なるが，散布図の形状は同一にした。よって各線がどれだけ対角線に一致するかは，用語の性格を計る目安となる。

文学（２）では，「文学」の頻出する節が３節（240300）と５節（240500）であることがわかる。３節の場合23の頻度，５節の場合21の頻度を持つ。これらの実際の様子は，３節で一般的な「文学」が頻出し，５節では「自然主義文学」，「西欧文学」，「王朝文学」というジャンル用語がある。

すでに24章での頻度が80と分かっているので，全５節での平均は16頻度となる。よって３節，５節での各々23，21頻度はやや高頻度になる。実際には上述のように，３節と５節とでは同じ用語集合の中でも，用語の傾向に小さな違いはあるが，ここではその異同に言及しない。

さて，24章では第３節において23の最大頻度を示した。これは用語集合「文学」の24章頻度数80に対して，28.8％である。総出現数739に対しては3.1％である。次に，この24章３節内での段落単位の出現頻度をみてみる。

３．４　段落単位散布図について

「文学（３）24章３節段落」は，段落数が９段あり，これは同図の縦軸が最大240310を持ち，この直前の240309によって節内最終段落240309（第９段）を示している。節内段落での最大頻度は，第８段落における６頻度であり，これはすべて「文学」である。節内全９段での用語集合「文学」の頻度傾向は，第６段から９段に連続して出現し，このうち第８段が最大である。

３．５　分析例

ここで『日本の文學史』第24章「日本の文学の未来」から第三節八段を引用する。

● 引用240308

24030801-8「現実を凝視するといふ考へ方には，始めから色がついてゐた。現実のくらさや因果因縁の不吉なものを描くといふことは，過去何百年に，仏教の説教師が，経典の絵どきとして描いてきたものと，趣旨の大体は変りない。ただ政治的な見解を加へて，民権とか，自由と云ふ，流動的な時代のイデオロギーだけにたよることが文学の立場とすれば，文学は誰の救ひともならぬだらう。文学の使命は救ひであるのが当然だが，時の流行に投じて，世に媚びて版を重ねる文学，通俗的な娯楽の

読物に文学の名を冠することも，通常の現象である。多くの人によまれる小説本を書くといふことも，その作者の満足である。しかし史上の文士が文学にかけた本懐には，それ以上のものがあつた。明治から二代，三代と生きてきた文士には，さういふ本懐を意識した人が何人かあつた。戯作者の心意気に徹するといふことも，職人気質とか職人冥加といふ考へ方として見て，ただの売文より次元の高さがあつた。」

引用24030801-8〔引用番号〕からテキスト全体での「文学」をみてみると，25章が「後記」にあたり，この24章が本文としては最終章の「日本の文学の未来」であり，保田が文学史を記すにあたっての結末部分である。このテキスト全体の中で，「文学」という一般概念を知識として抽出するのは，その言葉が一般語として使用されていることから，困難であることが予想できる。しかしながら，各章，節，段落での最大頻度をもとにたどり着いたこの24章３節８段を詳細に分析してみると，この段落をある程度妥当な知識として認定することも可能であるとわかる。

すなわち保田はこの段落で，用語「文学」を用いて彼の「文学」への感懐を，第３と４文とを中心にして，概略次のようにまとめている。

「文学は時代のイデオロギーに頼ると，誰の救いにもならぬ。文学の使命は救いである。文士の中には，そういった本懐を持った者がいる。」このようなまとめは，テキスト全体の本旨と直接に関係してくる。しかしそれを解き明かすには，もう少し他の用語についても分析を繰り返す必要がある。付録２では，他の22用語集合について，本章での例示にしたがって，用語集合の頻度と，そこに記された知識との関係を調べ，用語集合の密度と保田ないし保田の本テキストにおける「知識」との関係をみてみた。

〔引用番号〕 引用例24030801-8とはテキストの24章３節８段落を意味する。また数字の末尾２桁は，文番号を意味する。

4　結　　果

23の用語集合を調査分析した結果を「表『日本の文學史』における重要作品・人名の，階層構造頻度の分析」にまとめる。同表は，左に用語集合を並べ，上に調査項目をおいた。用語集合のうち「文学」は参考に止め，表下部の平均からは除いた。

上段［全体］はテキスト全体での頻度を中心にしている。［章～段レベル］は，最大頻度を持つ章節段を漢数字で示し，次にそれぞれのレベルでの用語集合頻度と，その頻度を全体頻度で割った百分率を示した。

［判定］は［判定対象］で選ばれた段落を谷口が解釈し判定した結果である。各用語集合に関する判定の経緯は付録２に記した。この項目は三つに分けてある。［一般知識］とは，用語内容に関して一般教養レベルで理解できる知識を，対象段落から得られるかどうかを，五段階で示したものである。［保田知識］とは，用語内容に対する保田固有の考えが得られるかどうかを五段階で示したものである。［総合］は，［一般知識］と［保田知識］の判定結果を加算し，十段階で表した数値である。いずれも数値が高いほど良好な知識を得たことになる。

● 頻度の結果

分析対象とした用語集合22種の全体平均頻度は47件であり高い。これは一般用語といえるほどの高頻度を持つ万葉集（157）と芭蕉（124）の影響によっている。

章レベルでの平均頻度は20件であり，これは最高頻度章に，全体頻度からみた42.4％の用語出現があるといえる。節レベルでの平均頻度は12件であり，これは最高頻度章・節に，全体頻度からみた25.2％の頻度があるといえる。

段レベルでの平均頻度は５件であり，これは最高頻度章・節・段に，全体頻度からみた9.5％の頻度があるといえる。

以上から，本テキストでは，文章階層構造に沿った各レベルでの重要語の頻度は，百分率でおおよそ100:42:25:10の割合になるといえる。目安としては，

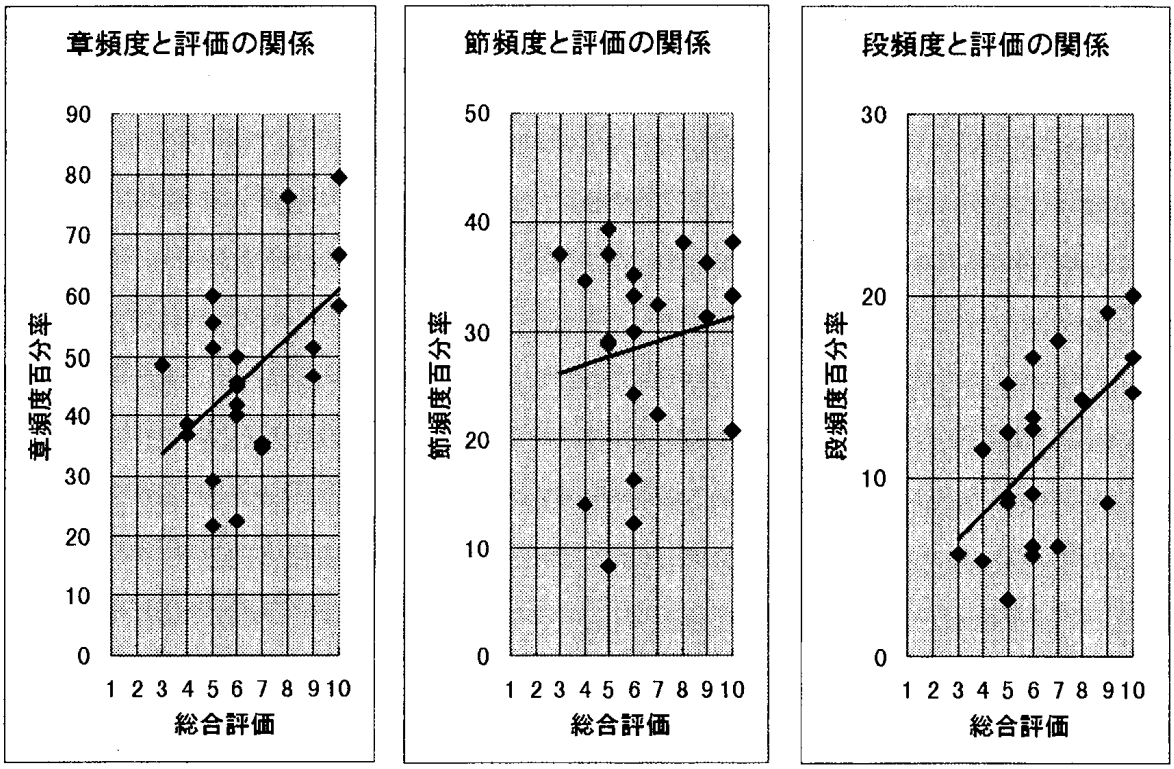
表『日本の文學史』における重要作品・人名の，階層構造頻度の分析

	用語集合	全体		章レベル			節レベル			段レベル			判断対象		判定			参考	
		(z)全体頻度	異なり	最大頻度章	(a)章頻度	章%(a/z)	最大頻度節	(b)節頻度	節%(b/z)	最大頻度段	(c)段頻度	段%(c/z)	判定段落	段落文数	一般知識	保田知識	総合	パターン	大分類
0	文学	739	104	二十四	80	10.8	三	23	3.1	八	6	0.8	240308	8	3	5	8	A1	A
1	日本武尊	35	2	四	21	60.0	一	13	37.1	一	3	8.6	40101	7	2	3	5	CC2	C
2	古事記	57	12	二	21	36.8	二	8	14.0	三	3	5.3	20203	6	2	2	4	CC1	C
3	万葉集	157	21	七	34	21.7	一	13	8.3	三	5	3.2	70103	13	2	3	5	A2	A
4	柿本人麻呂	24	3	七	11	45.8	三	8	33.3	五	4	16.7	70305	11	3	3	6	F2	F
5	大伴家持	30	4	七	20	66.7	四	10	33.3	十三	6	20.0	70413	23	5	5	10	E2	E
6	古今和歌集	49	10	九	17	34.7	三	11	22.4	三	3	6.1	90303	15	2	5	7	A3	A
7	紀貫之	35	2	九	18	51.4	四	11	31.4	一	3	8.6	90401	9	4	5	9	E1	E
8	源氏物語	49	7	十	11	22.4	三	6	12.2	二	3	6.1	100302	7	1	5	6	D1	D
9	西行	24	4	十一	7	29.2	二	7	29.2	六	3	12.5	110206	5	2	3	5	A4	A
10	新古今和歌集	24	1	十二	14	58.3	一	5	20.8	一	4	16.7	120101	22	5	5	10	FF2	F
11	後鳥羽院	55	5	十二	22	40.0	二	9	16.4	三	5	9.1	120203	24	2	4	6	D2	D
12	藤原定家	47	6	十四	22	46.8	一	17	36.2	三	9	19.1	140103	20	4	5	9	D3	D
13	源実朝	26	3	十三	10	38.5	三	9	34.6	一	3	11.5	130301	7	2	2	4	F1	F
14	平家物語	33	5	十七	17	51.5	一	13	39.4	八	5	15.2	170108	14	1	4	5	B3	B
15	北畠親房	30	7	十六	15	50.0	二	9	30.0	二	4	13.3	160202	15	1	5	6	BB1	B
16	太平記	35	1	十七	17	48.6	一	13	37.1	二	2	5.7	170102	15	1	2	3	E3	E
17	松永貞徳	45	7	十八	25	55.6	四	13	28.9	五	4	8.9	180405	7	2	3	5	D4	D
18	芭蕉	124	10	二十	52	41.9	四	30	24.2	九	7	5.6	200409	19	2	4	6	B1	B
19	蕪村	21	1	二十一	16	76.2	四	8	38.1	一	3	14.3	210401	6	5	3	8	FF1	F
20	契沖	34	3	二十	12	35.3	一	11	32.4	七	6	17.6	200107	13	2	5	7	B2	B
21	本居宣長	71	7	二十一	32	45.1	二	25	35.2	八	9	12.7	210208	10	2	4	6	C1	C
22	伴林光平	34	2	二十二	27	79.4	一	13	38.2	七	5	14.7	220107	14	5	5	10	C2	C
	1～22平均	47			20	42.4		12	25.2		5	9.5		13	3	4	6		
注		全頻度				章%			節%			段%		文	五段階		十段階		

用語の四割二分が最高頻度章に，その章の最高頻度節に全体の二割五分が，その節の最高頻度段に，全体の一割が出現するといえる。よって本稿での調査は，文章階層構造の最高頻度に沿って，対象用語の一割を持つ段落を判定したことになる。

● 頻度と評価の関係

評価結果については，表から［一般知識］の平均が五段階評価で３を得ている。しかし評価１の用語集合もいくつかあり，本テキストから各レベル最高頻度によって得た一般的な知識の妥当性は低い。これは保田與重郎が研究者とし



図：頻度と評価の関係

て教科書的な文学史を書いたのではなく，文人・評論家・思想家として本テキストを執筆したことによると考える。

一方［保田知識］については，五段階評価で4を得ている。この判定経過は付録2にその経緯を添えたが，判定者谷口の主観が大きく，文学解釈の問題になる。詳細は今後の研究に託し，本稿ではこの判定を妥当とする。［総合］評価は，以上から平均6の結果を得た。

次に，この各用語集合の評価を，各レベルでの用語の頻度百分率（%）と関連付けてみた。その散布図と近似直線を「図：頻度と評価の関係」に示した。図は，縦軸に各章節段レベルでの用語集合の頻度%を示し，横軸に総合評価を示した。

この図からは，おおよそのめやすとして，用語の頻度百分率が高いほど評価も高くなるという傾向をみた。

5 まとめ

本稿の目的は『全文における用語の「階層構造中での最大頻度」による，重要箇所の判定』であった。この結果がある程度の妥当性を得るならば，全文に対する有効な情報検索が，比較的簡単な手法によって可能となる。

そのために，まず保田與重郎『日本の文學史』から選んだ23の重要語を，テキスト章レベルでの出現パターンによって分類した。この分類によって，用語のある程度の傾向を見た。この結果は「付録１　用語集合の出現パターン（章レベル)」としてあげた。テキスト内容が「文学史」であることから，大きく分けると，「文学」や「万葉集」は一般用語に近く，万遍なく使われていることが分かった。一般用語に近いが，ある章（時代）に特徴的な高頻度を持つ「芭蕉」のパターンもあった。その他の多くの用語は特定時代に限り使われており，章構造に応じた特徴的な出現密度をみせた。

次に重要語を章以下の節・段落という階層構造の中でとらえ，各レベルでの最大頻度を基にして，重要箇所としての段落を選定した。各レベルで同一頻度を持つ場合には，出現位置の早いものを選んだ。ここでの重要箇所としての妥当性とは，その段落から一般的知識および保田固有の知識が得られるかどうかによって判定した。段落内容を分析することによって，『全文における用語の「階層構造中での最大頻度」による，重要箇所の判定』の妥当性をみた。結果として，10段階評価で６の評価を得た。またこの評価は，各レベルでの用語の頻度が高いほど，評価も高い傾向をみた。

分析の経過において，他に副次的に判明したことは，序章にあげられたものは保田にとって重要度が高く，一般的で概略的な知識は特定章節の冒頭ないし前半段落に現れた，保田固有の批評は後半段落に現れた，などがある。

● 今後の課題

全文の文章階層構造にそった用語の頻度による重要段落の選定は，ある程度の有効性を得たので，今後はこの方式に従った検索システムを作ることを考えてみる。

本稿での判定の基準は付録2に示したように段落文を読解することによっておこなった。だが，解釈行為には判定者の経験や価値観が大きく影響するので，一般文章や専門文章に応じて，多様な判定基準を設ける必要もある。しかし重要な内容であるとか，一般的なとか，固有の知識とかいうのは求める者の多様性や受容時期にもよるので，こういったシステムは，システムが何を「解」にするかよりは，用語の「頻度」とか「共起」という客観的な事実の様態を求める人に分かりやすく提示し，そこから求める者が時機に応じて「解」の選択を容易にできるような仕組みが大切であると，考える。

ともあれ，本稿で章レベルの出現パターンを最初に得たとき，ある種の「発見のよろこび」を味わったことを，末尾に記しておきたい。

謝　辞

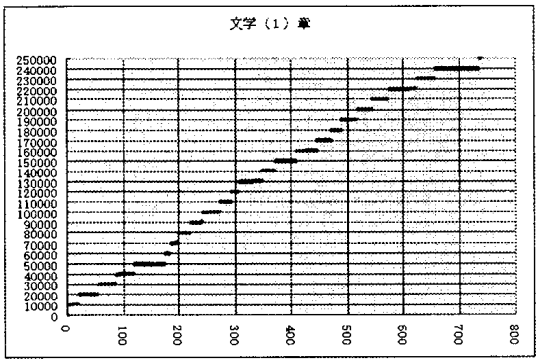
本稿を考究する際に最も多くの着想を得た論文［黒橋］は京都大学黒橋禎夫氏らによるものである。また用語の出現パターンに関してはここ数年大阪大学人間科学部川端亮氏とのディスカッションに依るところが大きい。記して感謝する。

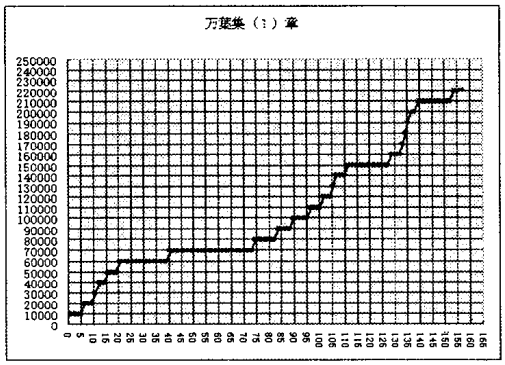
［黒橋］　黒橋禎夫，白木伸征，長尾真「出現密度分布を用いた語の重要説明箇所の特定」情報処理学会論文誌，38(4)，pp845-854，1997.411

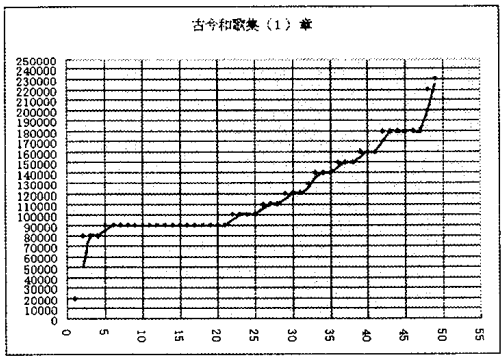
付録１　用語集合の出現パターン（章レベル）

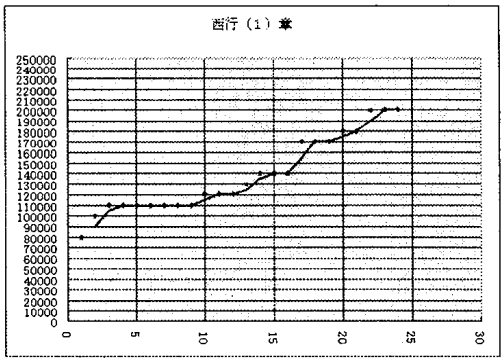
注：縦軸は章番号（数字を１万で割る），横軸は頻度数

Ａ：文学型

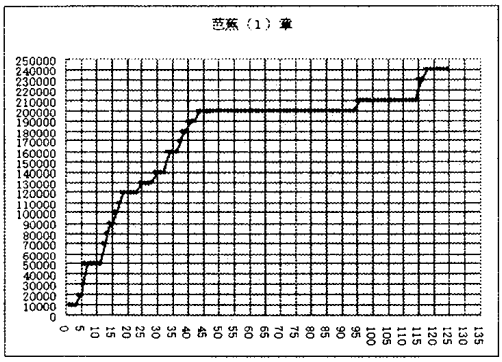


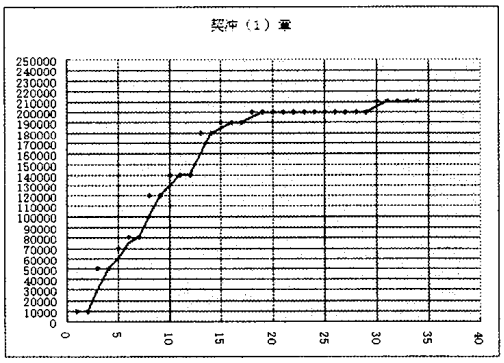


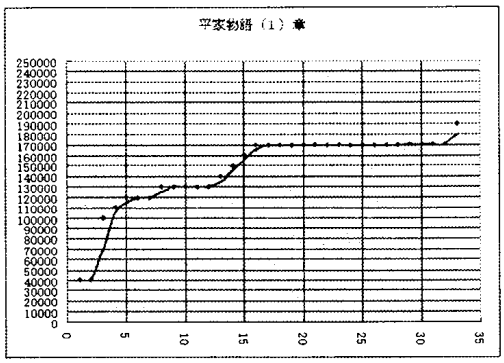




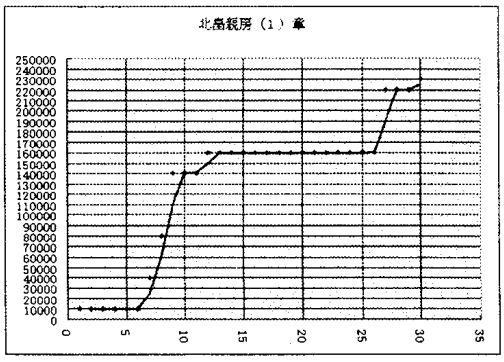
Ｂ：芭蕉型



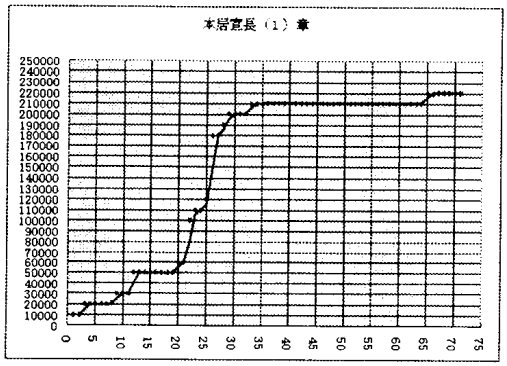


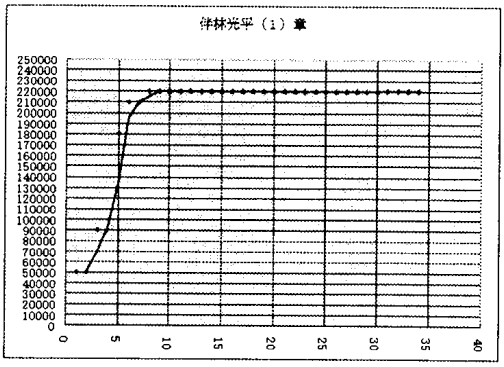


ＢＢ：親房型

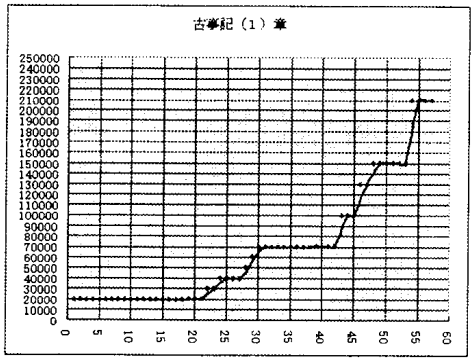


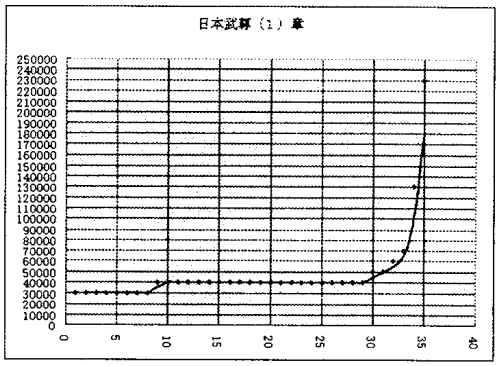
C：宣長型



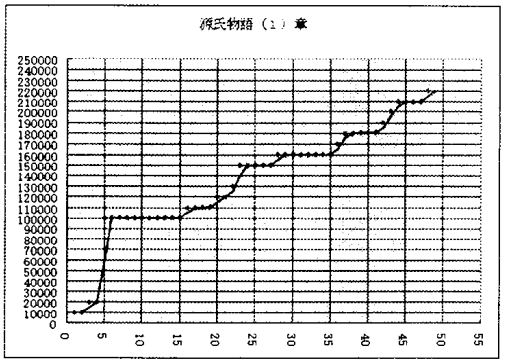


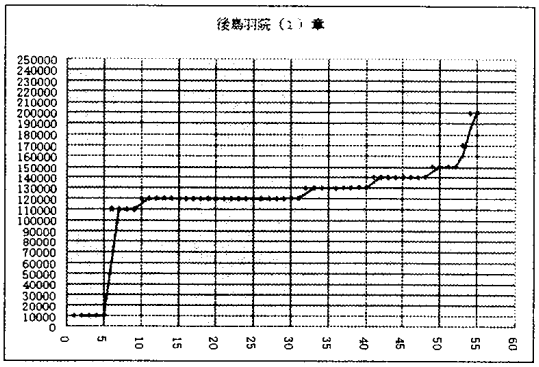
CC：古事記型（C型の反転）

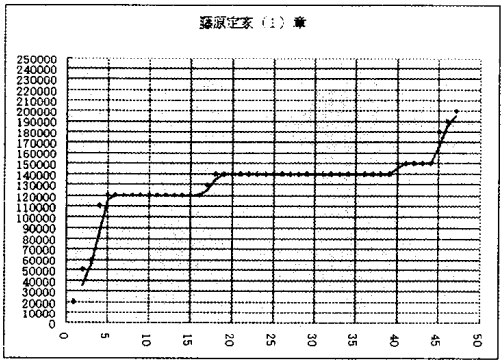


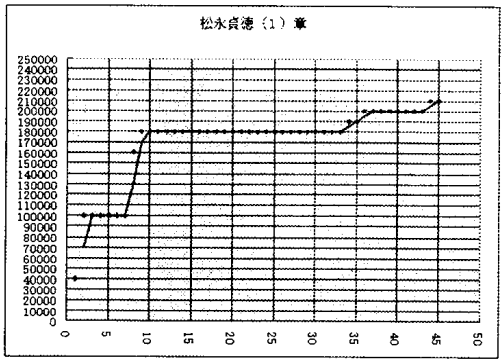


D：源氏型

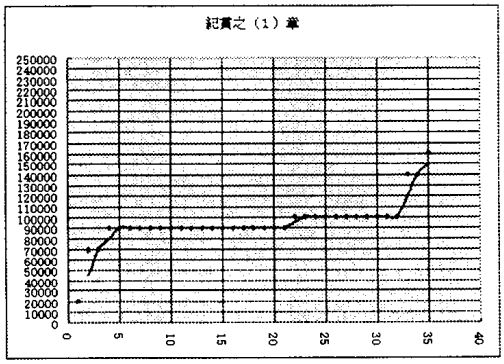


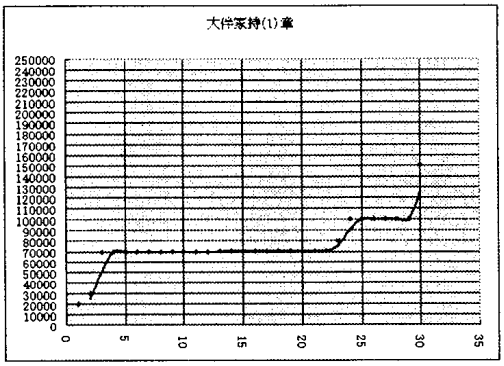


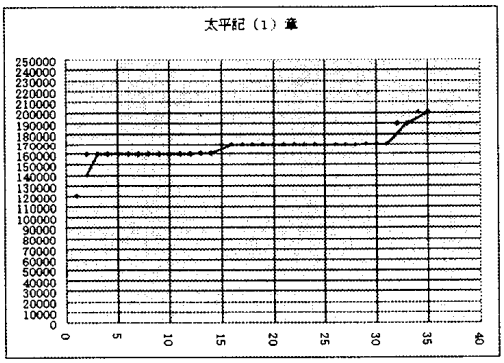




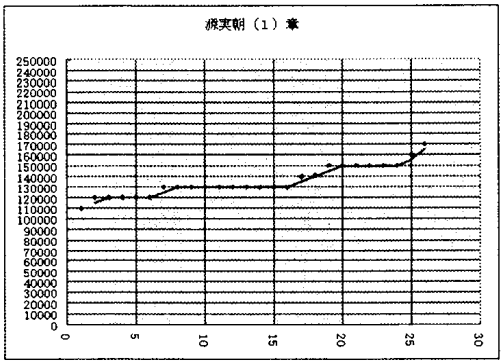
E：貫之型

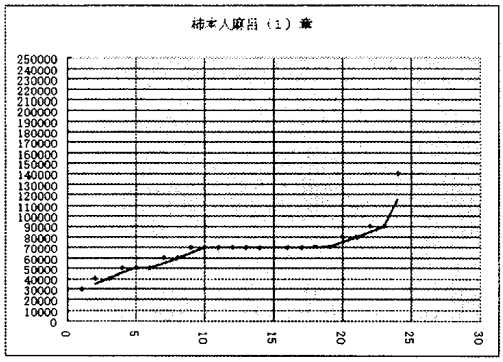




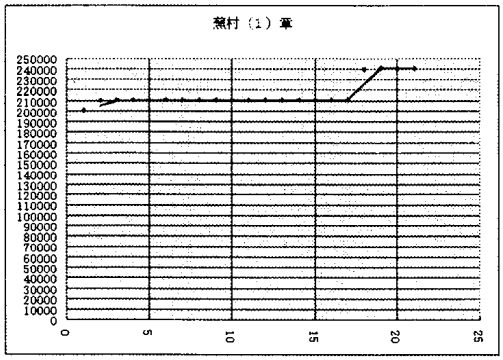


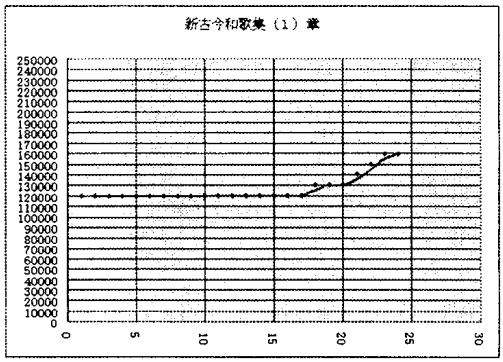
F：実朝型





F F：蕪村型





付録２　用語集合分析結果

１　日本武尊（ＣＣ：古事記型）

日本武尊は古事記では「倭建命」，日本書紀では「日本武尊」と表記されている。保田は本テキストで「日本武尊」をとる。景行天皇皇子，おばに垂仁天皇皇女倭姫命がいる。保田には『戴冠詩人の御一人者』がある。

１．１　用語集合「日本武尊」

● **日本武尊（０）**

用語集合［表］「日本武尊」は用語「日本武尊」および「日本武尊楊貴妃」の二つとした。後者は，保田の『民族と文藝』所載の「尾張國熱田太神宮縁記のこと並びに日本武尊楊貴妃になり給ふ傳説の研究」から一つの複合語と見なした。

「日本武尊」の異なりが二つと少ないのは，保田がほとんどの場合，書紀の表記を用いていることから倭建命の用例がなく，他に類例を収集できなかったことによる。日本武尊は個人名であり他に代替するものがなかった。これは「武

日本武尊(0)用語集合
総数:35　異なり：2

日本武尊	30202	日本武尊	40108
日本武尊	30202	日本武尊	40109
日本武尊	30203	日本武尊	40311
日本武尊	30208	日本武尊楊貴妃	40401
日本武尊	30210	日本武尊	40402
日本武尊	30210	日本武尊	40409
日本武尊	30307	日本武尊	40410
日本武尊	30407	日本武尊	40413
日本武尊	40000	日本武尊楊貴妃	40418
日本武尊	40101	日本武尊	50209
日本武尊	40101	日本武尊	50309
日本武尊	40101	日本武尊	60108
日本武尊	40102	日本武尊	70104
日本武尊	40103	日本武尊	130302
日本武尊	40104	日本武尊	230402
日本武尊	40105		
日本武尊	40106		
日本武尊	40107		
日本武尊	40107		
日本武尊	40108		

異なり	頻度
日本武尊	33
日本武尊楊貴妃	2
	35

［表］　用語集合の数値は６桁で，用語出現箇所を先頭から２桁毎に章節段で表している。

尊」だけの用例がなかったことも意味する。ただし，後述するが，四章一節の後半の段落では，「日本武尊」を「皇子」と言いかえている。保田が「皇子」と記すのは，「大国主命の皇子」，「高岳親王は平城天皇の皇子にて」，「高市皇子尊の城上の殯宮の時」，「天武天皇の皇子高市皇子の御子にて」，「大津皇子」，「有間皇子」など枚挙にいとまなく，「皇子」を集合には入れなかった。

1．2 「日本武尊」散布図

● **日本武尊（1）～（3）**

三章で頻度８，四章で頻度21と密集して出現し，特に四章では全頻度の60％（21/35）を占めている。三章と四章をあわせると82.9％（29/35）となり，非常に特徴的な頻度を持った用語集合といえる。

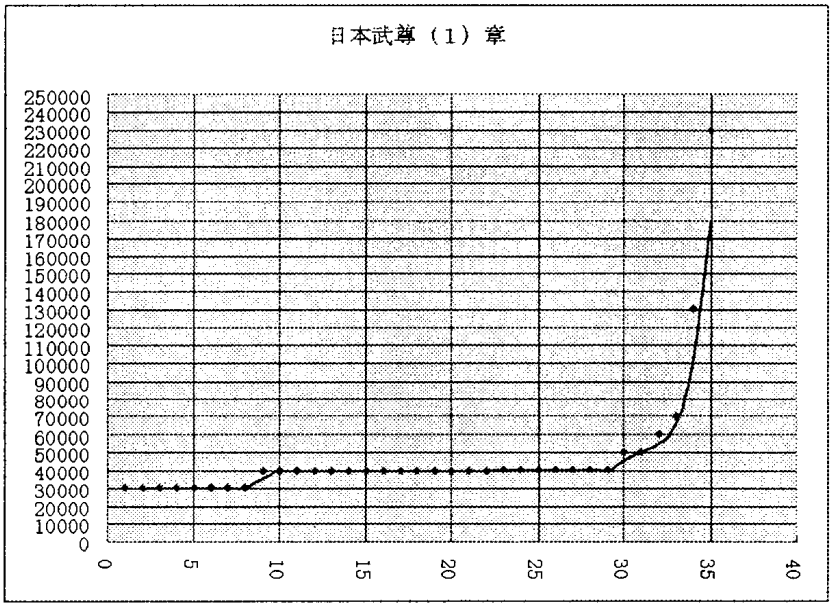
三章は「神詠」であり，日本武尊の歌を詩歌の絶品としている。これは保田の代表作の一つである『戴冠詩人の御一人者』が日本武尊を表していることからも，日本武尊を神の詠をうたった者として扱っていることによる。また四章は「日本武尊」であり，章名が用語集合「日本武尊」と一致していることから，頻度が高くなったといえる。ちなみにテキスト章名中，個人名は「日本武尊」だけである。作品名としては「万葉集」が六，七章，「新古今和歌集」が十二章にある。

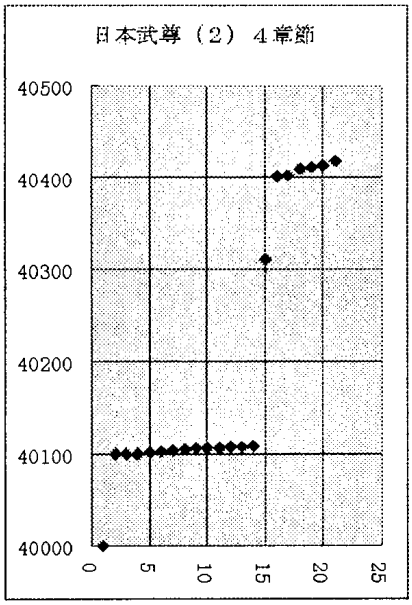
ここでは最大の頻度を持つ四章をえらび，その一節（40100）に頻度13を見，第１段落に頻度３を得た。

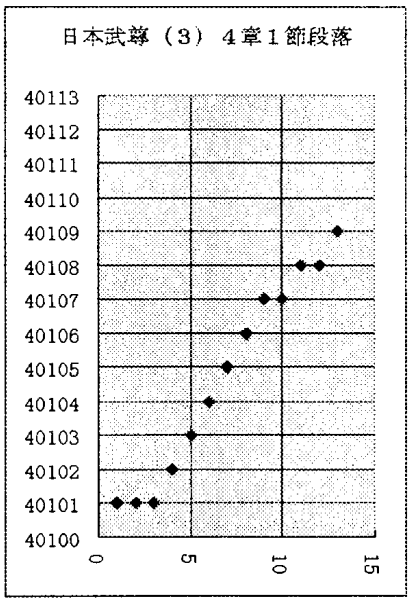
1．3 「日本武尊」分析

● **引用040101**

04010101-7「日本武尊の西東にわたる大旅行のさきには，磯城瑞垣宮（崇神天皇御代）の御時，四道将軍の派遣があつたが，それよりもさらに古く重い事実が，倭姫命の御巡幸だつた。皇大神宮を奉じての御巡幸のあとは，畿内といふ地域より東，西，北に少しづつ伸びでてゐる。この御巡幸の御遺跡は，千数百年このかたの記録伝承として残つたものである。日本武尊の御遠征も，記録伝承の上では千数百年来のものである。倭姫命の「世紀」の成立は，平安末期ごろまで遡ることがないといふのが，







旧来の通説だが，事がらの伝へや，地理の現場を求めると，まがふことのない古伝が多い。国々の遺跡伝承は，時にもつとも絶対的なものを現はすのである。この倭姫命の御巡幸は，日本武尊の大旅行のおごそかなさきぶれだつた。」

● **分析のまとめ**

「日本武尊」は，テキスト全体の中では特異な頻度を見せた。散布図でも明

瞭なように，第四章での密度は高い。さらに節レベルで見た場合も，四章一節に集中している。しかし一つの段落を特定したとき，引用040101でもわかるように，「日本武尊」という人物に関する一般的知識が，この段落に特徴的に現れているわけではない。

この段落は，日本武尊の遠征を，四道将軍の遠征および倭姫命の伊勢までの長い巡幸の中にとらえている。もちろん旅と歌と遠征というテーマから考えると，保田の日本武尊観の基本的なところに言及している段落と認定することもできる。また日本武尊に最も縁のある倭姫命の伊勢巡幸を，日本武尊の西征，東征に重ね合わせた意義深い段落であると認定することもできる。

しかし，一般的な知識やあるいは保田による日本武尊に関する知識を抽出することで考えるならば，この用語の密度によって導かれた段落は，知識として妥当ではない。

問題は二つある。

一つは，この章全体を読んでみると，途中から「皇子」を使用していることにある。このことによって，「日本武尊」の頻度は一部を表していることとなる。しかし，本稿では「皇子」を「日本武尊」と特定する手法を導入していないし，また煩瑣故に悉皆調査をして他の大津皇子などと区分することもしなかった。

次に，図「日本武尊（３）」でわかるように，この四章一節での頻度は非常に滑らかであり，このパターンは「文学」の図書全文でのパターンと相似である。すなわち，用語集合「日本武尊」は，全体の中では四章に特徴的な出現を見せるが，章名として「日本武尊」と記された章の中や，あるいはその先頭段落では，もはや一般語に等しい意味を持ってしまうという，事実である。

よって本分析では，用語集合「日本武尊」は，章，節レベルでは重要箇所を明示するが，段レベルではそうではないと結論つける。このような章名に含まれる「日本武尊」は，四章一節全体を知識単位としなければならないのであろう。

段落内容の分析から，一般知識２／５，保田固有知識３／５とした。

2　古事記（ＣＣ：古事記型）

古事記は天武天皇の遺志にしたがい没後二十五年をへて，元明天皇和銅五年（712）に完成した。天武の語部だった稗田阿礼が語り，太安万呂が記録編纂した。

2．1　用語集合「古事記」

● **古事記（0）**

「記紀」は上代文学での総称として選んだ。「古事記伝」は近世本居宣長の古事記評釈書ではあるが，古事記に最も関係が深く，古事記テキストと同一視した。

2．2　「古事記」散布図

● **古事記（1）～（3）**

二章「神話」に始まり十五章「古典の学び」まで間断なく出現し，二十一章「文芸の新しさ」に「古事記伝」として再度出現する。密度が高いのは二章36.8%（21/57），七章22.8%（13/57）である。二章を選んだ。

二章内では各節に出現を見るが，二節に頻度８を持ち，これを選んだ。ここには８段落あり，第３，第５段落に頻度３を得た。出現の早い第３段落を選んだ。

古事記(0)用語集合
総数:57　異なり：12

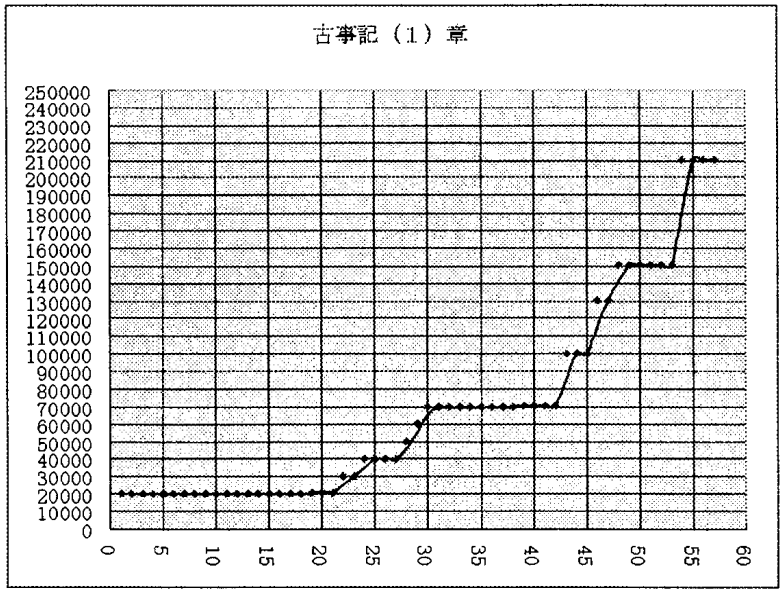
古事記	20101	記紀	70204
古事記冒頭	20102	記紀	70204
古事記冒頭	20102	古事記	70303
古事記	20201	古事記	70303
古事記	20203	古事記	70303
古事記	20203	古事記万葉集	70305
古事記	20203	古事記	100402
古事記	20204	古事記	100402
古事記	20205	古事記	100403
古事記	20205	古事記	130403
古事記	20205	記紀	130403
古事記	20301	古事記	150407
古事記	20301	古事記	150407
古事記下巻	20301	古事記写本	150407
古事記	20302	古事記裏書	150407
古事記	20302	古事記裏書	150407
古事記	20402	記紀研究	150408
古事記	20403	古事記伝	210206
古事記三巻	20506	古事記伝	210206
古事記	20509	古事記	210206
古事記	20509	古事記伝	210208
古事記	30207		
古事記伝	30207		
記紀	40206		
古事記中巻	40310		
古事記	40407		
記紀万葉	40408		
古事記	50404		
記紀	60205		
古事記	70103		
古事記	70104		
古事記	70105		
古事記	70106		
古事記	70106		
記紀	70106		
古事記	70107		

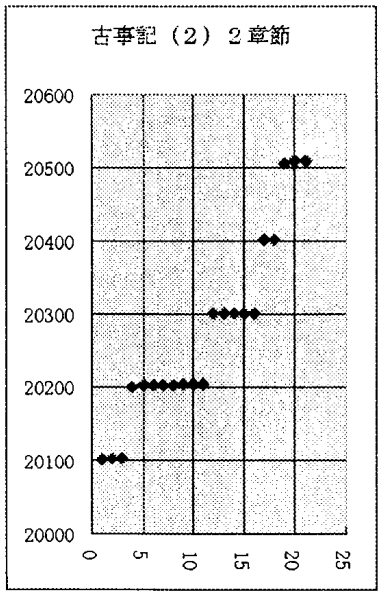
異なり	頻度
古事記	36
記紀	6
古事記伝	4
古事記冒頭	2
古事記裏書	2
記紀研究	1
記紀万葉	1
古事記下巻	1
古事記三巻	1
古事記写本	1
古事記中巻	1
古事記万葉集	1
	57

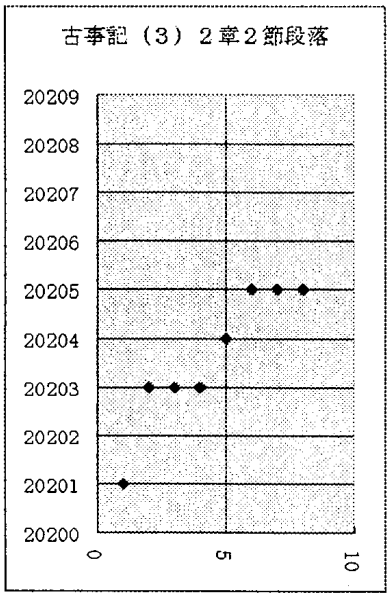
2．3　「古事記」分析

● **引用020203**

02020301-6「これと同じ事情が，古事記のあるところどころでいへるのである。かういふ云ひ方は大へん誤解を伴ふもので，紊りに古事記を分割し，それが学問とか，その方法のやうに思つてゐるとうけとられかねない。この弁解は抽象的にしてみても何のことはない。ただ美的芸術として皇大神宮の造形をうけつぐ思ひ，さういふものが志としてわが美術史の根幹にあると私には云ひ得なかつた。文学の場合には，古事記から始つて，古の王朝を一貫してきた文芸の道と，それをうけつぐだけを悲願とした代々の文人の流れがあつた。それを云ふだけで，わが生き甲斐ともなるほど







の，きらめくやうな人の心と志の歴史である。」

● **分析のまとめ**

引用020203は前段を受けて，「これと同じ事情が，」で始まっている。伊勢神宮の事情が前段内容である。

02020206-7「この古いものがもとのままに残つたのも，大略二十年毎の建てかへの遷宮といふ営みのくりかへしによつてであつた。人工の物が古くなり，さび色が加つて，つまり人工の人くささが，年月風雨の力で消されたゆゑに美しくなつたといふ，通常の造形作品のうける自然の恩恵と無関係だつたことも，驚異の一つである。」

前段の知識があれば，保田が古事記の現在にいたる姿を慎重に，皇大神宮式年遷宮にたとえていることがわかる。しかしこの段落だけでは，一般的な古事記理解も，保田固有の古事記観も伝達されない。重要文は，02020305「文学の場合には，古事記から始つて，古の王朝を一貫してきた文芸の道と，それをうけつぐだけを悲願とした代々の文人の流れがあつた。」と判定するが，これは「悲願」の実質を読みとらない限り理解できない。なお保田にとって先の日本武尊は古事記と同質と考えても良い。

段落内容の分析から，一般知識２／５，保田固有知識２／５とした。

3　万葉集　（A：文学型）

上代八世紀頃の歌集二十巻。成立には大伴家持が関与している。短歌が主であるが，柿本人麻呂らに見られる滔々と述した長歌に独特の味わいがある。

3．1　用語集合「万葉集」

● **万葉集（0）**

本テキスト中，専門用語としては最大の頻度を持つ。用語集合には「万葉」を書名に含む多数の注釈書を加えた。「所謂万葉調」には保田が「万葉調」を肯定的には考えていないことからの揶揄がふくまれている。

万葉集(0)用語集合

総数:157　　異なり：21

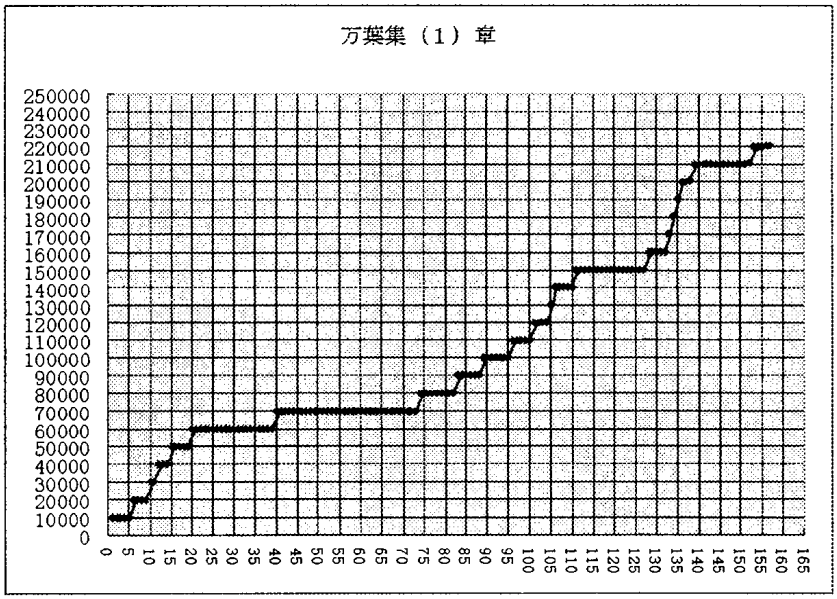
万葉集	10106	万葉集開巻	70101	万葉集	80402	万葉集	150401
万葉集	10106	万葉集	70102	万葉集	80404	万葉集	150402
万葉集古義	10106	万葉集	70102	万葉集	90306	万葉集	150402
万葉調	10106	万葉集	70102	万葉集	90401	万葉集	150403
万葉集	10206	万葉集	70103	万葉集	90401	万葉集	150403
万葉集	20102	万葉集	70103	万葉集	90402	万葉集	150405
万葉集	20102	万葉集開巻	70103	万葉集	90404	万葉集	150405
万葉集	20302	万葉調	70103	万葉集	90406	万葉集	160304
万葉集	20302	万葉調	70103	万葉	100103	万葉集	160401
万葉集	30210	万葉集	70105	万葉集	100104	万葉集	160401
万葉集巻頭	30210	万葉集	70105	万葉集	100104	万葉調	160401
万葉集成立	40310	万葉集	70106	万葉集	100104	所謂万葉調	160401
記紀万葉	40408	万葉集巻二	70201	万葉集	100104	万葉集	170301
万葉集	40409	万葉集	70204	万葉集	100104	万葉集	180301
万葉集	50202	万葉集	70204	万葉集	100105	万葉集	190308
万葉調	50203	万葉集	70204	万葉集	110101	万葉集管見	200105
万葉調	50203	万葉集	70204	万葉集	110205	万葉集代匠記	200105
万葉集	50307	万葉集	70302	万葉集	110209	万葉調	200304
万葉集	50402	万葉集	70304	万葉集	110214	所謂万葉調	210105
万葉集	60000	万葉集成立	70304	万葉集	110214	万葉調	210201
万葉集	60102	万葉人	70304	万葉集	120113	万葉調	210201
万葉集	60103	古事記万葉集	70305	万葉調	120113	万葉集	210206
万葉集	60105	万葉集前期	70305	万葉集	120306	万葉集古義	210208
万葉集	60109	万葉集	70314	万葉集	120306	万葉集古義	210208
万葉調	60109	万葉集	70402	万葉集	130403	万葉学	210209
万葉調	60109	万葉集	70402	万葉集	140103	万葉学	210209
万葉集	60110	万葉集	70410	万葉集	140205	万葉集	210209
万葉集	60110	万葉集	70410	万葉集	140401	万葉集	210209
万葉地理研究	60201	万葉集	70411	万葉集	140401	万葉集古義	210209
万葉地理考	60203	万葉集	70412	万葉集	140401	万葉調論	210209
万葉集	60204	万葉集	70413	万葉	150102	所謂万葉調	210210
万葉集	60205	万葉集	70413	万葉集	150102	万葉集	210301
万葉学者	60209	万葉集	70413	万葉集	150102	万葉集	220101
万葉集	60303	万葉集	80101	万葉集	150102	万葉調	220104
万葉集	60303	万葉集	80102	万葉集抄	150102	万葉集	220106
万葉集	60303	万葉集	80102	万葉調	150102	万葉集	220301
万葉集	60405	万葉集	80103	万葉調	150102	万葉調	220301
万葉集	60405	万葉集	80103	万葉集	150401		
万葉集	60406	万葉集	80206	万葉集	150401		
万葉集	70000	万葉	80301	万葉集	150401		

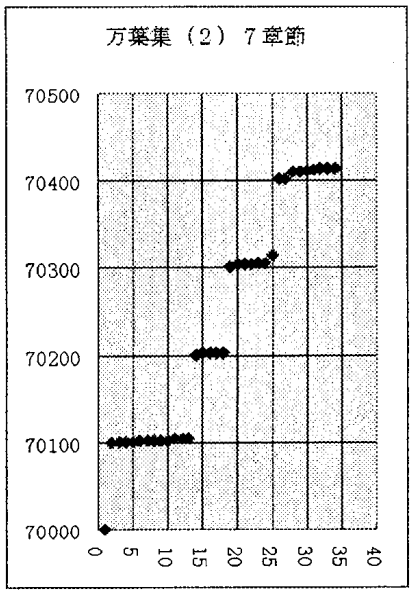
異なり	頻度
万葉集	112
万葉調	16
万葉集古義	4
所謂万葉調	3
万葉	3
万葉学	2
万葉集開巻	2
万葉集成立	2
記紀万葉	1
古事記万葉集	1
万葉学者	1
万葉集巻頭	1
万葉集巻二	1
万葉集管見	1
万葉集抄	1
万葉集前期	1
万葉集代匠記	1
万葉人	1
万葉地理研究	1
万葉地理考	1
万葉調論	1
	157

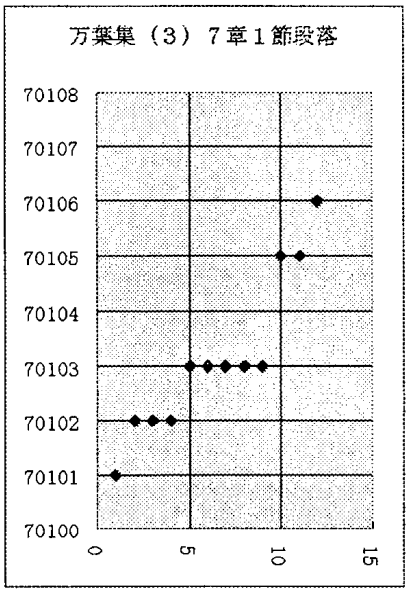
3．2　「万葉集」散布図

● **万葉集（1）～（3）**

全時代に関わる作品名として，一般用語「文学」と同質のパターンを見せ，一章「序説」に頻度5を持ち，最重要語の特質を示す。六章「万葉集の濫觴」12.7%（20/157），七章「万葉集の成立」21.7%（34/157），十五章「古典のまなび」10.8%（17/157），二十一章「文芸の新しさ」8.9%（14/157）に高頻度を持つ。七章を最大頻度として選んだ。







七章は章名に「万葉集の成立」を持ち，全四節に均等に分散している。七章一節に頻度13を見，同節に七段落あり，第３段落に頻度５を得た。

３．３　「万葉集」分析

● **引用070103**

07010301-13「大泊瀬稚武天皇｛オオハツセワカタケノスメラミコト｝，雄略天皇と申上げた英雄の大君の御事蹟は，古事記にもしるされた説話が，まことによく出来てゐる。見事な文芸作品だ。日本書紀の方は，所謂史実を織り込む努力のためか，混濁がある。文芸としては品が下る。前代の史家は，天皇の御事蹟を外国の史料と深厚に照し合せた。支那の史料と照し合わせることの出来る時代を，万葉集開巻においたのは，やはり大伴家持ほどの人でなければならなかつた。大伴氏といふ家柄，教養，環境など，いろいろな面から見て，家持以外に，今ある万葉集の大綱をたてることの出来た人物は，そのころなかつたと私ははつきりと思つてゐる。その家門の歴史と誇りと栄誉をかけて，その志といふ一點で，日本歴史上に最も燦然とかがやく，古今を通じての第一人者となつた。しかし近世の万葉調といふ美学が流行した時代には，家持は何となく第二義的に見られてゐた。かういふ見方に私は同調しない。万葉調といふ三百年来の流行にも，私は初めから同調してゐない。ただ万葉集の成立は，家持なくして考へやうがない。それは幾度感謝拜礼しても及ばない故人の偉功である。」

● **分析のまとめ**

一般的知識としては大伴家持が万葉集成立に深く関与し，家持が教養に優れた人であることがわかる。しかし07010306「支那の史料と照し合わせることの出来る時代を，万葉集開巻においたのは，やはり大伴家持ほどの人でなければならなかつた。」の文は，前文をもってしても現代一般人には理解が遠い。保田固有の万葉観としては，「万葉調」を流行として捉えているのがよくわかる。07010308「その家門の歴史と誇りと栄誉をかけて，その志といふ一點で，日本歴史上に最も燦然とかがやく，古今を通じての第一人者となつた。」この文を最重要文とするが，これは万葉集を家持から見た保田固有の万葉集観である。家持を主とした保田の考えは『萬葉集の精神』に詳しい。

段落内容の分析から，一般知識２／５，保田固有知識３／５とした。

4　柿本人麻呂　（F：実朝型）

万葉集の代表的歌人。生没年不明に近いが，天武天皇時代に少年であったと保田は『日本語録』でしるしている。一般的には万葉集成立を4期に分けると，その2期に位置する。人麻呂は『萬葉集の精神』に詳しいが，別に『皇臣傳』にもまとめてある。

柿本人麻呂(0)用語集合
総数:24　異なり：3

柿本人麻呂	30307	人麻呂	70306
人麻呂	40409	柿本人麻呂	70314
人麻呂	40409	人麻呂	70413
人麻呂	50308	人麻呂	70413
人麻呂	50308	柿本人麻呂	80106
人麻呂	50308	歌聖人麻呂	80301
柿本人麻呂	60110	人麻呂赤人	90306
人麻呂	60110	人麻呂	90409
人麻呂	70102	人麻呂赤人	140103
人麻呂	70305		
人麻呂	70305		
人麻呂	70305		
人麻呂	70305		
人麻呂	70306		
人麻呂	70306		

異なり	頻度
人麻呂	17
歌聖人麻呂	5
人麻呂赤人	2
	24

4．1　用語集合「柿本人麻呂」

● **柿本人麻呂（0）**

「人麻呂赤人」の併記は，保田が人麻呂，赤人，家持を万葉集の代表歌人と捉えていることによる。

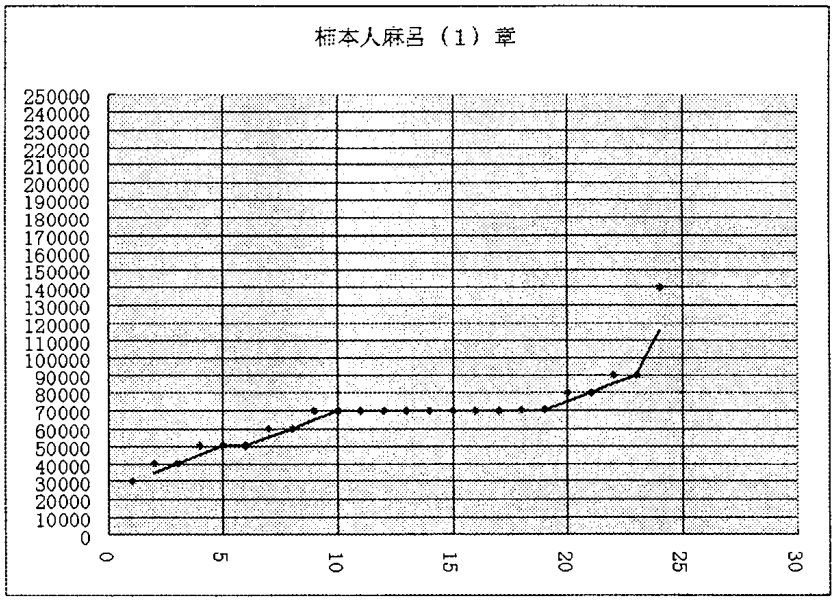
4．2　「柿本人麻呂」散布図

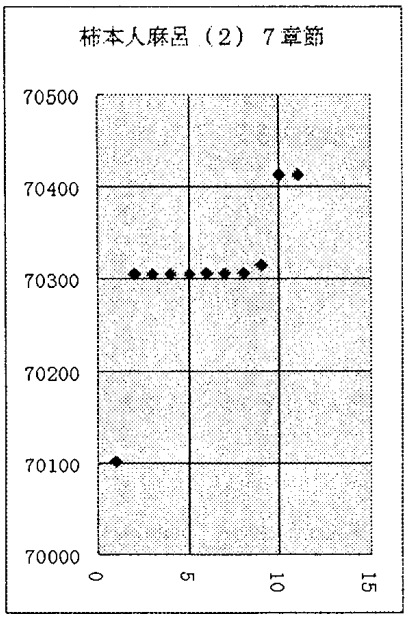
● **柿本人麻呂（1）～（3）**

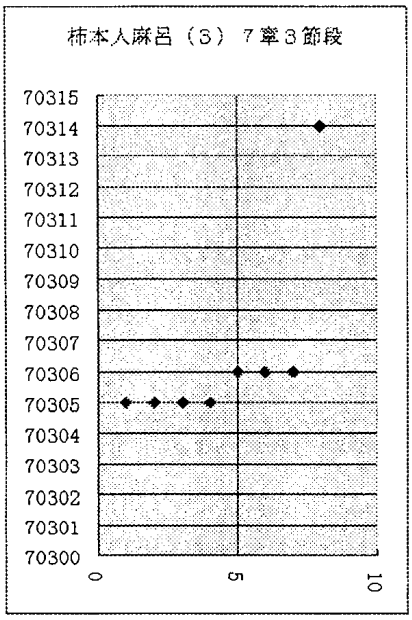
三章「神詠」から九章「勅撰和歌集」まで間断なく出現している。時代限定型人名のパターンを示すが，家持，貫之とは多少異なる。七章「万葉集の成立」に45.8%（11/24）の頻度を持つ。飛び地のような十四章「しきしまのみち」での用例は，歌聖人麻呂と大歌人定家との，歌聖と大歌人との異同［歌聖］に言及した文である。

七章三節に集中して頻度8を見，第5段落に頻度4を得た。

［歌聖］ 1410311-15「歌人として神聖視された定家の作歌に，名歌と評しうるものは数首ある無しである。しかし定家は，日本の文学史の大歌人である。日本の文学史は，微々たる個性独創の如きが，人麻呂赤人といふ大歌聖のまへで，何程のものでもないといふことを十分に了解してゐた。この自覚の上で，大歌人が成り立つのである。この意味のことは貫之が云ひ，後鳥羽上皇も仰せられた。」







4．3　「柿本人麻呂」分析

● **引用070305**

07030501-11「人麻呂は神の如しといふことばは，早く紀貫之のころから，日本人の信仰となつて今に到つてゐる。字を当てて，火難避けの神といつたり，人生れる安産の神としたりして，この国の人々はやさしい滑稽に富んでゐる。国の司をされたので，農や市場の神とするのはまつたうなことだつた。和歌三神などといふ祭りは，風雅人の遊びで，庶民層ではそんなことより直接のことをこの神に依頼する。しかし壬申の時に当つて，人麻呂の詩歌は，まことに神の如くであつた。文学といふものが，

国にとつて，人の心にとつて，文明にとつて，如何に尊貴なもので，強烈無双かといふことは，壬申の大乱の始末を歌つて，国の心，人の心を，仰ぐ富岳の安きにおいたやうな，人麻呂の長歌短歌を見る時，始めて了解される。かういふ時に当つて，この人は正に神といふ感動を新しくする。しかも神の山が火を噴く如く，善事も悪事もただ一言との神語さながら，人麻呂は火をふく山の如く，ただ慟哭されるだけである。ことわりも理屈もない，それらが無用にして，虚偽なることを知つたうへでの歌の世界が拓かれる。穴師大兵主の神人の一族は，巻向の宮から，朝倉宮磯城島宮といふ万葉集前期にも，まだそれを支へる一大勢力だつた。これはまた古事記万葉集にしるしつがれた大倭朝廷の歴史の実相である。」

● **分析のまとめ**

庶民の中で人麻呂が火難避け，安産，農産業の神とされてきたこととあわせて，壬申の乱と人麻呂の長歌短歌の意味付けを行っている。しかし保田の人麻呂観がどのようなものであるのかは，この段落から理解できない。また，最終文に人麻呂を大兵主社にかかわる一族と記しているが，これは六章「万葉集の濫觴」及び，郷土史として，山辺の道巻向の地，穴師神社の歴史を知らなければ意味不明である。保田は，現代学術的な「定義」をさけるところが多い。この段落は人麻呂の一般的な知識，および保田固有の知識として，内容への指示はしているが，十全ではない。

段落内容の分析から，一般知識３／５，保田固有知識３／５とした。

5　大伴家持（E：貫之型）

大伴家持は万葉集後期の歌人であり，同集編纂に深く関わった歌人。大伴家は古代以来の武門の筆頭である。717／718（元正・養老元／２）－785（桓武・延暦４）。

5．1　用語集合「大伴家持」

● **大伴家持（0）**

家持は死の年に中納言従三位となるが，官人としては左遷の後半生が続き，

死後，政変への関わりから籍を剝奪されている。保田が家持に「卿」と付す事例は多い。

5．2　「大伴家持」散布図

● **大伴家持（1）～（3）**

パターンとしては紀貫之と相似の時代限定型歌人である。七章「万葉集の成立」66.7%（20/39），十章「日記と物語」20%（6/30）に高頻度を持つ。

七章の最終，四節に頻度10を見，第13段落に頻度6を得た。

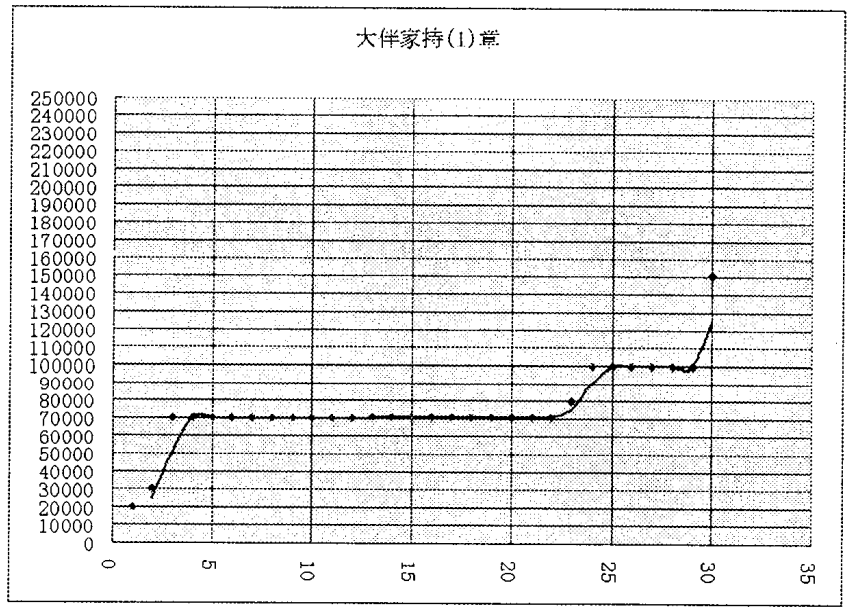
大伴家持(0)用語集合
総数:30　異なり：4

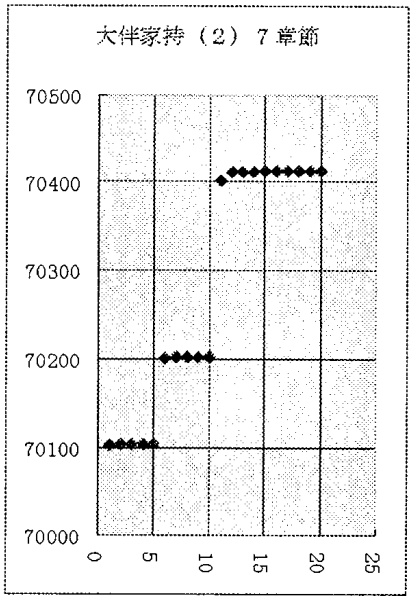
家持	20102	家持	70413
大伴家持卿	30210	家持	70413
家持	70102	家持卿	70413
家持	70103	家持卿	70413
家持	70103	家持卿	80202
家持	70103	家持	100101
大伴家持	70103	家持	100101
家持	70201	家持	100104
家持	70202	家持	100104
家持	70202	家持	100104
家持	70202	家持	100104
家持卿	70202	大伴家持	150405
家持卿	70402	**異なり**	**頻度**
家持	70411	家持	22
家持	70411	家持卿	5
家持	70411	大伴家持	2
家持	70413	大伴家持卿	1
家持	70413		30

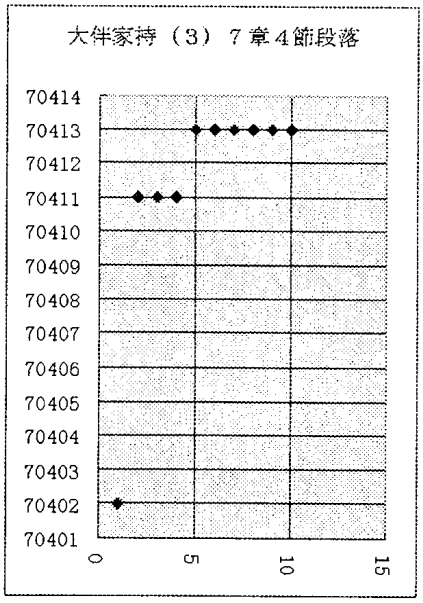
5．3　「大伴家持」分析

● **引用070413**

07041301-23「しかし家持といふ人の一代は，万葉集に出てゐる壮年期までのことは，この集によつて相当子細にわかる。その詩人としての心のうごきも描かれ，世上世相に対する態度も，それとなく述べられてゐる。豊御酒によつて，手をうつて楽しく歌つてゐたやうな歌，死者を悲み，その魂をよびとめようとする類のうた，恋の力をためすやうなうた，さういふ歌とは少し事情の異る抒情詩といふものが，生れるところ，つくり出さうとする心の動きを，しづかにしるしてゐるやうなところは，それが千三百年も昔の人の姿とはおもはれない。今見る人の姿かたちのやうに新しい。古今の歴史を見ても，これほどに清らかな詩人の自覚としては，眼ざましいほどに珍らしい。彼がつくつてゐた趣味の環境にしても，多くの当代の才女美人の出入した書斎も，わが国の既往千三百年に於て，これほどに近代性の濃厚なしかも高雅な雰囲気は例がない。防人の歌を一々点検し，整理し，時々修正をしてやつてゐるやうな姿勢も，千何百年といふ歳月を忘れさせる。九十歳の賀をうけた俊成卿を，けふの歌よみよりも新しい人と思ふことの出来る人には，家持卿はさらに新しい人に見えるといつても，わらひはすまいと思ふ。家持は決して頑な思想を他に強ひなかつた。彼は大佛建立のそのことについては，誰の歌も伝へてゐない。和歌といふ領域で，そのころの人はさういふ類の歌を全くつくらなかつたわけでない。一，二つくられた歌も，他書







には伝へられてゐる。万葉集には時代の流行をうたつた作品がないのである。一時のものを歌つた時にも，流行や時世に沈まないものをとり入れてゐる。これらの編輯方法は，一つの文芸観として，美観として，日本人の規範となるのである。その編輯方法と，さらにその発想について，考へれば考へる程に，私には驚きに耐へない。しかし人麻呂が神の如くあつたといふ驚きと，この驚きとは色合がちがふ，家持には人麻呂に対して思ふ神の如きものを思ふのでない，貫之の場合とも，俊成とも，さらに芭蕉ともちがつてゐる感動である。道はたしかに貫道すると思ふ。貫道してゐることを信ずる。家持には人の志の尊く，かなしく，やるせないものがある。人のものだ，

しかし人間性とか，人間的とかいふことばで，近代の者のいふやうな人間主義に少しでもつながるやうなものは全くない。人間尊重とか何かといふ「人間」を，私は尊重する代りに，影形なく消滅したいものと思つてゐる。万葉集をよみ，家持卿のことを思ひ，その極地の感動に入つた時には，私は私自身が無になつてゐることに気づくのである。」

● **分析のまとめ**

他の段落に比して大部である。テキスト版面では一頁強を数える。家持が叙情歌人であることの一般的知識が現れている，しかし保田の家持観はそこに近代の「人間主義」を見ることはない。

家持は客観的には，庶民ではなく，名家の氏の長であり，武人であり，卿である。家持の十歳前後は，天武孫高市御子左大臣長屋王が藤原家と争い，讒言され自殺するという，内乱の時期である。この余波は藤原家の隆盛と共に後々まで続く。家持は大伴氏の長として，その立場からして単なる近代風の叙情歌人にとどまるものではない。

この段落では，07041310「彼は大佛建立のそのことについては，誰の歌も伝へてゐない。」を重要文とする。保田は，「貫道する道」の上から家持が万葉集の編纂者であると断定している。

段落内容の分析から，一般知識５／５，保田固有知識５／５とした。

6　古今和歌集　（A：文学型）

勅撰和歌集の最初のもので，醍醐天皇勅宣により905（延喜５）ころに成立した二十巻の集。撰者代表に紀貫之がいる。貫之による仮名序が文学論として著名である。

6．1　用語集合「古今和歌集」

● **古今和歌集（0）**

「古今」単独の語は，悉皆調査の上，古今和歌集を指すものだけを一例採取し

た。「古今仮名序」は採ったが，仮名序は新古今にもあり区別した。「古今伝授」は後生への影響として採った。

古今伝授以外の「古今集」27用例に対して，「序」が，古今序（10），古今仮名序（1），古今集序（1），古今序源氏物語（1），と合計で13用例ある。集：序は２：１（27:13）の比になり，「序」の扱いは大きく，歌学としての紀貫之に対する言及が多い。

古今和歌集(0)用語集合
総数:49　異なり：10

古今源氏	20302	古今源氏	130201
古今序	80401	古今伝授	140202
古今集	80401	古今伝授	140202
古今集	80404	古今伝授	140202
古今和歌集	90301	古今	150101
古今集	90301	古今集	150102
古今序	90302	古今集	150401
古今序	90303	古今序源氏物語	160203
古今集序	90303	古今序	160203
古今序	90303	古今伝授	160501
古今序	90305	古今伝授	180101
古今序	90305	古今伝授	180101
古今序	90305	古今伝授	180110
古今序	90306	古今伝授	180204
古今集	90307	古今集	180301
古今集	90402	古今伝授	180306
古今集	90404	古今集	220106
古今和歌集	90406	古今集長歌	230306
古今仮名序	90410		
古今和歌集	90410		
古今集	90410		
古今集	100105		
古今集	100105		
古今序	100108		
古今源氏	100408		
古今集	110101		
古今集	110201		
古今集	110203		
古今集	120203		
古今集	120401		
古今集	120401		

異なり	頻度
古今集	19
古今序	10
古今伝授	9
古今源氏	3
古今和歌集	3
古今	1
古今仮名序	1
古今集序	1
古今集長歌	1
古今序源氏物語	1

49

6．2　「古今和歌集」散布図

● **古今和歌集（1）～（3）**

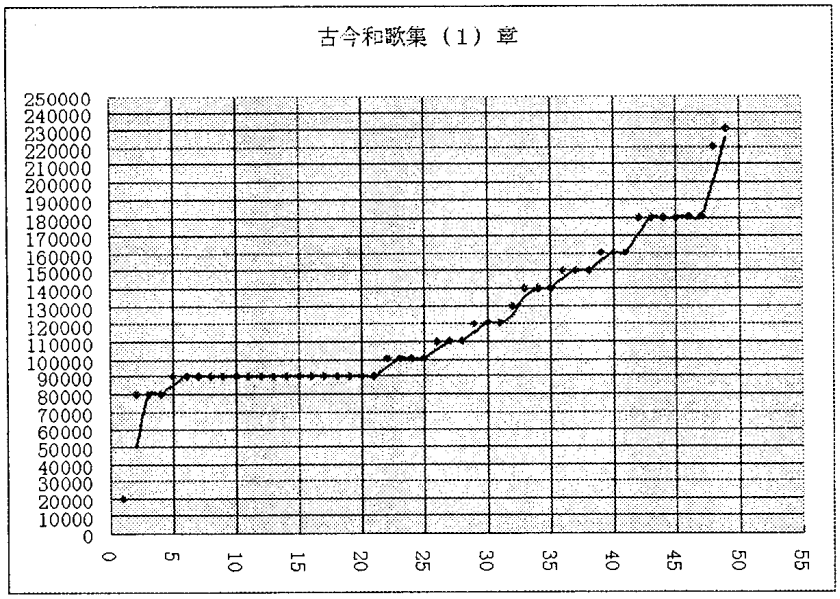
二章「神話」で一例のあと，八章「都うつり」から十八章「乱世の文人」までほぼ間断なく出現し，あと二十二章「志士文学」，二十三章「文明開化の超克」に飛ぶ。古今伝授は十四章「しきしまのみち」以降に多い。ほぼ全時代型作品というパターンである。

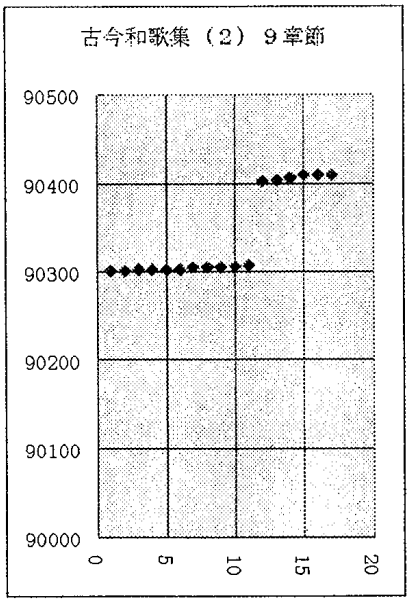
九章「勅撰和歌集」に最大の頻度34.7％（17/49）をもち，これは章名からも妥当である。その三節に頻度11を得た。同節は７段落あり，各段落に分散している。頻度３の第３段落を選んだ。

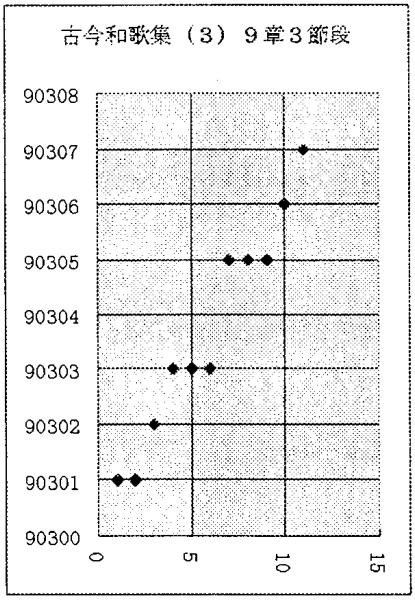
6．3　「古今和歌集」分析

● **引用090303**

09030301-15「志とか，心といふものが，最もきびしいものとして書かれたのが，貫之のこの文章だつた。その思想が，千古を貫道してゐるといふことよりも，この心構のきびしさをまづ心にとめねばならない，それが文学をよむ初心の心得である。その人の心のはげしさやきびしさは，そのまま文章に現はれる。古今序は最も強烈で，しかも美しい調子の文章である。ただ強いだけではいけないのである。ただ美しいだけではつまらない，つまりその一つ一つだけでは，つひの強さでも美しさでもない。







丈夫が雄心をもつて描いた文章の強烈さは，封建の気風のなかでは大むね素直に了解された。この時代に描かれた伊勢物語にしても，神ながらの古典に流れるやうな，激しいものが素朴に，少し偏奇の表現をすれば，なまくらに出てゐる。それは無理に気負つてゐない。一面では淡々としてゐる。古今集序の気負ひは，すでに気魄になつてゐる。この気魄の現はれる根柢は，当今の御代を讃美するところにあつた。御代に歓喜し讃美する最大のこころ，日の出の勢ひと美しさに身を一つにしてゐるやうな時代の心が発動する時，わが一人の微々たる文士や芸術家の身體を通じて国の大芸術が現はれる。近い昔の永徳はさういふ絵師であつた。しかしこの偉大な永徳の芸術が，貫之の古今序といふ，文章といふものに及ばないといふことを，私の心がふつと思つたといふことを，反省的に知つた時，私は一段の衝撃をうけ，戦慄といふことばで云ふ以外のよい方法を知らない精神の状態を味つたのである。」

● **分析のまとめ**

紀貫之と古今集序とへの賛美がある。保田の古今集序観であり，紀貫之観である。古今集全体の知識は，ここには少ない。段落内容の分析から，一般知識2／5，保田固有知識5／5とした。

7　紀貫之（E：貫之型）

平安初期十世紀はじめ，醍醐，朱雀帝時代に活躍した歌人，歌学者，「古今和歌集」の代表撰者。保田の『皇臣傳』に論述がある。『日本語録』では古今序から「力をもいれずして天地を動かし，目に見えぬ鬼神（オニガミ）をもあはれと思はせ，男女（ヲトコヲンナ）の中をも和らげ，猛き（タケ）武士（モノノフ）の心をもなぐさむるは歌也」と，著名な歌の効用部を引いている。871？―946？

7．1　用語集合「紀貫之」

● **紀貫之（0）**

「紀貫之」，「貫之」の二例を採った。

7．2　「紀貫之」散布図

● **紀貫之（1）～（3）**

家持と同一のパターンを持つ。九章「勅撰和歌集」51.4%（18/35），十章「日記と物語」31.4%（11/35）に高頻度を持つ。九章が最大頻度となったことは妥当である。

九章は四節あり，最終の第4節で11頻度を得た。同節には11段落あり，分散している。頻度3の第1段落を選んだ。

紀貫之(0)用語集合
総数:35　異なり：2

紀貫之	20208	貫之	100101
紀貫之	70305	貫之	100104
貫之	70413	貫之	100108
紀貫之	90206	貫之	100109
貫之	90301	貫之	100109
貫之	90301	貫之	100204
貫之	90303	貫之	100301
貫之	90303	貫之	100301
貫之	90304	貫之	100305
貫之	90306	貫之	100403
貫之	90401	貫之	100408
貫之	90401	貫之	140103
貫之	90401	貫之	140305
貫之	90403	貫之	160203
貫之	90406		
貫之	90406		
貫之	90407		
貫之	90407		
貫之	90407		
貫之	90408		
貫之	90411		

異なり	頻度
貫之	32
紀貫之	3
	35

7．3　「紀貫之」分析

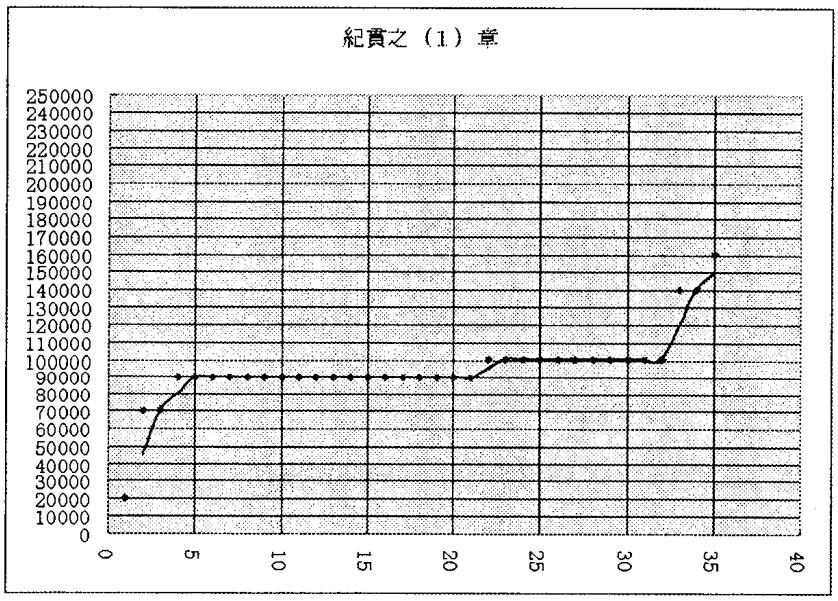
● **引用090401**

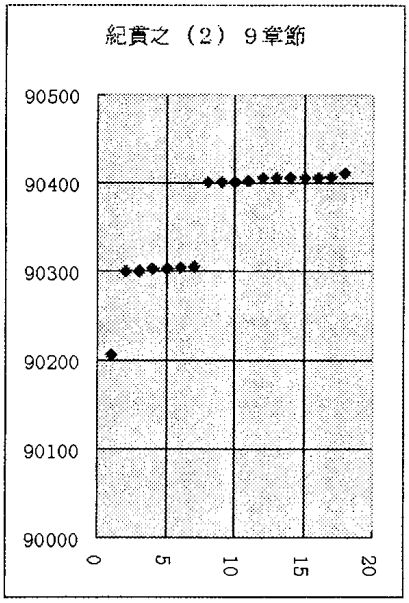
09040101-9「貫之の歌論は，今日のことばでいへば美学の完備に近いものである。しかもそれがわが国独自のものにて，日本人の生命観や，人生観，道徳観に即し，建国の理念をもあまねく示したのは，それらが一体一如だつたからである。万葉集の歌は，申すまでもなく最高だつたが，理を説いて万人の理解に示されたのが貫之の論だつた。その気魄，その精神，またその志に於ても，批評の余地がない程の文人だつたから，後代の人々の尊崇の変りない対象となつた。近代では貫之は下手な歌よみといはれてゐる。上手下手は大凡そ時代の好みであり，作歌の十首も人の心に即すれば，もう上手下手もない。元禄の芭蕉はこのやうな云ひ方をしてゐる。万葉集はかうした時，上手下手などを云ふ次元のものでない。この判断が日本の文学史を考へる上で，絶対的な根柢をなすのである。」

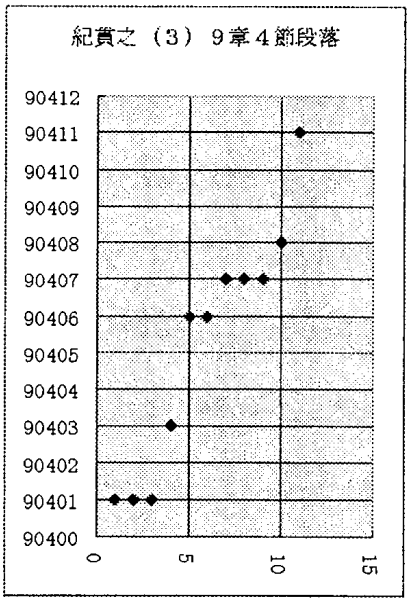
● **分析のまとめ**

09040105-7「近代では貫之は下手な歌よみといはれてゐる。上手下手は大凡そ時代の好みであり，作歌の十首も人の心に即すれば，もう上手下手もない。元禄の芭蕉はこのやうな云ひ方をしてゐる。」

保田の紀貫之観が，文学観とともによく現れている。紀貫之の序を中心とす







る歌論への言及は，一般的知識も十分にある。保田は文学を技巧の巧拙で評価することは少なく，全人的な，そのものが置かれた状況，歴史の中で一貫した「志」があるかどうかで判定している。

段落内容の分析から，一般知識４／５，保田固有知識５／５とした。

8　源氏物語（D：源氏型）

平安中期十一世紀初頭に完成した長編小説。作者は紫式部。中世，藤原定家が現在に伝わる基本的な祖本を書写編纂したが，なお多数の異本がある。1008年頃完成。

8．1　用語集合「源氏物語」

● **源氏物語（0）**

「源氏物語抄」は里村紹巴で，18020413「紹巴は源氏物語抄二十巻をつくり，」による。「源氏物語湖月抄」は源氏物語注釈書，北村季吟が1673年に完成。独立した「源氏」は平氏源氏との異同が煩雑であり採らなかった。あくまで「源氏物語」という書名をもとにした。ただし，光源氏は「源氏物語」と等価と判定し採った。

源氏物語(0)用語集合
総数:49　異なり：7

源氏物語	10105	古今序源氏物語	160203
源氏物語	10105	源氏物語	160203
源氏物語	10206	源氏物語	160204
源氏物語	20302	源氏物語	160304
古今源氏	20302	源氏物語	160304
源氏物語	100104	源氏物語	160304
源氏物語	100301	源氏物語	160304
源氏物語	100302	源氏物語	170301
源氏物語	100302	源氏物語	180107
源氏物語	100302	源氏物語抄	180204
源氏物語	100304	源氏物語	180306
源氏物語	100304	源氏物語	180403
源氏物語	100402	源氏物語	180405
源氏物語	100403	源氏物語	190111
源氏物語	100407	源氏物語湖月抄	200103
古今源氏	100408	源氏物語	210206
源氏物語	110102	源氏物語	210206
源氏物語	110104	源氏物語	210207
源氏物語	110214	源氏物語	210207
光源氏	110215	源氏物語	220104
源氏物語	120203		
源氏物語	120203		
古今源氏	130201		
源氏物語	150102		
源氏物語	150203		
源氏物語	150401		
源氏物語	150401		
源氏物語研究	150401		
源氏物語	160203		

異なり	頻度
源氏物語	41
古今源氏	3
源氏物語研究	1
源氏物語湖月抄	1
源氏物語抄	1
古今序源氏物語	1
光源氏	1

49

8．2　「源氏物語」散布図

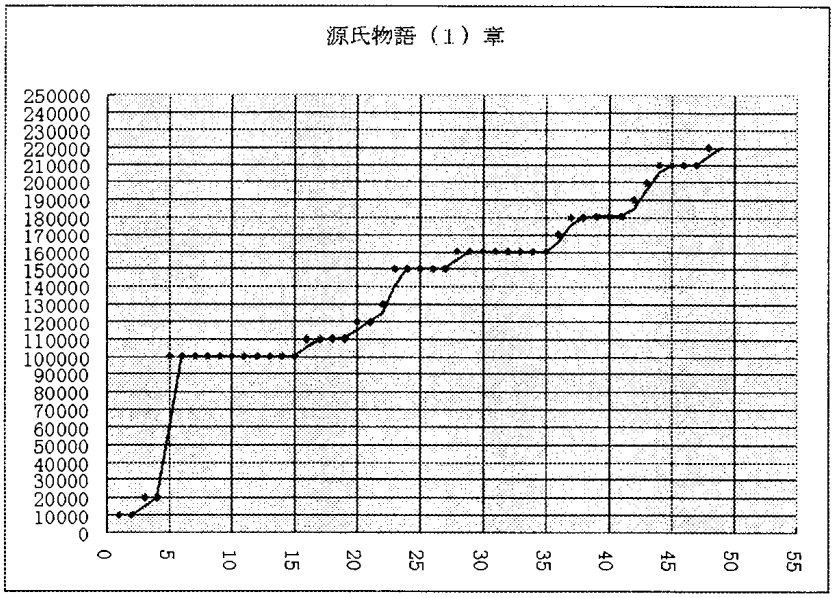
● **源氏物語（1）～（3）**

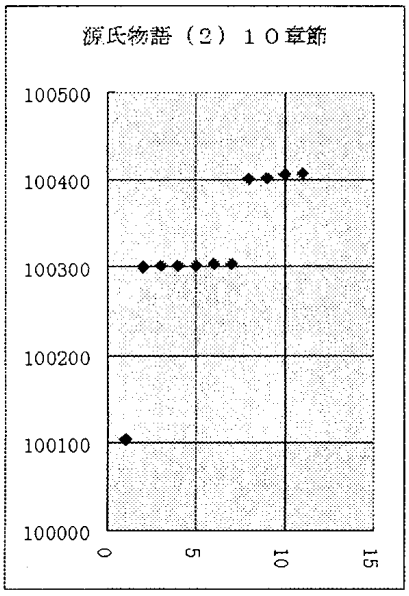
源氏物語は序章から二章「神話」にかかる冒頭章での言及があり，重要視されている。その後は十章「日記と物語」に22.4％（11/49）の集中を見，以後二十二章「志士文学」まで間断なく現れ，全時代型作品といえる。十章で三節に頻度6，同章三節第2段落に頻度3を得，これを選んだ。

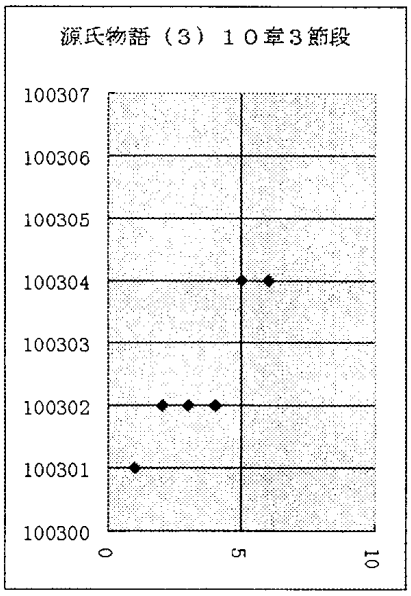
8．3　「源氏物語」分析

● 引用100302

10030201-7「「戴恩記」に貞徳が書いてゐる，貞徳が玖山公に源氏物語を学びにゆく時の話は，公が貞徳に，一度読んで御覧なさいと申される，貞徳はいぶかしく思つたが，云はれるままに源氏の一節をよみあげると，すなほに読むと存ずれど，そなたのはみな訛りですと御笑あり，自身でよまれた。これをきいて貞徳は始めて，源氏物語が何であるかといふことがわかつた。この話はおしなべて日本文学の肝心をさすものとして，私は年久しく思つてきた。明治の朝廷では，源氏物語の美しさ







は，その御内儀のことばの世界で，天上や極楽の風儀をつたへてゐたやうに想像される。この想像には若干の証となるものを私は知つてゐる。しかし昭和の初めごろなら，京の三条の橋の上で，東からきた中年の女性と，西からきた若い嫁女が，立話に時を忘れてゐるやうなことばのやりとりには，さういふ王朝文学の風儀があつた。内容は空で，自己といふものを，表情のそぶりにもあらはしはしない。」

● **分析のまとめ**

引用100302は松永貞徳にかかわるもので，これは貞徳で選んだ引用180405と同じ内容である。そこでは，貞徳が九條稙通（たねみち）（玖山）から源氏物語を学んだ頃の逸話が記されている。保田の源氏物語観を強く表しているが，一般的知識としてはこれを採ることができない。

保田の文学観からすれば，朝廷の雅を伝えるものに価値をみるから，ここで京風，貴族社会での当時を伝える話に源氏物語の価値をおいたのであろう。しかし最終文10030207「内容は空で，自己といふものを，表情のそぶりにもあらはしはしない。」は，源氏物語の実相を表していると考える。内容が空とは，世間話天候話題のようなものであるが，紫式部がこれをこれとして伝えるには，長編小説の形態を採らざるを得なかったのであろう。一言で「月が美しい」と記しても，ほとんど何も伝えない。

段落内容の分析から，一般知識１／５，保田固有知識５／５とした。

西行(0)用語集合
総数:24　異なり：4

西行法師	80208	西行	140205
西行	100301	西行	170407
西行	110204	西行	170407
西行	110205	西行法師	170407
西行	110206	西行	180203
西行	110206	西行法師	180203
西行	110206	西行	200107
西行	110207	西行	200404
西行	110207	西行庵	200404
西行	120401		
西行	120401		
西行	120402		
西行	130201		
俊成西行	140101		
西行	140203		

異なり	頻度
西行	19
西行法師	3
俊成西行	1
西行庵	1

24

9　西行（A：文学型）

西行は鳥羽上皇のもと北面の武士であったが二十代に僧となり，晩年まで各地を行脚した。歌集「山歌集」を残し，新古今和歌集での採録歌は九十を超え最多である。現代にも好まれている歌人である。『皇臣傳』に「西行」が所載されている。1118（鳥羽・元永元）— 1190

（後鳥羽・建久元）

9．1　用語集合「西行」

● **西行（0）**

「西行」を含む用語だけを集めた。

9．2　「西行」散布図

● **西行（1）～（3）**

中古・中世の十一章「文学の道」に29.2%（7/24）と集中し，以後近世の二十章「国学の恢弘」まで分散している。採録数が少なく特徴は見いだせない。十一章に頻度7を見，全て二節にある。第6段落に頻度3を得た。

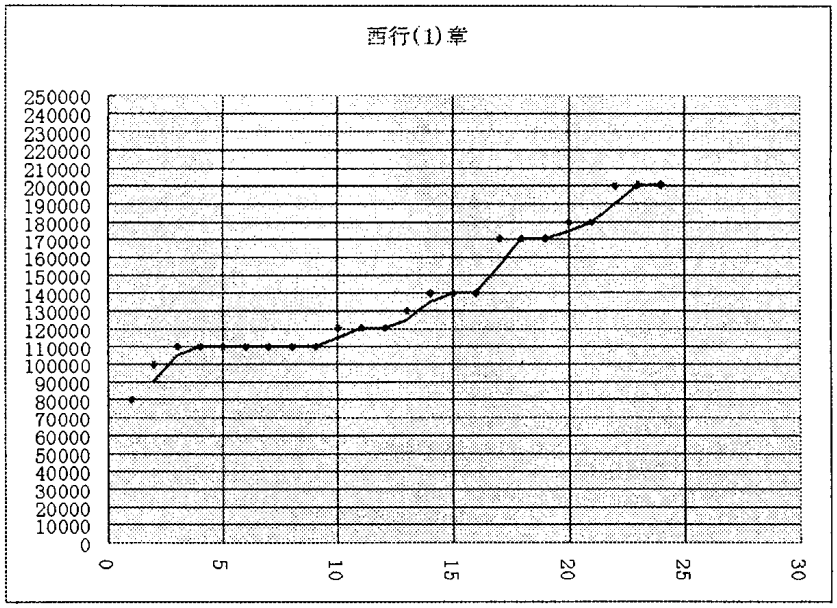
9．3　「西行」分析

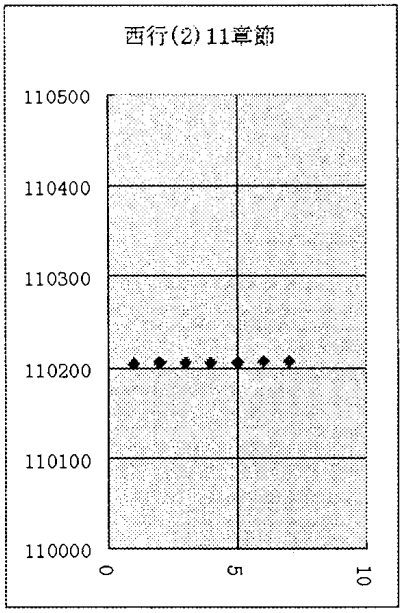
● **引用110206**

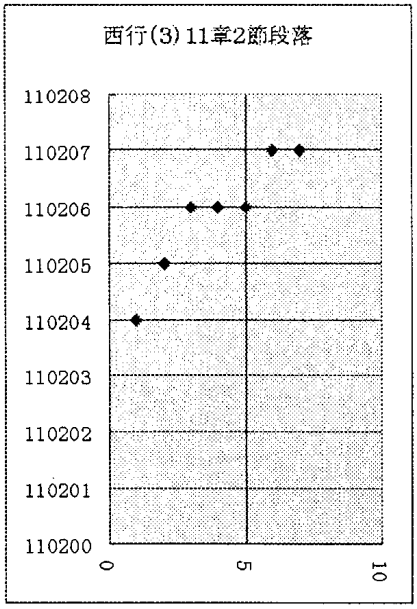
11020601-5「西行の心の底にあつたものは，崇徳上皇の御境涯に対する思ひだつたやうである。これは文徳天皇田邑陵に泣いた業平のまめごころに通ふものと私は思つた。業平が放埒して旅したやうに，西行も生涯を旅に住し，白峯陵で慟哭した子細を，芭蕉は道の人としての先蹤といただいてゐたやうである。西行が無双の勇士だつたことは，その一見心細さうによみすてられた数々の歌を，しばらく見てゐるとわかるのだ。世俗にをつた時のことは物語にされて，よく知られてゐる。」

● **分析のまとめ**

この段落は短く，他に比べて指示的抄録に近い内容となっている。西行と崇徳上皇には関係があり，西行が旅をし続け白峯陵で慟哭したこと。西行は歌僧としては勇士であったことや，西行には伝説（物語）がつきまとうこと。これらがこの段落には記されている。しかしいずれも他に参照を必要とする内容なので，知識としてこれだけで独立することはない。保田の西行観としては，後世の芭蕉が西行を「道の人」と見ていることへの言及に特色がある。段落内容の分析から，一般知識2／5，保田固有知識3／5とした。







10　新古今和歌集（ＦＦ：蕪村型）

十三世紀鎌倉時代初期，後鳥羽院の院宣によって編纂された第八番目の勅撰和歌集であり，文学史の中でも評価は高い。完成まで後鳥羽院自身が幾度も切り継ぎ（編集）を行っている。1201（建仁元）―1205（元久２），1210（承元４）ころ後鳥羽院により完了。

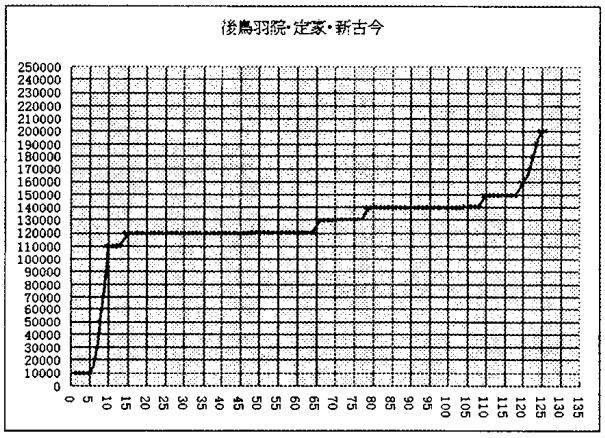
10. 1　用語集合「新古今和歌集」

● **新古今和歌集（0）**

「新古今」の一例とした。保田の場合，新古今を語るよりも後鳥羽院に新古今を重ねることが多く，総数は24と頻度が低い。後鳥羽院（55）と新古今集（24）をあわせた頻度は79となり，これは万葉集（157），芭蕉（124）に次ぐものとなるが，さらに定家（47）を加えると126頻度となり，芭蕉と等しくなる。後鳥羽院，定家，新古今和歌集は「後鳥羽院」でくくるのが本テキストでは有効な方法であるのかもしれない。これは用語の共起問題につながり，本稿では深く言及しないが，参考までに散布図「後鳥羽院・定家・新古今和歌集」を載せておく。図ではパターンとして後鳥羽院（D：源氏型）に近くなる。

新古今和歌集(o)用語集合
総数：24　異なり：1

新古今	120000	新古今	120401
新古今	120101	新古今	120401
新古今	120102	新古今	120401
新古今	120103	新古今	120402
新古今	120104	新古今	120405
新古今	120115	新古今	130407
新古今	120201	新古今	130407
新古今	120206	新古今	130408
新古今	120206	新古今	140401
新古今	120301	新古今	150401
新古今	120303	新古今	160305
新古今	120306	新古今	160401



10. 2　「新古今和歌集」散布図

● **新古今和歌集（1）～（3）**

十二章「新古今和歌集」から十六章「南朝の文学」まで間断なく出現する。十二章で58.3%（14/24）を得ること，およびパターンからみるならば，時代（中世）限定型作品といえる。

十二章一節と同四節に頻度５を見，最初の一節を選んだ。同節は冒頭からの４段落に，均等に各頻度１をみるので，十二章一節第１段落を選んだが，この段は二文に過ぎない。よって同２－４段落もあわせて引用した。

10. 3 「新古今和歌集」分析

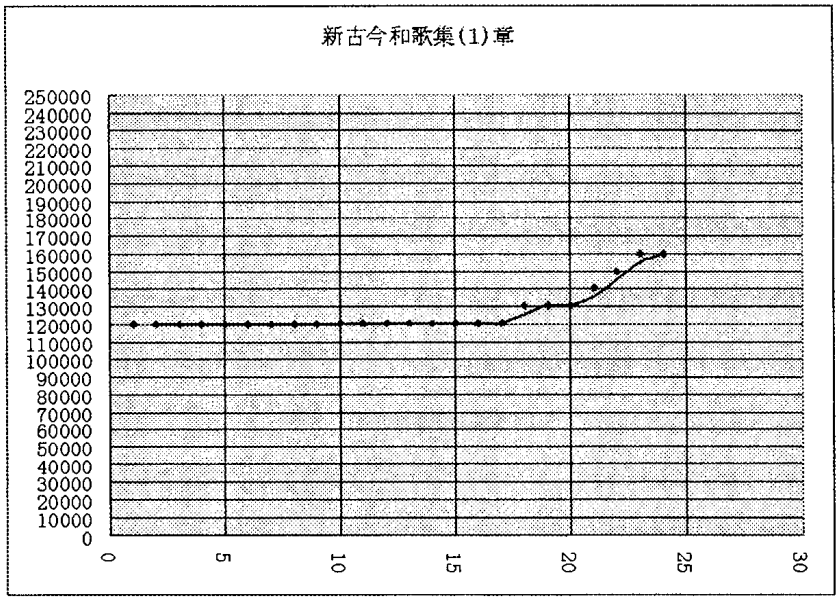
● **引用120101**

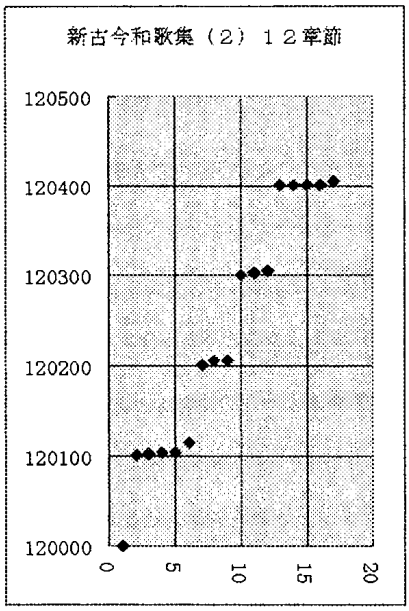
12，新古今和歌集

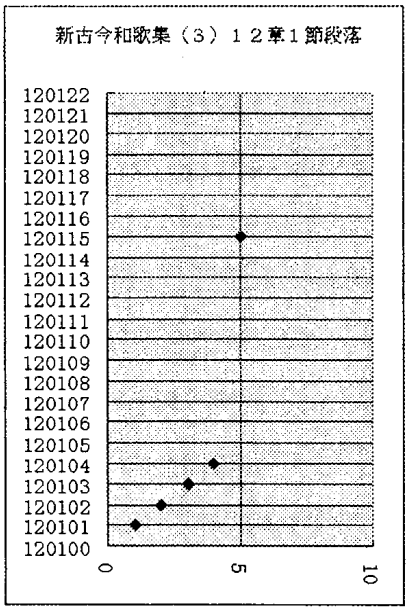
12，一

12010101-2「新古今和歌集竟宴は元久二年三月二十七日催された。御代は土御門天皇である。」

12010201-6「摂政良経を始めとして，十九名の人々が，勅に応じて各々一首の和歌を上る。新古今集の五名の撰者は，定家を除く四人が加つてゐる。定家には竟宴の歌な







く，別に，賀屏風十二首和歌を奉つた。奉進は前日の二十六日にて，この日完了したこととなる。平安朝の華麗な文明の歴史をしめくくるにふさはしい盛儀となつたのである。御製講師は撰者の一人だつた通具，講師は同じく家隆，そして読師には前太政大臣を当てられた。」

12010301-5「新古今集の勅撰は後鳥羽院の鳥羽離宮で行はれた。参議通具，大蔵卿有家，右近中将定家，前上総介家隆，左近少将雅経の五名が撰者だつた。始め寂蓮も撰者に当てられてゐたが，奏覧以前に卒去する。この撰に当つては，撰者以外のものも随分に参劃し，それについて，定家は不満の意を「明月記」にしるしてゐる。しかしそれらのことは，後鳥羽院の御自撰の御心のなみなみでなかつたことをおのづから語つてゐるやうにもうけとれる。」

12010401-9「後鳥羽院が再興された和歌所には十一人の寄人がゐた。新古今集撰集の撰者間にも反目があつた。建仁元年にはすでに大略完成してゐたことが，明月記同年十一月三日の記事に見えてゐる。しかしその後もしばしば切継ぎが行はれた。切継ぎして歌を入れかへたのである。かうしたことから竟宴までに三年もの期間を要したのであつた。この勅撰にかけられた後鳥羽院のおん思ひは，なみなみのものでなかつたからである。しかし隠岐遷幸ののち改めて撰をくりかへされたのは，お心持の移りか，竟宴に当つてなほ満ちたりぬものを感じてをられたのであらうか。いづれにしてもかほどまで深い文芸に対する執心は，わが文学の歴史の上でも特別異例と感じた。」

● **分析のまとめ**

本稿での方法論に限定すると，12010101-2「新古今和歌集竟宴は元久二年三月二十七日催された。御代は土御門天皇である。」と新古今和歌集完成時の客観的な事実があり，一般的知識として妥当である。しかしそれ以下も短い段落で構成されており，いずれも「知識」記述に妥当な内容である。また第４段落には保田の固有の考えも出ている。

段落内容の分析から，一般知識５／５，保田固有知識５／５とした。

11　後鳥羽院（D：源氏型）

中世鎌倉幕府時代初期，第82代天皇，退位後上皇（院政1198－1221）。第八勅撰集「新古今和歌集」の院宣を下した。1221（承久３）年鎌倉北条氏と対立し（承久の乱）隠岐に流され，十八年後同地にて薨去。優れた歌人であった。1180（治承４）―1239（延応元）

11. 1　用語集合「後鳥羽院」

● 後鳥羽院（0）

後鳥羽院，後鳥羽上皇，後鳥羽天皇と三つに記されるが，保田の主著は『後鳥羽院』であり，院が御所，政務の集合を意味する院庁，院政そのものを表し，新古今和歌集編纂の院宣を下した事実から，本テキストでは「後鳥羽院」の呼称が代表となるであろう。後鳥羽院は上皇である身分であるよりも，和歌を主とする文化全般および承久の乱という一つの潮流を作った点で，個人を指すに止まらず，時代相を意味する。なお「後鳥羽天皇」一例は11020401「千載集は後白河法皇の院宣によつて，後鳥羽天皇の文治四年四月廿二日に撰して奉上した。」に見るように使われており，この前後天皇であった。保田の主著『後鳥羽院』以来，「後鳥羽院以後」は最重要語である。

後鳥羽院(0)用語集合
総数：55　異なり：5

後鳥羽院	10110	後鳥羽院	130101
後鳥羽院以後	10110	後鳥羽院以後	130101
後鳥羽院以後	10110	後鳥羽上皇	130101
後鳥羽院以後	10110	後鳥羽院	130201
後鳥羽院	10210	後鳥羽院以後	130207
後鳥羽天皇	110204	後鳥羽上皇	130401
後鳥羽上皇	110205	後鳥羽院	130402
後鳥羽院	110207	後鳥羽院	130406
後鳥羽上皇	110207	後鳥羽院以後	130406
後鳥羽上皇	120101	後鳥羽院	140101
後鳥羽院	120103	後鳥羽院	140101
後鳥羽院	120103	後鳥羽院	140101
後鳥羽院	120104	後鳥羽上皇	140101
後鳥羽院	120104	後鳥羽上皇	140103
後鳥羽院	120114	後鳥羽上皇	140103
後鳥羽院	120115	後鳥羽院	140204
後鳥羽院	120201	後鳥羽院以後	140312
後鳥羽院	120203	後鳥羽院	150305
後鳥羽院	120203	後鳥羽院	150309
後鳥羽院	120203	後鳥羽上皇	150310
後鳥羽院	120203	後鳥羽院順徳	150311
後鳥羽上皇	120203	後鳥羽院以後	170301
後鳥羽院	120205	後鳥羽院	200107
後鳥羽院	120205	後鳥羽院	200107
後鳥羽上皇	120207		
後鳥羽院	120302		
後鳥羽院	120302		
後鳥羽院	120304		
後鳥羽院	120305		
後鳥羽院	120401		
後鳥羽上皇	120405		

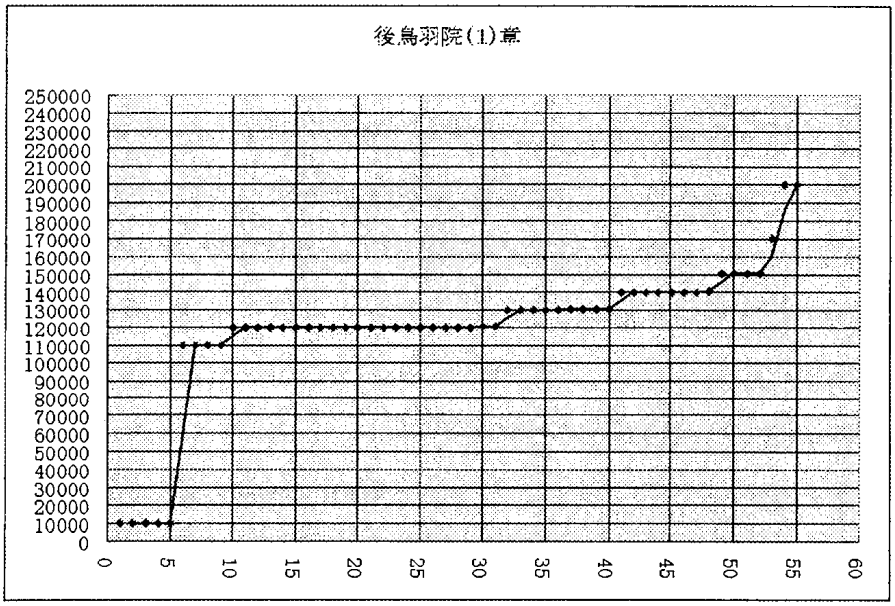
異なり	頻度
後鳥羽院	33
後鳥羽上皇	12
後鳥羽院以後	8
後鳥羽院順徳	1
後鳥羽天皇	1

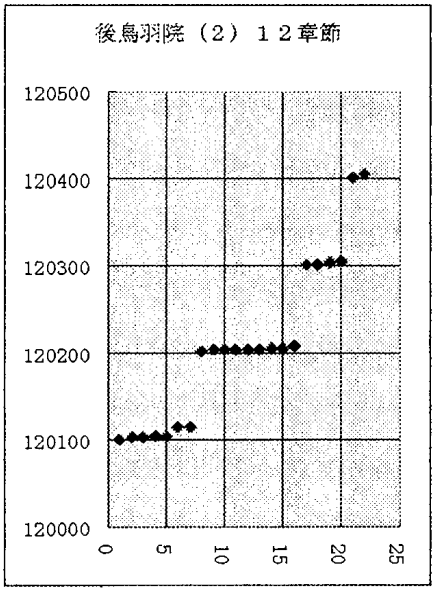
55

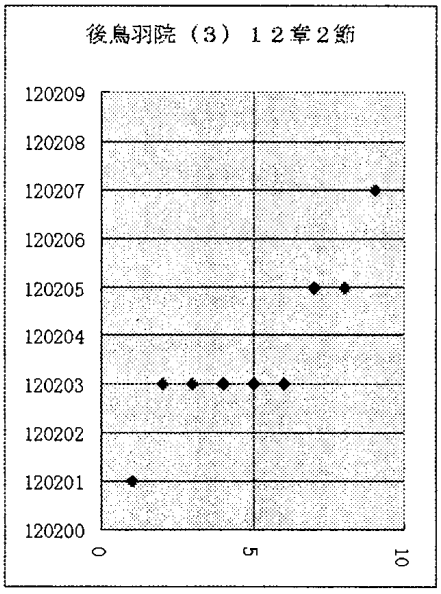
11. 2　「後鳥羽院」散布図

● 後鳥羽院（1）～（3）

後鳥羽院は一章「序説」に頻度5を持ち，9%（5/55）と重要な扱いをうけている。以後十一章「文学の道」7.3%（4/55），十二章「新古今和歌集」40%（22/55），十三章「遠島御歌合」16.4%（9/55），十四章「しきしまのみ







ち」14.5%（8/55），十五章「古典のまなび」7.3%（4/55）まで連続している。これらは平安時代末期から中世（鎌倉時代）を扱った章であり，後鳥羽院は代表的な中世型人名である。十二章二節に頻度9（16.4%）を見，同節第3段落に頻度5（9%）を得た。

11. 3 「後鳥羽院」分析

● **引用120203**

12020301-24「後鳥羽院の場合は，その御生涯に隠岐遷幸といふ厳粛な一線がひかれ，その文明上の御仕事も，一変と云ひうるやうなものがある。私は三十余年の以前に，後鳥羽院に関する著述をした。私の文人としての生成の信念は，後鳥羽院を中にして，前後に貫く歴史を，自身に貫くものであつた。日本の文学史は，過去の遺物でない。滅亡した民族のあとにすてられた遺品ではない。日本の文芸復興は，この点で欧州のルネサンスと，本質上で重大に異つてゐるのである。日本の文学史は，日本の文人にとつては，生命の本源となるものであり，創造の原因である。単に学ぶことの対象でない，学術といふ近代思想のものの対象ではない。明治文明開化以来，帝国大学が指導した，日本の文学史，文芸学，日本の美術史，美学は，みなこの点で間違つてゐた。近代思想をひきうつしにした，それらは空中にきづいたと思つた楼閣だつたにすぎない。しかも西洋楼閣のイミテーションだつたものは，日本のといふこの「日本」とは何のかかはりもない。一人の芭蕉の如き人が考へて実行した文芸復興は，西洋のルネサンスと，生命を念とした本質上全く異質だつた。この異質の理を，私は芭蕉のことばによつて教へられたのである。私の青年時代はそれによつて決定され，しかもやがてのうちに芭蕉に教へられたといふことを忘却するまでに，私はその考へにのつとり，またうち込んで考へた。この本質上異質といふことを解明するものが，わが国の文学や思想や精神を一手にとりあつめた文明観の上での「後鳥羽院」である。後鳥羽上皇の御教のままに生きるといふ，ただ一行のこの言葉を，芭蕉は私に教へた。この生きるといふことが，順徳院以降の日本の文学史を形成した先行文人たちの志にて，その生成の理だつたのである。誰もかれも，芭蕉が時宜に当つて明瞭に断じたこの一語を，心のたよりに生きただけだつたのである。この一語にいのちをよせて，源氏物語とて，いつもそれを懐中で暖めてゐたのである。源氏物語やまた古今集に対して，彼らはいつもこの一語をよんでゐただけである。決して近代の文学観など思ひはしなかつた。悲しいうれしいといつた感情露出のことばをのべる代りに，ものをさし示して，それにあはれをのべさせた。人がいふのでなく，いのち無きもの，あるひは往時の人の思想でいへば，こころなきものに，あはれをのべさせる。即ちそれがもののあはれである。」

● **分析のまとめ**

24文の比較的長い段落である。一般的な知識としては後鳥羽院が隠岐に流された事実，保田が『後鳥羽院』を著述したことがある。他は保田の後鳥羽院観

であり，それは同時に保田の文学観でもある。保田の考えを知るには適切な段落である。段落内容の分析から，一般知識２／５，保田固有知識４／５とした。

12　藤原定家（D：源氏型）

中世を代表する歌人，歌学者で藤原俊成の子。新古今和歌集撰者の一人で，後鳥羽院と共通の世界にいたが，性格的には院の資質に反発していたふしもある。源氏物語などの古典を整理するなど，地道な業績を多数残している。長大な日記『明月記』がある。

1162（応保２）－1241（仁治２）。

12. 1　用語集合「藤原定家」

● **藤原定家（0）**

テキストでは「藤原定家」の用例は一件もなく，すべて「定家」ないし「定家卿」である。定家卿十二世とは江戸時代初期の儒者藤原惺窩をさし，19010201-3「惺窩は定家卿十二世の孫に当たる，名門の出であつた。家学の当然として，国史国文への関心と研究に深甚だつた。没後に上梓された詩文集には，後光明天皇より御製の序を賜り，校訂は水戸光圀が当つた。」による。引用中，名門とは冷泉家であり，家学とは俊成定家を祖とする歌学，歌の伝統を指し，現代に至る。

12. 2　「藤原定家」散布図

● **藤原定家（1）～（3）**

十二章「新古今和歌集」に25.5％（12/47），十四章「しきしまのみち」に最大頻度46.8％（22/47）を持つ。典型的な中世型人名であり，パターンとしては後鳥羽院を小振りにしたところがある。十四章一節に密集した頻度を持ち，これは31.5％（17/54）となる。

同節第３段落に頻度９を得た。

12. 3 「藤原定家」分析

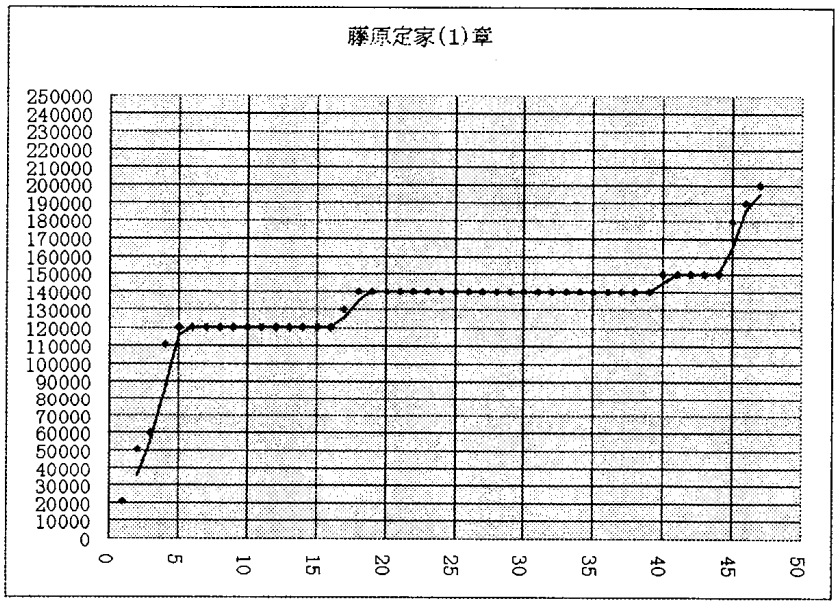
藤原定家(0)用語集合
総数:47 異なり：6

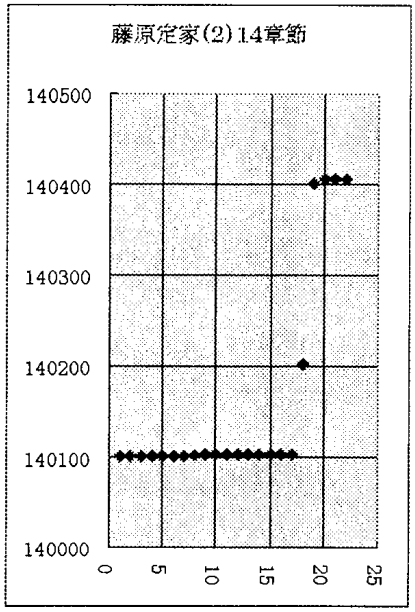
定家卿	20302	定家	140103
定家卿	50208	定家	140103
定家卿	60102	定家	140103
定家	110311	定家	140103
定家	120102	定家	140103
定家	120102	定家	140103
右近中将定家	120103	定家	140202
定家	120103	定家	140401
定家	120113	定家	140406
定家	120114	定家	140406
定家	120114	定家仮名遣	140406
定家	120119	定家	150101
定家	120119	定家	150102
定家	120401	定家	150401
定家	120406	定家	150401
定家	120406	定家	150403
定家	130101	俊成定家	180101
定家	140101	定家卿十二世	190102
定家	140101	定家卿	200106
定家	140101		
定家	140101		
定家	140101		
定家	140101		
定家	140101		
定家	140102		
定家	140103		
定家	140103		
定家	140103		

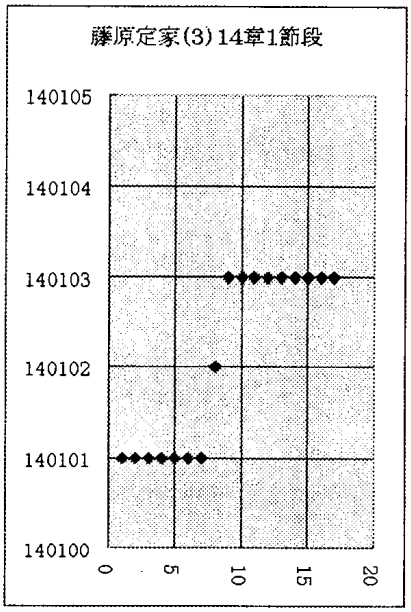
異なり	頻度
定家	39
定家卿	4
右近中将定家	1
俊成定家	1
定家仮名遣	1
定家卿十二世	1
	47

● **引用140103**

14010301-20「定家の志は，日本の文学の上にあつた。これを風雅{ミヤビ}といへば，即ちすめ神のみちであり，それは朝廷の風儀として現はれる。平安の女流の文学者の作品を校訂し，写本して伝へるとき，仮名字の遣ひ方を定める必要を悟つた。後の時代に対し，国と民に対する，末代の思ひだつた。悠久な志のあらはれである。定家は大歌人として武家時代を通じて絶大に尊敬された。近世国学が起つてからも，その批評とは別に，国学の先人たちはみな当然のこととして大きい尊敬と感謝を表してゐる。ものの考へ方の進歩をいふ見地からの判断でなく，文人の志の乱世に於ける発露である。王朝文学の劃期は，後鳥羽上皇の御教のままに，文明を守護し伝承するといふ志の文芸に変貌する時である。定家はかういふ状態の中で，この大なる民の志，国の思ひを，合理的と見える方法で整理し，その成果を伝へられた。歌人として神聖視された定家の作歌に，名歌と評しうるものは数首ある無しである。しかし定家は，日本の文学史の大歌人である。日本の文学史は，微々たる個性独創の如きが，人麻呂赤人といふ大歌聖のまへで，何程のものでもないといふことを十分に了解してゐた。この自覚の上で，大歌人が成り立つのである。この意味のことは貫之が云ひ，後鳥羽上皇も仰せられた。定家はその行状から，如何程にか名誉を求めた人と評するものが近代にはあつた。それは定家が，たまたま朝廷の近くにあつたからのことで，もし民間の文人ならば，さうした評判に当るものは，その同じままの行状の上で云ふことは出来ない。しかも定家はその堂上の環境を十分に生かした。日本の文学の歴史の上で，大事な時に出て，その時の必要とする大事を，殆ど十分に近くなしとげた人だつた。この定家が実朝に教へたことの一つは，万葉







集を与えたことだつた。」

● **分析のまとめ**

定家が新古今和歌集の撰者であったことへの言及がないことを除いて，一般的にも，保田独自の定家観としても，必要な知識がこの段落にはある。定家が仮名遣を定め古典を写本し整理したことの評価や，その他が丁寧に記されている。この段落では，引用14010319-10「日本の文学の歴史の上で，大事な時に出て，

その時の必要とする大事を，殆ど十分に近くなしとげた人だつた。この定家が実朝に教へたことの一つは，万葉集を与えたことだつた。」を最重要文とする。段落内容の分析から，一般知識４／５，保田固有知識５／５とした。

13　源実朝（Ｆ：実朝型）

鎌倉幕府三代将軍，源頼朝二子，右大臣実朝である。定家に学び「金槐和歌集」を編んだ。実朝の兄，二代将軍頼家は修善寺で北条時政によって謀殺された。実朝がその頼家遺児公暁に暗殺されたことにより，以後源氏の頼朝正統は断絶した。1192（後鳥羽・建久３）―1219（順徳・承久元）

源実朝(0)用語集合
総数:26　異なり：3

実朝	110205	実朝	140103
実朝	120113	実朝	140401
実朝	120113	実朝	150102
実朝	120113	実朝	150102
実朝	120113	実朝	150102
実朝	120206	実朝薨去	150102
実朝	130201	実朝	150310
実朝	130301	実朝	150310
実朝	130301	実朝	160401
実朝	130301	実朝	170303
実朝	130302		
実朝	130303		
実朝拝賀	130303		
実朝	130305		
実朝	130305		
実朝薨去	130306		

異なり	頻度
実朝	23
実朝拝賀	1
実朝薨去	2
	26

13. 1　用語集合「源実朝」

● **源実朝（0）**

二章「神話」三節に，02030206「源家の右大臣など，年わかく心すなほだつだので，定家卿の教を直截にうけた証をのこされた。」という文があり，右大臣も集合にいれてよいかもしれない。しかしこの文では，「源家の」と「定家の教を」まで限定しない限り実朝を特定することはできず，煩雑になり外した。「実朝拝賀」と「実朝薨去」とは，鶴岡八幡宮での正月拝賀と，そこでの公暁（実朝の甥）による実朝暗殺をさす。

13. 2　「源実朝」散布図

● **源実朝（1）～（3）**

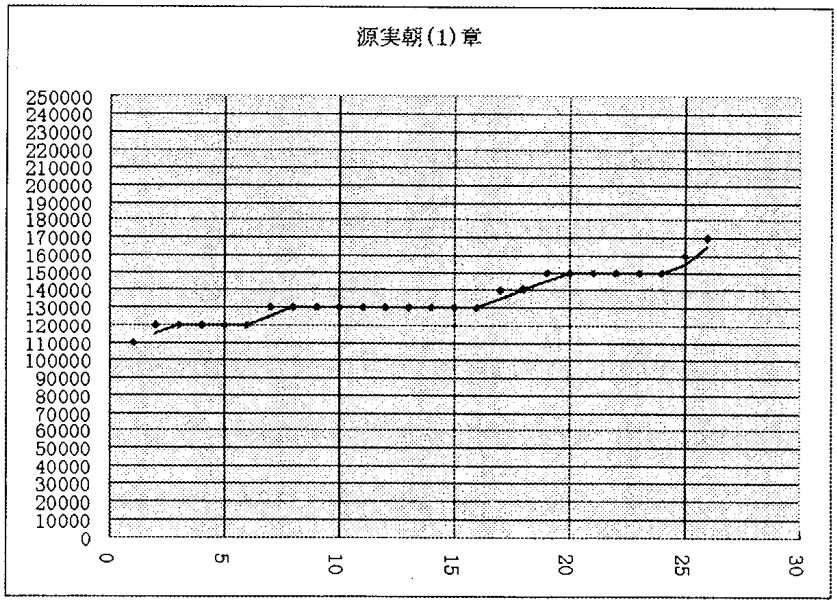
十二章「新古今和歌集」19％（５/26），十三章「遠島御歌合」38％（10/26），十五章「古典のまなび」23％（６/26）での頻度が顕著であるが，ほぼこの三章分に限られている。よってパターンとしては時代限定型人名に近い。

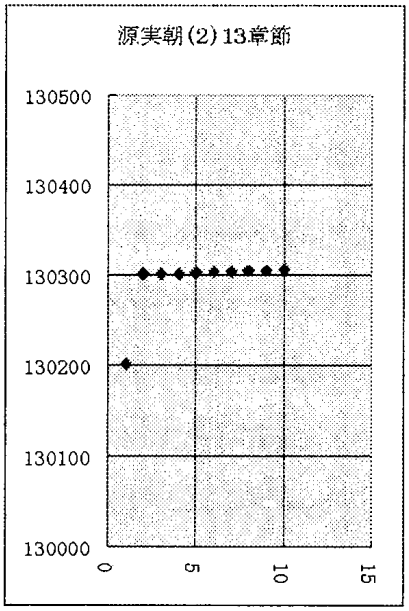
十三章をとり，その三節に９頻度35％（９/26）を見た。同章三節は六段落あるが，ほぼ均等に出現している。頻度３の第１段落を選んだ。

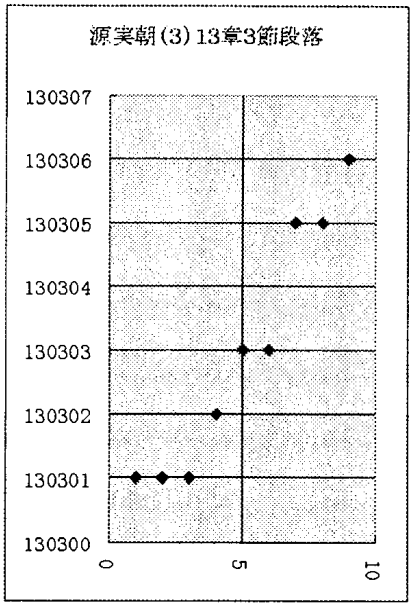
13. 3　「源実朝」分析

● 引用130301

13030101-7「実朝が右大臣に拝せられた時，関東にあつて拝賀の式をあげることの是非が，京都の問題となつた。坊門大納言は，格式もないところにて朝威失墜の因と







なると反対した。摂政良経はこれに対し，実朝の申すままお許しあるべし，旧儀を乱り格式を違せば，官職は私にあらず，と裁決したと「承久記」にしるしてゐる。多少舌足らずの表現が事情ありげに思はせる。実朝に対し，乞ふままに高官を与へられたのは，呪詛の意だつたなどといふ巷説は，官位といふものを，朝廷のまつりごとの風儀から了解してゐた時代にありうべきところである。これは例へば家柄を先とする歌舞伎役者の風俗を封建的といふやうな考へ方と，同型の如く見えて異質である。朝廷とかまつりごとが何であつたか，何を願つたかといふ歴史を考へると，この異質といふ理はわかると思ふ。」

● **分析のまとめ**

「実朝」が十三章「遠島御歌合」で顕著な出現を見たのは，時代的にも定家との関係においても妥当である。この第3節は，すべて実朝の鶴岡八幡宮境内での暗殺に関わる段落によっている。本書では「金槐和歌集」への直接の言及はなく，実朝が定家に学んだこと，そうして実朝のことが「承久記」や「吾妻鏡」に記されたこと，その死を悼む気持ちが建礼門院右京大夫集に残されていることなどに終始している。引用130301には，実朝に関する文学的一般知識情報はなく，いわゆる「官打ち」に関わる段であった。予測として「万葉集」「金槐和歌集」「実朝」の集合概念を期待したが，それは顕著にはなかった。

段落内容の分析から，一般知識2／5，保田固有知識2／5とした。

14　平家物語（B：芭蕉型）

「平家物語」は十三世紀初頭に成立した軍記物語である。作者は信濃前司行長（しなのぜんじゆきなが）という説がある。平氏壇ノ浦での滅亡時期（1185）から数えると，およそ三十年後に完成された物語として流布している。

14. 1　用語集合「平家物語」

● **平家物語（0）**

「平家」「平氏」は一般に家系として用いられるが，本テキストでの例では「平家物語」という軍記物語［平氏と物語］を語る視点から採った。

14. 2　「平家物語」散布図

● 平家物語（1）～（3）

高頻度51.5%（17/33）を示す十七章「乱世の態度」は，時代として南北朝のことである。すなわち保田は平家物語を太平記の中で扱っている。平家物語の成立時期に重なる十三章「遠島御歌合」では15%（5/33）と，十七章に次ぐ頻度をあらわしている。この対比から保田の平家物語に対する態度は，太平記を主にするものと推量できる。

十七章一節に用例が密集し，それは同節の後半段落になる。頻度5の第8段落を得た。

平家物語(0)用語集合
総数：33　異なり：5

平家村	40418	平家物語	170107
平家物語	40418	平家物語	170107
平曲	100301	平家	170108
平家	110211	平家物語	170108
平家	120207	平家物語	170108
平家	120207	平家物語	170108
平家	120207	平家物語	170108
平家物語	130201	平家物語	170109
平家	130203	平家物語	170204
平家物語	130203	平氏	170303
平家	130206	平家	170306
平家物語	130304	平家	170306
平家物語	140301	平家物語	190112
平家物語	150205	**異なり**	**頻度**
平家物語	160401	平家物語	20
平家物語	170105	平家	10
平家	170106	平家村	1
平家物語	170106	平曲	1
平家物語	170106	平氏	1
平家物語	170106		

33

14. 3　「平家物語」分析

● 引用170108

17010801-14「我々は，我が祖先の日本人の中に，その人々をもつたといふだけで今

[平氏と物語]

平氏「平家」ではあるが，物語の登場人物とみなしたもの

11021106「義仲は，おごる 平家 を追ひ落して，」

12020704-5「日本の庶民の大衆が，源氏を好き，平家 を好かないのは，平家 が権力を掌握する過程で行つた殺戮の残忍に眼をそむける感情に発してゐた。古い貞時の場合，今昔物語のべるところが実説かどうか知らないが，保元平治の両度の乱後，源家の人々がこらへた父子肉親の殺害は，平家 の謀事だつた。」

13020602「平家 が滅んでも，院政には何のかかはりもなかつた。」

17010810「平家物語を音曲師のかたりとして聞いた山村の人々が，何かの僅な縁故を思ひ出し，自分らが 平家 の落人だと思ひ定め，」

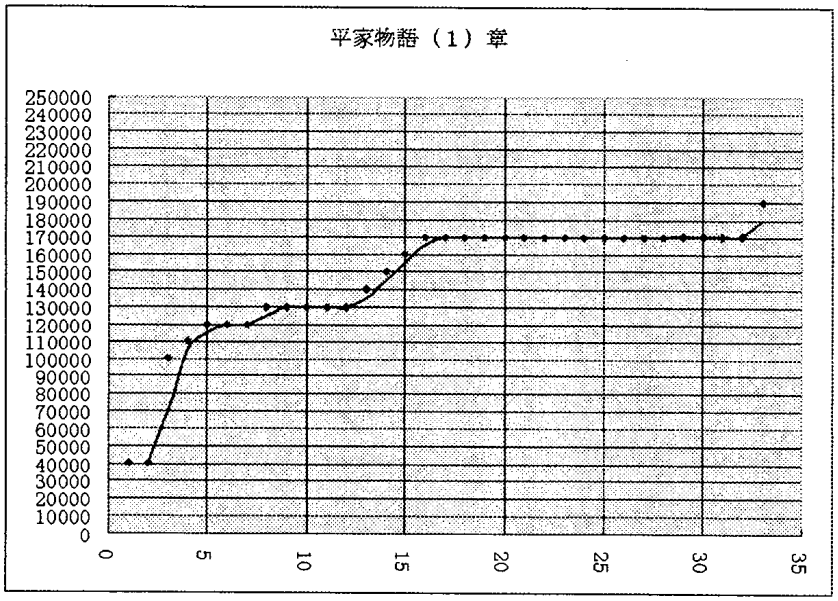
17030604「平家 の悲劇にくらべて，源家の英雄や天才のうけた悲劇の方が，深刻でさらに高次の教訓的であるのにもかかはらず，明治の洋学を学んだわかい文学者らは，西洋文学風の発想から，浅薄の悲劇の 平家 に同情したのである。」

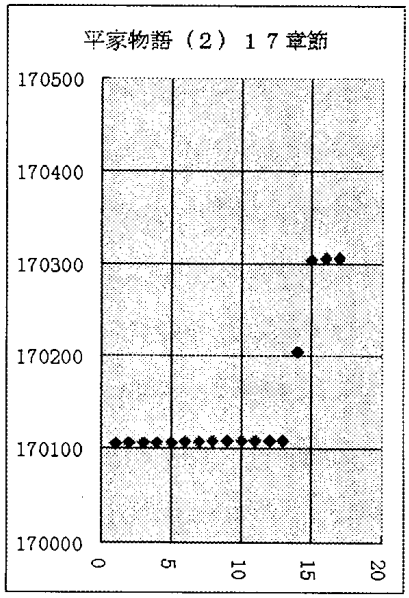
「平家物語」を明瞭にさしたもの

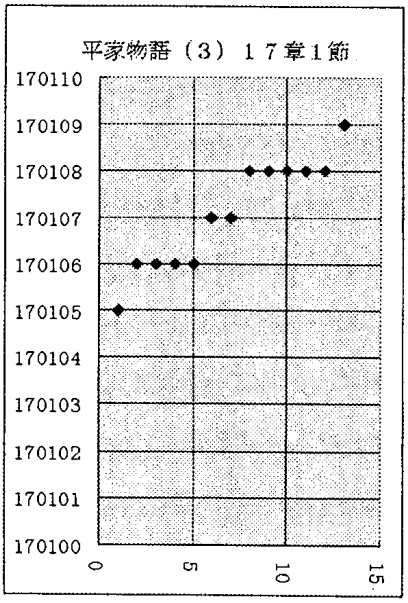
13020304「平家 が他の物語本より，」

17010604「それを 平家の物語 となづけたのである。」

日の生甲斐を思ふやうな人々が，いつの時代にもあつたのである。私の日本の文学史は，いはばさういふ人の名を唱へるだけのものでよいのである。私がもう少し円熟してものに対しうるやうなら，さういふ系譜の羅列に止まるであらう。私に必要な歴史は，私の生甲斐を証する人の名の羅列で十分である。我々は何かを知ることよりも，正しく美しく生きるといふことに目標をおくべきである。文学といへば，特別にさういふ生々しい，永久のものである。かういふ点で，文人は水墨の絵画も描くものだが，詩文をなさねばならぬとされたのは，東洋的な高尚観念にもとづくのである。ただ一時の多くの人々に読まれたといふだけで，文学作品を評価したやうなものは歴史書で







はない。平家物語は多くの人々によまれたといふよりも，久しくよまれたのである。平家物語を音曲師のかたりとして聞いた山村の人々が，何かの僅な縁故を思ひ出し，自分らが平家の落人だと思ひ定め，次第に自分らの「平家物語」をつくつたやうな，日本中いたるところの山村偏地にみる事実も，歴史的な見地でも全く間違ひでない。うそいつはりではなかつたのである。今日の史学の発想より正しい史観である。平家物語が日本の民衆の心情を醸成したとすれば，太平記は日本の文人の志を形成し，それを激化したのである。この二つの物語に描かれた女人の情をくらべても，太平記の女性は，一つの行為のつづきの如くに，何のためらひもなく，言ひ分や悟りも思はず，恋人のあとを追つてただごとの如く投身することが出来たのである。」

● **分析のまとめ**

引用170108は，保田の平家物語観として，太平記との対置において語っており，17010813「平家物語が日本の民衆の心情を醸成したとすれば，太平記は日本の文人の志を形成し，それを激化したのである。」とある。これは保田の考えとしては妥当である。しかし，平家物語を直截には語っていない。

段落内容の分析から，一般知識１／５，保田固有知識４／５とした。

15　北畠親房（BB：親房型）

北畠親房は歴史書「神皇正統記」の作者である。南北朝時代の公卿であり武将であり，かつ歴史思想家である。後醍醐天皇に仕え，南朝の思想的，実務的指導者であった。1292／３－1354？。

15. 1　用語集合「北畠親房」

● **北畠親房（0）**

親房には親房卿との尊称が多く，これには類例として家持卿がある。一般に学者，詩人と見られる者の出自に関して，公卿であることを鮮明にするための，保田の尊称用法である。用語集合に収めた「准后（じゅごう）」〔北畠准后〕は本テキストでは明確に北畠親房だけを意味する。用語集合に「神皇正統記」は採らなかった。これは同書が独立して12の高頻度をもつからである。しかし親房第一子顕家は

収めた。これは親房の思想を顕現させた公卿将軍としての意味であり，親房と同根のものとした。

北畠親房(0)用語集合
総数：30　異なり：7

親房卿	10203	親房	160203
北畠	10204	親房	160203
親房卿	10204	親房卿	160206
親房卿	10204	親房卿	160206
親房卿	10204	親房卿	160301
親房卿	10205	親房卿	160301
顕家	40111	北畠准后	220305
北畠准后	80204	准后	220305
親房卿	140405	准后	220305
親房卿	140405	北畠顕家	230402
親房	140406		
親房卿	160101		
親房卿	160102		
親房卿	160102		
親房卿	160105		
親房卿	160201		
親房卿	160202		
親房卿	160202		
親房卿	160202		
親房卿	160202		

異なり	頻度
親房卿	20
親房	3
准后	2
北畠准后	2
顕家	1
北畠	1
北畠顕家	1

30

15. 2　「北畠親房」散布図

● **北畠親房（1）～（3）**

十六章「南朝の文学」に最大頻度50%（15/30）をもつが，一章「序」に20%（6/30）を見る。序章に高頻度を持つものは，本テキストでは重要語である。

十六章二節に9頻度を見，第二段落に4頻度を得た。

15. 3　「北畠親房」分析

● **引用160202**

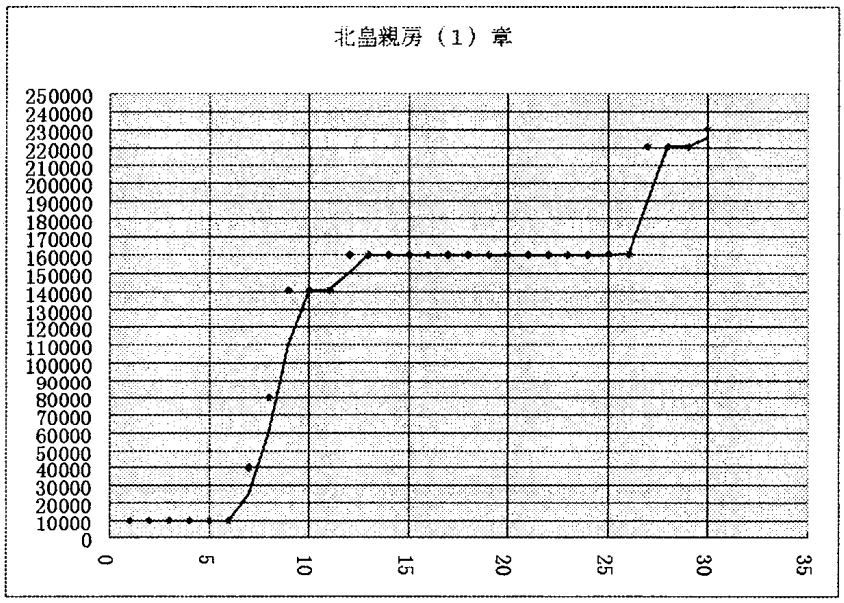
16020201-15「ここに 親房卿 の思想を批判するごときは，多少好学の青年にとつて，容易なわざである。しかし文学の第一義の大事は，さういふ所作にあつたのではない。思想論ほどたやすく，又むなしいものはない。批判によつて衒学を示すのも，また血気を示すのも若気に容易である。親房卿 が何を思はれてこの史書を著され，はたまた何がそれをなさしめたか，この悠久といふやうな文字によつて，又神々しいやうな言葉によつて，わづかにうかがへるやうな，人心の中の大きい宇宙の，その秘奥に少しでも近づきうれば，文学のよろこびここに極るの思ひが，おのづからにわく。南風

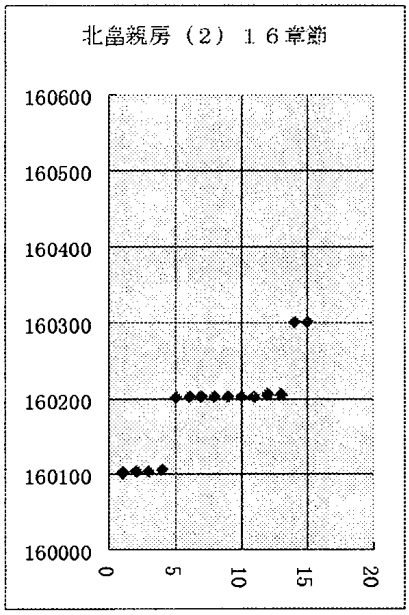
[北畠准后]「准后」の用例

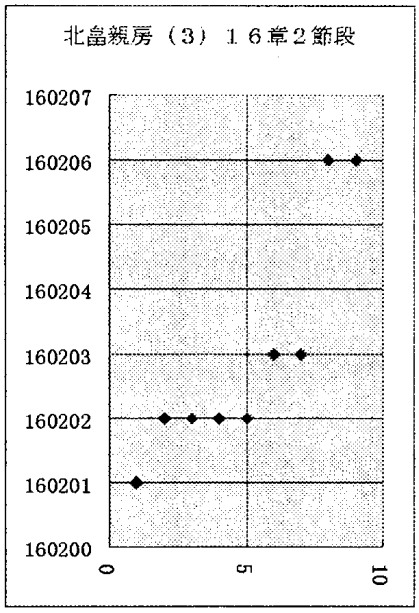
08020401「この井上内親王と皇子たちの流放は，藤原百川の陰謀だつたと，北畠 准后 も申されてゐる。」

22030505「北畠 准后 さへ新帝に対し奉つて，善政といふ観念をお教へするのに，これを認める如き口吻である。 准后 は，この善政の思想を第一義のものとして認められてゐたのではない。」

22030508「正統論のたてまへの論理が 准后 の第一義とされたものにて，これが大きい柱として立つてゐる。」







競はざる時代の戦場の中，わが兵を進退せしめる寸土の余裕もなかつた。武は停止し，禅林の義堂が幕府要人をおどかした類の「文」に何の迫力も考へられない時，親房卿の大きいいのちが発露したところ，かういふものこそ文章の本願であらう。その大きいいのちは，世にいのちといふものが，あしかびの如く発した日からつづくいのちの，今の相である。文章が経国の大業だといはれた真義や，その布衣の文人の信念は，文字で描いた思想といふ如き軽薄のものを指すのでない。文章からあふれて，人にいのちをよび起すもの，この創造の永遠の本願や，悠久を貫く悲願の動くところのことばと声，それが文学であり又詩である。さういふ生命の原始のものだけが，後

世の志士仁人の，その志をよび起し，人によつて行はれる創造の原因となる。親房卿が身ながらおのれを寄せてをられた，いのちの大なるものは，実に文明のこの祈念であつた。それがあらはれた時，詩は発し文学は世界をなす。この文学は，もはや無形相，文字の外にあつた。余韻とか余情といふやうなことばでいへば，もう少し軽い遊びの文芸の批評の場合ならば，まづは宜しからうといふことである。」

● **分析のまとめ**

親房を文学の中でとらえた保田與重郎の特色を表す段落である。また，その「親房」,「文学」の異色であるところも，この段落が表している。段落内容の分析から，一般知識１／５，保田固有知識５／５とした。

16　太平記（E：貫之型）

一四世紀後半（室町時代）に成立した軍記物語。歴史的事実の潤色が多いが，複雑な南北朝時代を理解するに適した歴史書といえる。

16. 1　用語集合「太平記」

● **太平記（0）**

「太平記」だけを選択した。

16. 2　「太平記」散布図

● **太平記（1）～（3）**

十六章「南朝の文学」に37%（13/35），十七章「乱世の態度」に48.6%（17/35）を見る。妥当である。

十七章一節に13頻度を持ち，これは十六章全体の頻度と同値である。十七章一節は９段落あるが，顕著に分散している。よって頻度２を持つ段落のう

太平記(0)用語集合
総数:35　異なり：1

太平記	120404	太平記	170104
太平記	160201	太平記	170104
太平記	160205	太平記	170105
太平記	160205	太平記	170105
太平記	160206	太平記	170106
太平記	160206	太平記	170108
太平記	160206	太平記	170108
太平記	160301	太平記	170109
太平記	160301	太平記	170109
太平記	160301	太平記	170302
太平記	160301	太平記	170407
太平記	160301	太平記	170407
太平記	160401	太平記	170407
太平記	160402	太平記	190112
太平記	170101	太平記	190112
太平記	170102	太平記	200403
太平記	170102	太平記	200403
太平記	170103		

ち最初のものを選んだ。

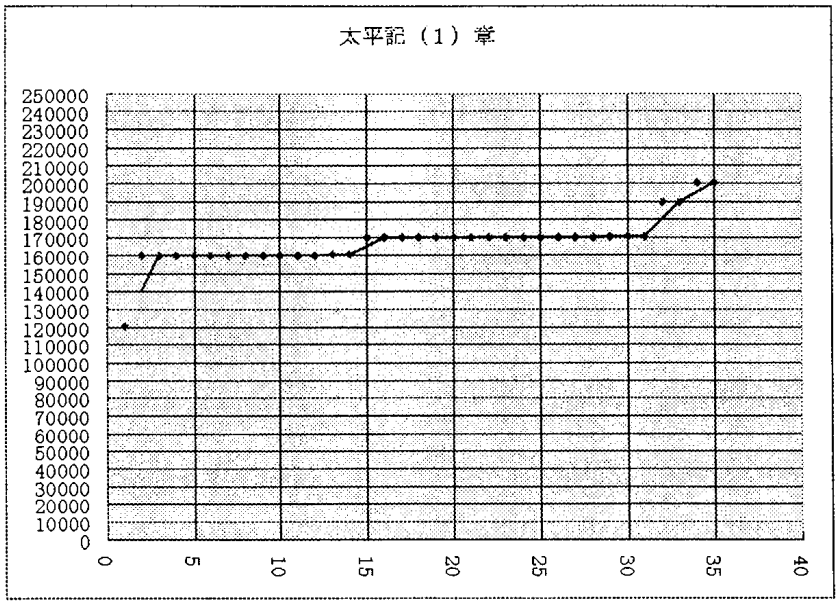
16. 3　「太平記」分析

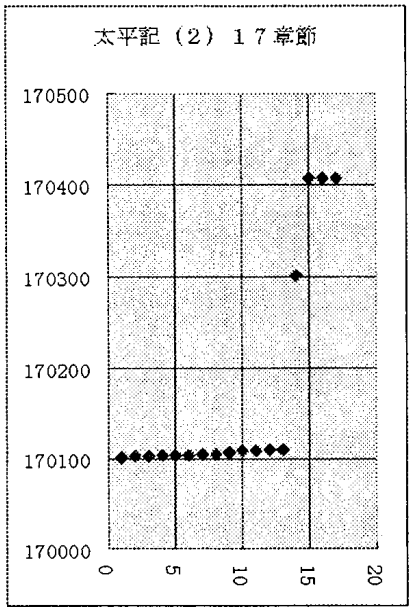
● **引用170102**

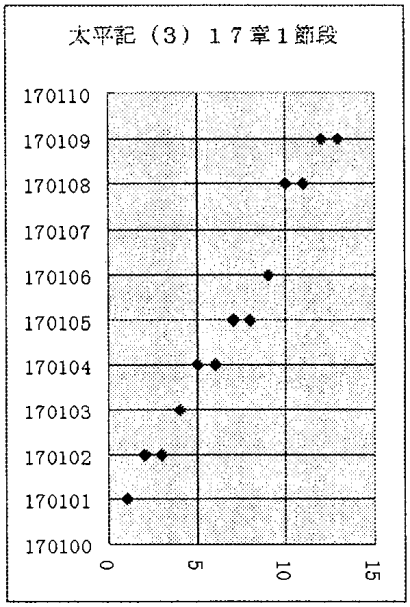
17010201-15「太平記の詩情は，近世のわが文学史を貫道した。志の高い文人の詩情を形成するのである。芭蕉のやうな文学の高士が，切迫した感情で，門下の一人を，彼は勇士にして，とほめるやうな時は，これが太平記の詩情のあらはれである。それはまた南朝の詩情である。この南北の区分は，日本国中に，漠然とした形であつた。激しい対立とか，さほどの敵対の関係ではない。風景と人情気質の異同ほどのものであつた。大和のやうな特別な土地では，それがよほど的確にわかり，今日の世相人情としても，まだ残存して，今でさへ別ちうるものがあつた。南北朝史をさほどには知らないアメリカ人が，大和の南北の気質の区別を自然に知つたことは，むしろ私を驚かした。アメリカの将校の一人が私に直接語つたのである。その将校は日本に関する学問をしたことから，志願して終戦後の日本へ来，さらに奈良へ赴任させてもらつたと云つた。その将校は，大和の人情を南は民主的北は封建的といつた。北には郡山藩などがあつたからだらうかとたづねたので，さういふ近世封建の影響などでなく，大和の人情気質は，南北朝以来のものだと教へた。外国人だから却つて，南朝地帯が民主的だと，素直にうけとることが出来たのである。これは今日の地方人と応接した時の印象だと，その将校は語つた。」

● **分析のまとめ**

十七章一節を選んだのは妥当であるが，その中の第２段落は，引用に見るように，適切とは言えない。この段落は，現代の大和（奈良）にあっても南北の気質に差があり，それは遠く太平記の時代にすでに違いがあったと，記している。南に吉野があり，そもそも南北朝争乱の淵源が，吉野の後醍醐南朝を成立せしめた大和南部の気質とするなら，「太平記」の知識として的を外しているわけではない。しかし一般的知識情報としては，この段落は妥当ではない。段落内容の分析から，一般知識１／５，保田固有知識２／５とした。







17　松永貞徳（D：源氏型）

貞徳は江戸時代初期，京の人である。貞門俳諧の創立者であり，俳諧を連歌から独立させ，俳諧の作法を確立した。保田は昭和十七年にも『日本語録』で貞徳の「はかなき絵草紙を見ても，其の撰者に一返の廻向あるべきものなり」を引いている。貞徳の細川幽齋（和歌），紹巴（連歌）らへの師恩によるところか。

17. 1　用語集合「松永貞徳」

● **松永貞徳（0）**

貞門は貞徳に含めた。貞徳を含む語は，貞徳（36），貞徳貞室（2），松永貞徳（1）と合計39件あり，この高頻度は源氏物語，定家，宣長と同じ水準である。

松永貞徳(0)用語集合
総数：45　異なり：7

貞徳	40416	貞徳	180405
貞徳	100302	貞徳	180405
貞徳	100302	貞徳	180405
貞徳	100302	貞徳	180405
貞徳	100302	貞徳貞室	180406
貞徳	100302	貞徳	180409
貞徳	100304	貞徳	190108
松永貞徳	160304	貞徳	190201
貞徳	180202	貞徳	200102
貞徳	180203	貞徳	200102
貞徳	180203	貞徳	200205
貞徳	180204	貞徳	200205
貞徳	180204	貞門	200205
貞徳	180303	貞門開基	200205
貞徳	180304	貞門	200205
貞徳	180304	貞門	200207
貞徳	180305	貞門全盛	210402
貞徳	180306	貞門俳諧	210406
貞徳	180306		
貞徳	180308		
貞徳	180401		
貞徳	180401		
貞徳	180403		
貞徳	180403		
貞徳	180403		
貞徳	180404		
貞徳貞室	180404		

異なり	頻度
貞徳	36
貞門	3
貞徳貞室	2
松永貞徳	1
貞門開基	1
貞門全盛	1
貞門俳諧	1

45

17. 2　「松永貞徳」散布図

● **松永貞徳（1）～（3）**

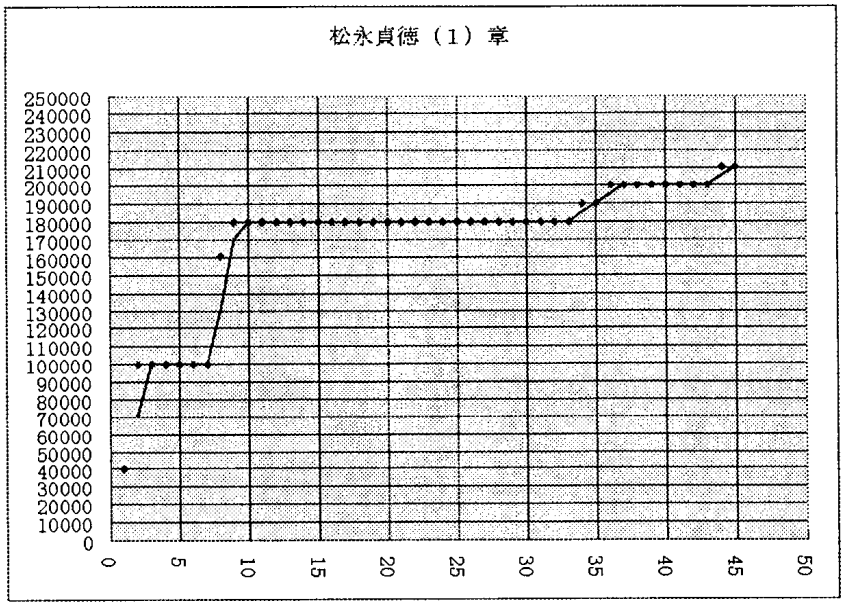
D：源氏型の定家と似たパターンを示す。十八章「乱世の文人」に約56%（25/45）の出現を見，これは章内容として妥当である。

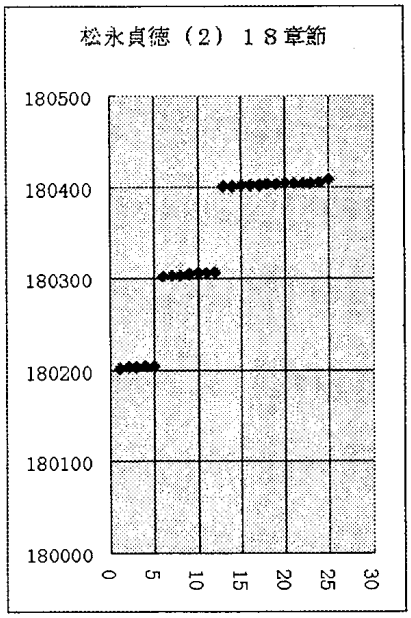
十八章四節に顕著な頻度を見たが，この節では二章，三章と暫増傾向がある。これは家持，芭蕉に似ている。十八章四節のうち，第5段を選んだ。

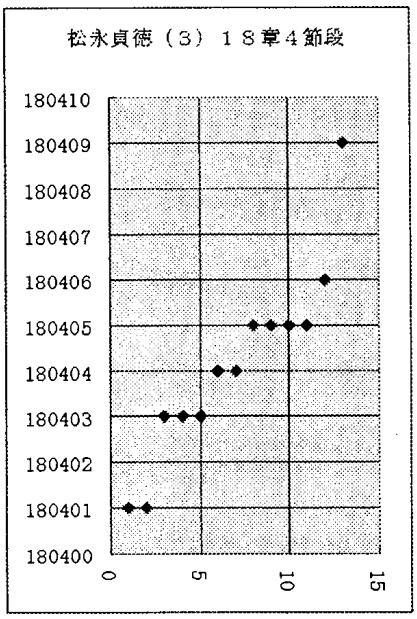
17. 2　「松永貞徳」分析

● **引用180405**

18040501-7「貞徳が玖山公に源氏物語を教はつた時の回顧は有名な逸話である。貞徳の子の松永尺五は近世初頭の碩儒だつた。尺五の門人の木下順庵が，十二三歳の頃貞徳からきいた話を，順庵門下の高足新井白石が「東雅」に書いてゐる。天正ごろから京言葉は尾張の方言によつてみだれ，近ごろ（慶長以後）は三河国の方言が移り来た，といふ話である。貞徳は十二三歳の頃から十年程，玖山公に学んでゐる。そのころきいた話を六十二三歳になつて，十二三歳の順庵に教へた。白石は師の順庵からきいたこの話を，年をへて自身「東雅」の総論にかきつつ，いかほどにも感慨ふかかつたことと思ふ。」







● **分析のまとめ**

引用180405では，貞徳が九条<ruby>植通<rt>たねみち</rt></ruby>（玖山）から源氏物語を学んだ頃の逸話が記されている。これは付録２―８「源氏物語」でも触れた。貞徳の学想が，九条<ruby>植通<rt>たねみち</rt></ruby>に始まり，松永尺五，木下順庵，新井白石に続くという，知識人の系譜が記されているのは，知識として妥当である。

段落内容の分析から，一般知識２／５，保田固有知識３／５とした。

18　芭蕉（B：芭蕉型）

俳人松尾芭蕉，伊賀上野にうまれ，京都で北村季吟に師事した。保田には『芭蕉』（昭和十八，新潮社）がある。『日本語録』では「夏炉冬扇」をあげている。1644（正保元）—1694（元禄七）

18．1　用語集合「芭蕉」

● 芭蕉（0）

「芭蕉（107）」の頻度は高く，「万葉集（112）」に匹敵する。保田の文学は「万葉集」と「芭蕉」にあると考えても間違いではない。本文中「桃青」はなかった。「蕉翁」が芭蕉をさしていることは本文で確認した。その他，蕉門，蕉風も採ったが，「芭蕉」の用例が極めて多い。

18．2　「芭蕉」散布図

● 芭蕉（1）～（3）

全時代型人名の出現パターンを持つが，二十章「国学の恢弘」では42%（52/124）の高頻度である。この章は江戸元禄時代を指しているので，芭蕉の活躍時期からみて妥当である。

二十章をとり，その四節に24.2%（30/124）を得た。同節は9段落あり，用語は均等に出現している。頻度7の第9段落を得た。

18．3　「芭蕉」分析

● 引用200409

20040901-19「後の蝶夢法師は，芭蕉と蕉門顕彰流布に生涯をかけ，文獻蒐集上でも驚くべき大事業をなしとげた。わが俳諧史上に功労第一の人であつた。法師は蕉門無数の俳人の中から，去来，丈草を双璧とした。私もこの批判を適正と思ふ。芭蕉生存中は，無慮数十人の英雄の俳士が天下各地に散在してゐた。日本の歴史の上で，未曾有の壮観だつた。膳所の菅沼曲翠は，芭蕉門下で勇士とたたへられた俳士の一人だつた。その妻女も文芸の名媛だつた。曲翠は藩を毒する一人の姦臣を，槍

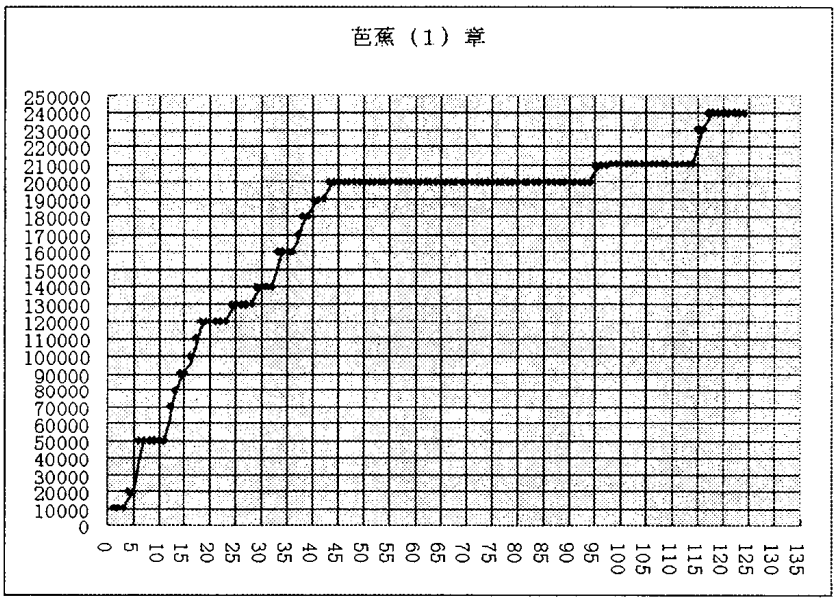
芭蕉(0)用語集合
総数：124　異なり：10

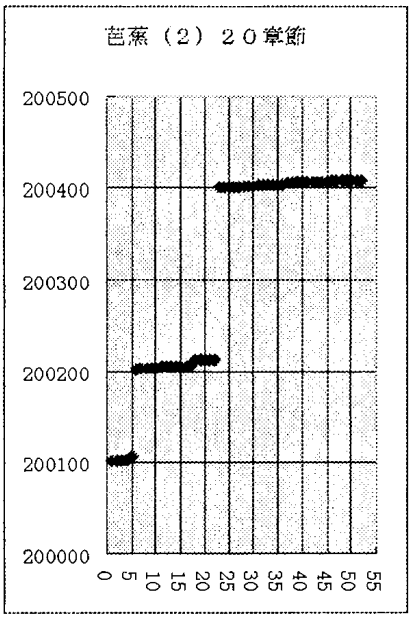
芭蕉	10101	芭蕉	160203	芭蕉	200402	芭蕉	210401
芭蕉	10110	芭蕉	160206	芭蕉	200403	芭蕉	210401
芭蕉	10210	芭蕉	170102	芭蕉	200403	蕉翁	210404
芭蕉	20208	芭蕉	180103	芭蕉	200403	蕉翁自筆	210404
芭蕉	20301	芭蕉	180304	芭蕉	200404	芭蕉	210405
芭蕉	50209	芭蕉	190201	芭蕉	200404	芭蕉	210406
芭蕉	50210	芭蕉	190205	芭蕉	200404	芭蕉	210406
芭蕉	50210	芭蕉	190308	芭蕉	200404	蕉門	210406
芭蕉	50210	芭蕉	200102	芭蕉	200404	蕉門	210406
芭蕉	50403	芭蕉	200102	芭蕉	200404	蕉門	210406
芭蕉	50406	芭蕉	200102	芭蕉	200406	蕉門関係	210406
芭蕉	70413	芭蕉	200102	芭蕉	200406	蕉門	210408
芭蕉	80102	芭蕉	200107	芭蕉	200407	芭蕉	230402
芭蕉	90302	芭蕉	200202	芭蕉	200407	芭蕉	230402
芭蕉	90401	芭蕉	200203	芭蕉	200407	芭蕉	240205
芭蕉	100301	芭蕉	200203	芭蕉	200408	芭蕉	240205
芭蕉	110206	芭蕉	200203	芭蕉	200408	芭蕉	240205
芭蕉	120203	芭蕉	200203	芭蕉	200408	芭蕉	240205
芭蕉	120203	深川芭蕉庵	200206	芭蕉	200408	芭蕉	240205
芭蕉	120203	芭蕉	200206	芭蕉	200409	芭蕉	240205
芭蕉	120203	芭蕉	200206	芭蕉	200409	芭蕉	240205
芭蕉	120203	芭蕉	200206	芭蕉	200409	芭蕉	240205
芭蕉	120302	芭蕉	200206	芭蕉	200409		
芭蕉	130101	芭蕉	200206	蕉門	200409		
芭蕉	130101	芭蕉	200207	蕉門顕彰流布	200409		
芭蕉	130101	芭蕉	200213	蕉門無数	200409		
芭蕉	130103	芭蕉	200213	芭蕉	210102		
芭蕉	130204	蕉門	200213	蕉門	210102		
芭蕉	140204	蕉門	200213	江戸座蕉門	210103		
芭蕉	140204	蕉門	200213	芭蕉	210302		
芭蕉	140204	芭蕉	200401	芭蕉	210302		
芭蕉	140301	芭蕉	200401	芭蕉	210302		
芭蕉	160203	芭蕉	200402	芭蕉	210305		
芭蕉	160203	芭蕉	200402	芭蕉	210305		

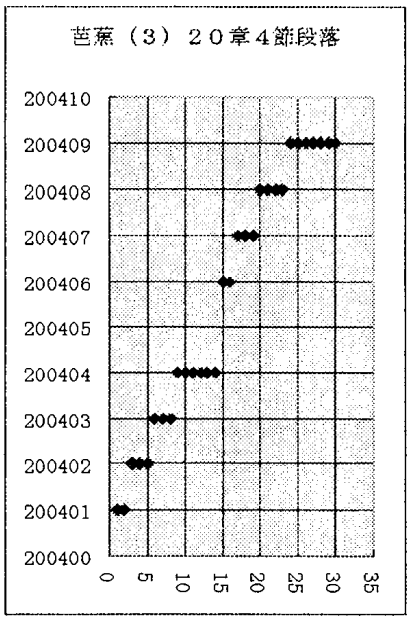
異なり	頻度
芭蕉	107
蕉門	9
江戸座蕉門	1
蕉翁	1
蕉翁自筆	1
蕉風	1
蕉門関係	1
芭蕉顕彰流布	1
蕉門無数	1
深川芭蕉庵	1

124

を以て我家の玄関で打果した。その者が，江戸藩邸の重臣として赴任するための挨拶に来た朝だつた。曲翠は一切は私闘によるとしるした遺書をしたためて自刃した。その長子も罪せられ，切腹を命ぜられ，家はとりつぶしにあつた。曲翠の妻は岸和田の生家へ帰る道中記を残してゐる。藩臣中志のある者は，私闘としるした曲翠の心中に声をのんで沈痛した。蕉門の俳人には，曲翠の志に通ふものを，多少己の一念とし







た人士が少くなかつた。人々の作句によつてその志は後世にも理解できるのである。元禄の文化の様相は，かういふ精神を根底としたものであつた。元禄といふ時代は，水戸光圀，契冲，芭蕉，あるひは大石良雄，かうした一人々々が国史上無双と評すべき人々が多数より集り，しかもその創造力は，何時でも暴発する如き状態をつづけた時代だつた。暴発はただの打上げに終らず，瞬間ののちに，玲瓏の山容を築いた時代だつた。」

● **分析のまとめ**

この段落は蝶夢をひき，当時の蕉門の隆盛と気風をかたり，最後に大津の菅沼曲翠に言及している。芭蕉の一般的知識としては不適切であるが，曲翠については保田晩年にあらたな考証も行っており，志士に通じる芭蕉像として，特色のある保田芭蕉観と位置づけることができる。

段落内容の分析から，一般知識２／５，保田固有知識４／５とした。

19　蕪村（ＦＦ：蕪村型）

与謝蕪村は摂津に生まれ，江戸天明期に活動した人であり，芭蕉復古につくした。保田『機織る少女』（昭和十八年九月，萬里閣）には「芭蕉と蕪村」がある。1716（享保元）―1783（天明３）

19．１　用語集合「蕪村」

● **蕪村（０）**

「蕪村」だけを選んだ。

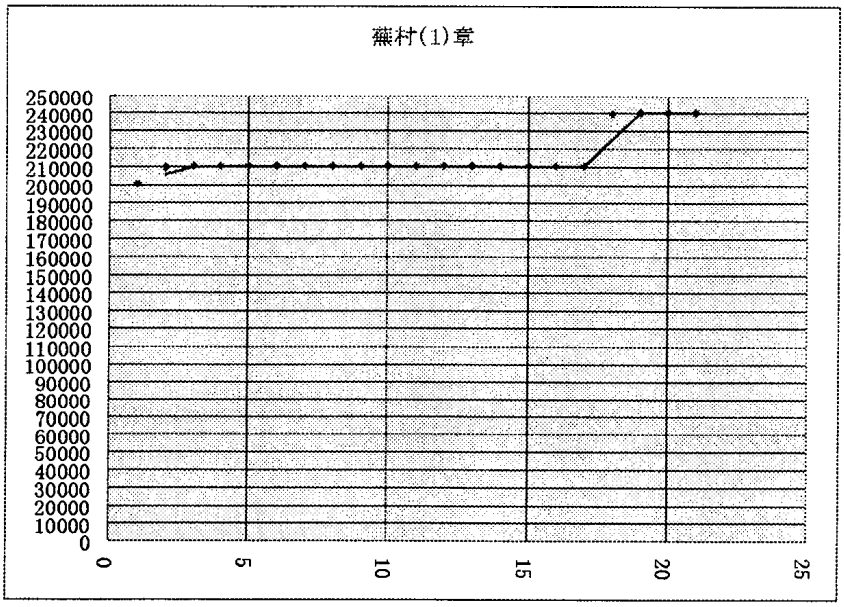
蕪村(0)用語集合
総数：21　異なり：1

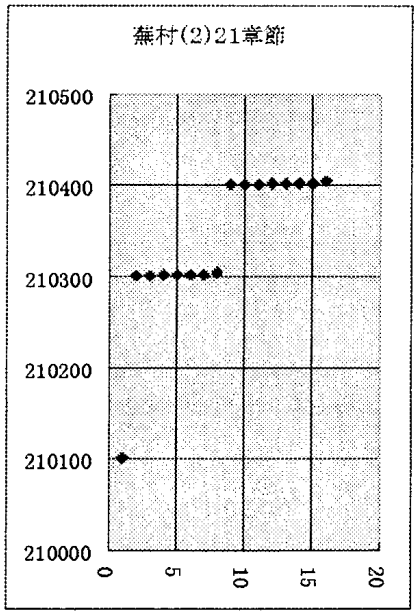
蕪村	200404
蕪村	210101
蕪村	210301
蕪村	210301
蕪村	210302
蕪村	210302
蕪村	210302
蕪村	210302
蕪村	210305
蕪村	210401
蕪村	210401
蕪村	210401
蕪村	210402
蕪村	210402
蕪村	210402
蕪村	210403
蕪村	210405
蕪村	240205
蕪村	240401
蕪村	240401
蕪村	240403

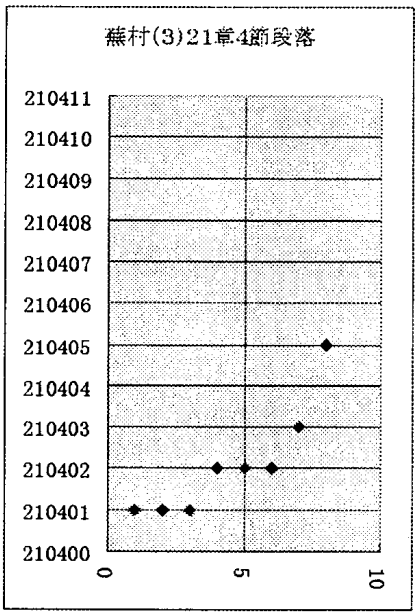
19．２　「蕪村」散布図

● **蕪村（１）～（３）**

「Ｆ：実朝型」の支流に分類される時代限定型の人名であるが，出現する章は少ない。二十一章「文芸の新しさ」に76％（16/21），二十四章「日本の文学の未来」に19％（４/21）ある。二十一章をとり，その四節に８頻度をみた。この章は４節構成であるが，三節にも７頻度をみる。同章四節は10段落あり，この第一，二に各３頻度を見，第一段落を得た。







19. 3　「蕪村」分析

● 引用210401

21040101-6「蕪村は享保元年大坂に近い毛馬村で生れたといふが，その少年時代については何も知られてゐない。俳諧者によつて五十回忌を営まれた時，すでに始終不明になつてゐた。俳諧の作品は晩年十年程のものがすぐれて，また美しい。生前は絵師としての名が高かつたやうだが，自身の俳諧に対する執心は深く，「昔を今」「玉藻集」のやうな編著となり，又「芭蕉附合集」の著作もなした。蕪村が芭蕉によせた敬慕の情は，蕪村の天稟のたのもしさを示すものである。また古典の文学に対する

愛惜は，その身ながらな味ひ方では，これほどに美しいその世界に住めた詩人といふのも，過去に類ない程だつた。」

● **分析のまとめ**

蕪村の一般的知識としては良好な選択となった。生年「享保元年」，生地「大阪，毛馬村」，職業「絵師」，作品「芭蕉付合集」，特色「芭蕉によせた敬慕」。しかし，保田固有の蕪村論はこの段落にない。保田は『機織る少女』「芭蕉と蕪村」で両者の違いをのべている。本テキストでは21030201「蕪村を芭蕉にくらべるのは酷と思ふ。」21030213「「何にこの師走の市にゆく烏」元禄二年の作なる，芭蕉のこの十七文字に，蕪村の描いた無数の烏の図をくらべることは甲斐ない。」などがある。段落内容の分析から，一般知識５／５，保田固有知識３／５とした。

20　契冲（B：芭蕉型）

国学者，「万葉代匠記」作者，摂津に生まれ，芭蕉とは同世代である。1640（寛永17）－1701（元禄14）

20. 1　用語集合「契冲」

● **契冲（0）**

用語集合には「契冲」が含まれているものだけを採った。阿闍梨とは密教系の僧位。長流とは国学者下河辺長流をさす。

20. 2　「契冲」散布図

● **契冲（1）～（3）**

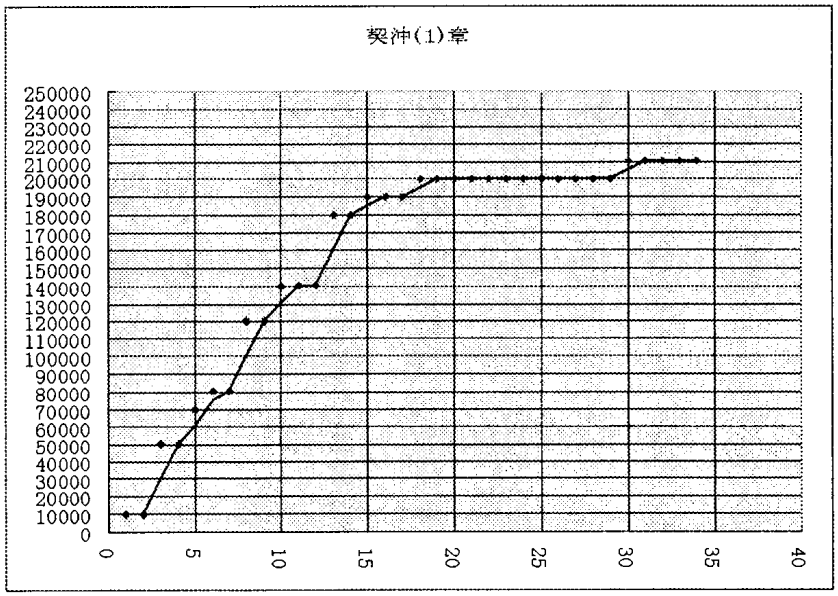
契冲（34）は頻度が芭蕉（124）に比較して２：５であるが，出現パターンに同質を見る。小規模な全時

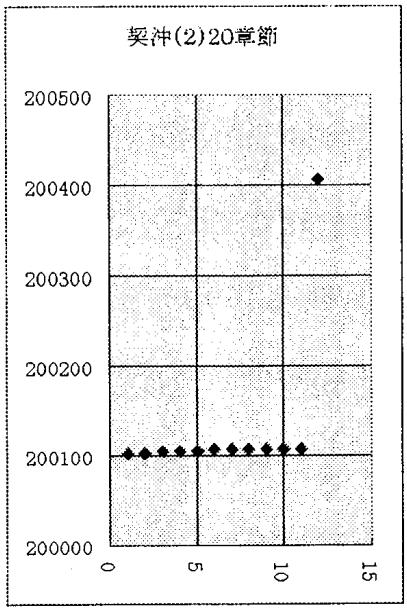
契冲(0)用語集合
総数：34　異なり：3

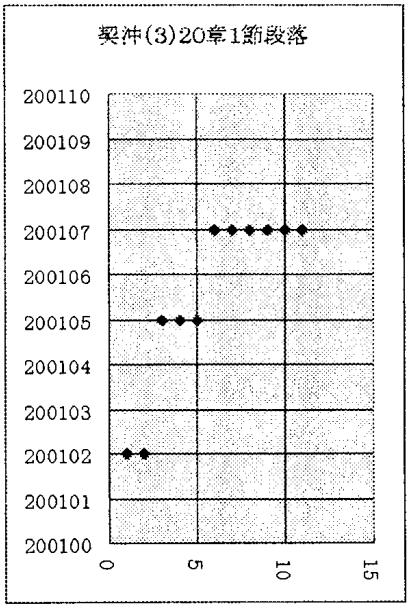
契冲阿闍梨	10204	契冲	200105
契冲	10204	契冲	200105
契冲	50208	契冲	200107
契冲阿闍梨	50208	契冲	200107
長流契冲	70204	契冲	200107
契冲	80301	契冲	200107
契冲阿闍梨	80301	契冲	200107
契冲	120114	契冲	200107
契冲	120114	契冲	200408
契冲	140101	契冲	210101
契冲	140401	契冲	210105
契冲	140406	契冲	210205
契冲	180409	契冲	210205
契冲	180409	契冲	210205
契冲	190201		
契冲	190208		
契冲	190308		
契冲	200102		
契冲	200102		
契冲	200105		

異なり	頻度
契冲	30
契冲阿闍梨	3
長流契冲	1
	34

代型の人名といえる。これは契冲が光圀の依頼で万葉集を注釈したことから，「万葉集」との関連箇所が多いと推測できる。芭蕉と同じく二十章「国学の恢弘」で35％（12/34）の頻度がある。二十章をとり，この一節の第７段落を得た。







20. 3 「契冲」分析

● **引用200107**

20010701-13「契沖は二十歳余りのころ，大和の長谷寺で修学してゐたが，何事があつたか，室生の龍穴へゆき，岩にわが頭をわれとうちつけて死なうとした。これほどの人のなさんとしたことについて，その理由のほどをみだりに想像することは愚意に詮ないことである。若い契沖が死ななかつたといふことが，私には霊異にあふに似た思ひをもつて感動されることであつた。この人が死なずして長流と親しんだといふことは，わが近世史に重大な決定的影響を及ぼしたのである。何時か幾日かは，契沖は死んでゐたのである。後の契沖は，「いかでわれむかしの人に似てしかないまの仏はたふとくもなし」といふ歌をつくつてゐる。「近世奇人伝」は契沖を評して「千歳の一人」とたたへた。契沖によつて，国語の法則は殆ど正され，その文法によつて古代の文芸が，誰人にもたやすくよみ味へるやうになつた。学者としての仕事以上の，文人としてなすべきことをなされたのである。しかしながら後鳥羽院以後の代々の詩人は，みな多少はさういふ志の仕事を文学の上でしてきた。文人の悲願，文学の目標は，彼らにあつてはいつも太陽の如く輝いてゐたから，その常住の貧苦も困乏も，その心のゆたかさのまへでものの数でなかつた。罪なくして配所の月を見んといふ思ひは，本邦文人の一つの安心を形成したものだつた。早くにさういふ心をもつて，それをわが身の処理と観じ，流浪の旅を生涯とした西行の生成の理を，後鳥羽院が「誠あり」と批評され，芭蕉はこの御一言に，つひの生命と生涯をかけたのである。」

● **分析のまとめ**

引用200107には一般的な知識はない。しかし保田の契冲観は丁寧に記されている。契冲若年の折りの自殺未遂に始まり，ここで死ななかったから「万葉代匠記」があり，それが我が国の文学に多大な貢献を果たした，というくだりが明快にでている。西行，後鳥羽院，芭蕉の三名が同一段落にあることからも，契冲が保田にとって全時代型の人名であることの証左となる。

段落内容の分析から，一般知識２／５，保田固有知識５／５とした。

21　本居宣長（C：宣長型）

江戸時代中期，伊勢松阪の国学者，開業医。「古事記伝」は三十五歳頃から七十歳ころまで研究した成果である。源氏物語，詩，言語学にも詳しい。松阪には記念館がある。1730（享保15）－1801（享和元）

21．1　用語集合「本居宣長」

● **本居宣長（0）**

用語集合には「本居」ないし「宣長」を含む言葉を選んだ。「本居」の用例二件は「本居翁」であり宣長をさす。「大人（うし）」を入れなかったのは，「本居大人」があることと，「大人」だけでの判定を恐れたからである。「本居」は宣長以外には後継者「本居太平」が一件あったが，とらなかった。

21．2　「本居宣長」散布図

● **本居宣長（1）～（3）**

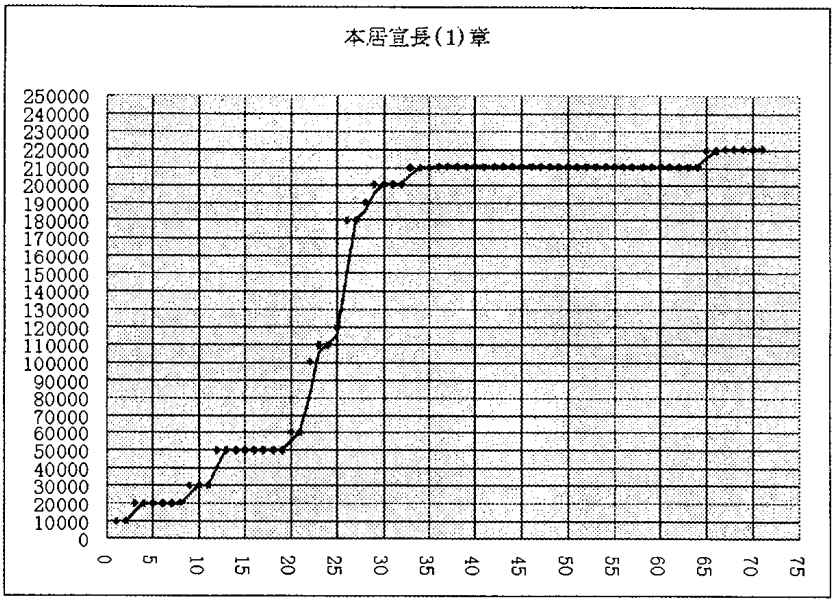
二章「神話」，五章「神を祭る文学」，二十一章「文芸の新しさ」で高い頻度を見，パターンは伴林光平と似ている。上代・近世型人名といえる。二十一章では45％（32/71）の頻

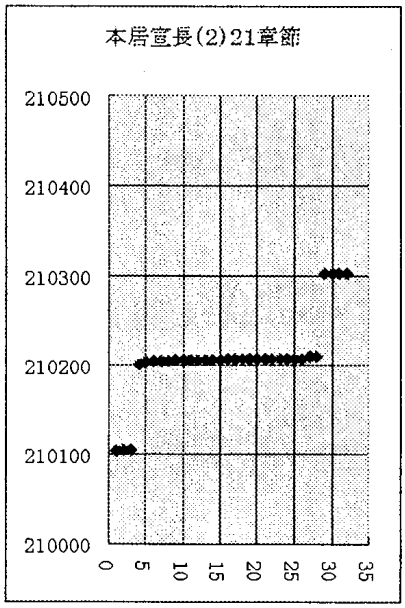
本居宣長(0)用語集合
総数:71　異なり：7

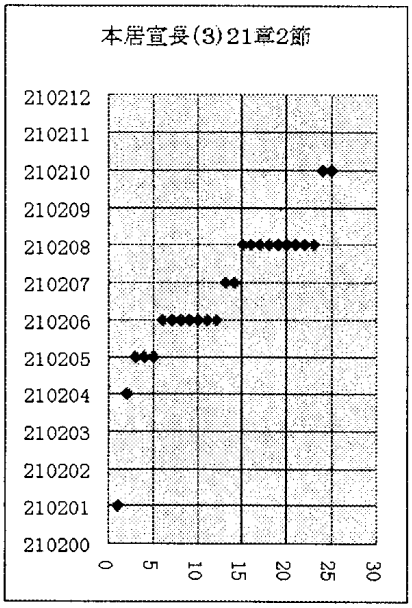
本居宣長	10106	宣長	210206
宣長	10110	宣長	210206
本居大人	20101	宣長	210206
本居大人	20101	宣長	210206
宣長	20102	宣長	210206
本居	20102	宣長	210206
宣長	20302	本居宣長大人	210206
宣長	20506	宣長	210207
宣長	30205	宣長	210207
宣長	30206	宣長	210208
本居大人	30206	宣長	210208
本居大人	50502	宣長	210208
宣長	50504	宣長	210208
宣長	50504	宣長	210208
宣長	50504	宣長	210208
宣長	50504	宣長	210208
本居	50505	宣長	210208
本居学	50505	宣長	210208
本居学派	50505	宣長	210210
宣長	60109	本居学派	210210
宣長	60202	宣長	210303
本居宣長	100408	宣長	210303
本居宣長	110103	宣長	210303
本居宣長	110104	宣長	210303
本居宣長	120114	本居宣長	220105
宣長	180409	宣長	220109
宣長	180409	本居宣長	220301
宣長	190208	宣長	220305
宣長	200105	宣長	220305
本居宣長	200105	宣長	220307
宣長	200302	宣長	220419
本居学派	200302		
本居宣長	210104		
宣長	210105		
本居学派	210105		
宣長	210201		
宣長	210204		
宣長	210205		
宣長	210205		
宣長	210205		

異なり	頻度
宣長	50
本居宣長	9
本居学派	4
本居大人	4
本居	2
本居学	1
本居宣長大人	1

71







度である。二十一章をとり，その二節に25頻度を得た。これは全体の35％（25/71）であり，かつ二節に集中している。二節内では第６，８段落に密集を見，９頻度の第８段落を得た。

21. 3　「本居宣長」分析

● 引用210208

21020801-10「宣長が黄老の思想と，皇国の道を弁別した論理は，極めて精緻で，その古道の解，ならびにもののあはれの実体を悟る上の手がかりとなるものである。宣長がその学問処世の上で，藩利民福を計るなどといふ儒者に共通した方向に全然興味をもたなかつたのは，その学風や態度気質から当然のことと思はれる。また朝廷盛時の美的雰囲気をその形の方から子細に描き出されながら，唐風の制度政治の体系や思想などに何の興味をももたれなかつたのは当然だつた。宣長の思想にもとづいて，所謂道徳とか政治の考へ方を説くものは，鈴木重胤の「祝詞講義」に帰すべきであらう。重胤は平田篤胤の門に列つたが，平田派の気質にそぐはぬところがあつたらしく，その横死については云々の推説もあるが，最期の悲惨は語るに耐へない。ただ彼の著作の延喜式祝詞の講義は，宣長の「古事記伝」と，雅澄の「万葉集古義」と鼎立する近世の三つの大文学である。しかし「祝詞講義」も「万葉集古義」も，宣長の古学開顕があつたゆゑに出現したものであつたことは，重胤がその著述の中で，宣長への敬慕と感謝をしばしば語り，つひには宣長はまことに神の如き人であつたと嘆息してゐる。この宣長を念とした時の詠嘆は，篤胤の著作中にも見えるところである。重胤は延喜式祝詞を以て，これこそ皇国の大法を示すものにして，国の憲法なりと説いた。かりに政治経済の論としての面をとれば，宣長の道の思想を最も近くにゐて最も明らかに示したそのものである。」

● 分析のまとめ

宣長が唐風経世済民に興味を持たず，朝廷の美と政治官制との峻別をしていた，などの解釈がある。後半の段落が選ばれたことにより，ここでは宣長の影響が記されている。尊皇派と交際を持ち暗殺された重胤（しげたね）は，宣長を神の如き人と嘆息し，古事記伝，万葉集古義にならぶ「延喜式祝詞講義」を完成させたと記す。一般的知識としては十全ではないが，宣長の考えや，その影響を重胤に見た点で，保田の特色ある説明箇所であると判定できる。平田篤胤と宣長の関係はテキスト全体を通して無い。篤胤は斎部広成の『古語拾遺』について，03010501「近世に入つてからの多くの国学者はこの書を尊んだが，わけても平田篤胤はこの遠世人の志と思ひに感動極るものを味はれたのである。」の言及があるだけである。残りは，重胤が一時期篤胤門下にあった，という事実認定であった。

段落内容の分析から，一般知識２／５，保田固有知識４／５とした。

22　伴林光平（ともばやしみつひら）（C：宣長型）

光平は『南山踏雲録』の著者で，天誅（ママ）組の同志である。河内国道明寺村の寺家の出であった。国学は伴信友に学んだと，『日本語録』にはある。五十二歳京にて天忠組同志とともに斬首。明治二十三年，従五位，靖国神社合祀。1813（文化10）－1864（元治元）

保田には『評註南山踏雲録』小學館，昭和十八年，四百三十三頁の大著がある。

22．1　用語集合「伴林光平」

● **伴林光平（0）**

「伴林光平」「光平」の二件である。

22．2　「伴林光平」散布図

● **伴林光平（1）～（3）**

二十二章「志士文学」で79%（27/34）の高頻度を見るから，パターンとしては近世限定型の人名ともできるが，宣長と同じく古代でもいくつか取り上げられているので，上代・近世型人名とする。注には五章「神を祭る文学」での出現段落［光平］をあげておいた。

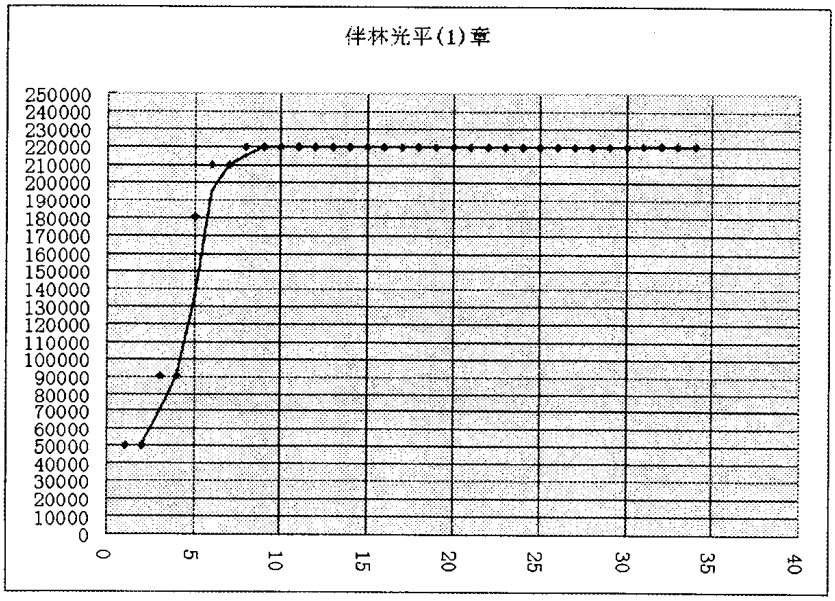
第二十二章では，一節に13頻度，二節に10頻度を見，第一節を選んだ。同節は後半段落に均等な出現を見，そのうち頻度５の第７段落を得た。

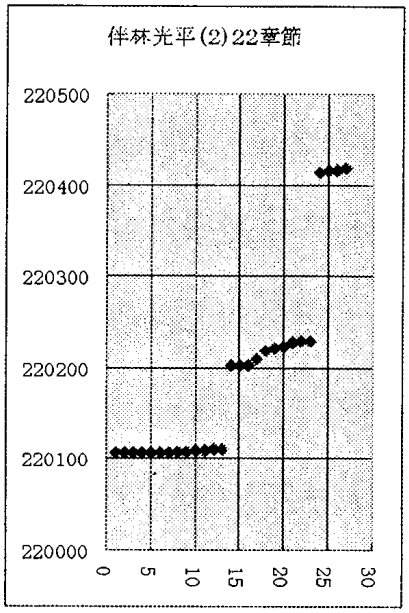
伴林光平(0)用語集合
総数：34　異なり：2

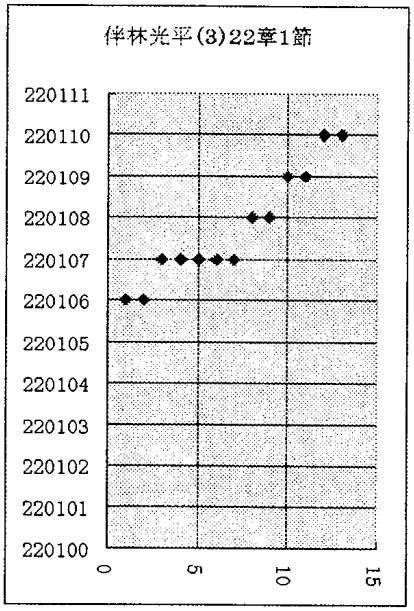
伴林光平	50206	光平	220110
光平	50206	光平	220202
伴林光平	90411	光平	220202
光平	90411	光平	220202
伴林光平	180406	光平	220210
伴林光平	210211	光平	220218
伴林光平	210211	光平	220222
伴林光平	220106	光平	220223
光平	220106	光平	220227
光平	220107	光平	220229
光平	220107	光平	220229
光平	220107	光平	220414
光平	220107	光平	220416
光平	220107	光平	220416
光平	220108	光平	220419
光平	220108		
光平	220109		
光平	220109		
光平	220110		

異なり	頻度
光平	28
伴林光平	6

34







22. 3　「伴林光平」分析

● **引用220107**

22010701-14「吉野山中を脱出した光平は，一両日は三輪山麓の茶店に身をひそめてゐたが，つひにそこを出られる。十余家家禄併せて百九十万石が動員された「姦賊」の軍兵の充満する大和平野を横ぎつて，生駒山中に入られた。ここの峠に関所を構へてゐた奈良奉行所役人たちは，先生が目のまへの国境一つを越えくれることを待

ち願つた。光平翁は幾度も往還し，地理は明るい。この時五十一歳の光平翁はすでに悠久の生命に生きてゐたのであらう。翁は役人のまへで峠の茶店に入り，ゆるゆると食事をとり，あげくに役人を招きよせ，歌をかき与へたりされた。役人たちの多くは，この高名の国学者を畏敬してゐたのである。他領へ脱出されることを願つてゐた。しかしかかる際で，あくまでのがれて生命を永らへることが，真に生きるの道なるか，はた功を以て栄達にかへる思惑なるか，その機に際する判断を予め慮ることは，難しい平常心の態度である。当時光平は畿内一帯にかけて数百十の門下をもつてをられた。天忠組挙兵の報を大坂できくや，全く取るものもとりあへず，深夜そのまま出発し，ひたみちに歩きつづけて，翌夜五条陣営に到着した。この間の行程二十余里である。天忠組は「天誅組」とも称へている。光平は天忠組と書いた。」

● **分析のまとめ**

引用220107では光平が吉野（南山）を下り，生駒から河内へ逃亡するくだりを記している。保田は戦前に『評註南山踏雲録』で光平の伝記も記しているので，この描写は物語のように理解しやすい。光平が天忠組同志であること（幕末志士），多数門弟を持つ国学者であること，五十一歳と高齢であったことなど，多くの一般知識と，あわせて保田独自の光平観がこの段落にはある。

段落内容の分析から，一般知識５／５，保田固有知識５／５とした。

[光平] 第五章「神を祭る文学」に見る「伴林光平」
05020601-9「祝詞式の大体は，わが国の文学として最高のものといふことは，文学といふものを意識的に考へだした近世国学の，一つの竟極的なうけとり方である。古代の巨石の造形を美的造形の最高においた感動と同じ心のものである。真淵大人あたりからの考へ方である。ここで考へといふのは実践を伴つてきたといふ意味をふくめてゐる。大阪の陽明学者大塩中斎は時世も次第におしつまつた頃に出たので，文学はただ神を祭る文学のみなる時代を理念として，諸悪打倒のため挙兵され，さらに少し時代をへた伴林光平｛トモバヤシミツヒラ｝になると，一層切実にその心境を多数の歌に歌ひ上げた。光平翁の歌は，近世文学上最大の歌人の遺品である。私はそれを最高の文学作品と信じてきた。これらの両先人は，死によつて志の永遠を実証してゐるのである。志の文学を実践し，そのために死し，また神を祭る文学のみだつた大御代を念願とし，その将来を信じ，その日に生れなかつたことをわが不運とし，志に死することを歓喜としてゐる。」